
妖魔界

山本吉矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖魔界

【Nコード】

N1736F

【作者名】

山本吉矢

【あらすじ】

突然、異世界に飛ばされた一人の少女。彼女はこの世界を救わな
いと戻れなくなってしまった。武器も無しに知恵と勇気で危機を乗
り越える事に。「友情」がテーマの異世界ファンタジー冒険です。

プロローグ

「そうか……。今はそういう状況か……。」
俺はその事実を聞いて愕然とした。

もう間もなくこの世界は滅びようとしていた。

おそらく……。あいつが原因だろう。

「くっ……。！」

どうにもならないのか!!

「ルドルフ様……。唯一解決する方法があります」

「何だ？それは……。」

「かなり危険な賭かもしれませんけど……。妖魔ハンターを呼ぶ事です」

「なんだと!!」

馬鹿な……。

「それがどんな存在か……。分かってて言うてるのか!？」

妖魔ハンター……。

それは俺達、妖魔にとって天敵だ。

一度だけこの妖魔界に現れた事があるが、その時全滅一步手前まで追い込まれた事がある。

「そんな事をすれば、この世界を滅びるのが加速するだけだ!」

「お待ち下さい!実は……。今の妖魔ハンターはこの妖魔界を滅ぼす訳ではありません」

「なんだと……?」

「今の妖魔ハンターは……。この世界の事を考えてくれます!」

まさか……。

「確かに……。にわかには信じれないかもしれませんが……。ドルイドのオババがそう言っているのです」

「ドルイドのオババが!!」

オババの占いは百発百中だ。

そのオババがそう言うのなら・・・。

「分かった・・・。呼んでみるか」

それでこの世界が救えるのなら・・・。

危険な存在であろうとも望みを託すのみ。

第1章 城

いつもと変わらない平和な日。

それはいつまでも続くと当たり前のように思っていた。

だけど、お姉ちゃんがお隣のお兄ちゃんと一緒に旅行に出かけた。

お姉ちゃんはいつも思いついたらすぐに行動しちゃうのよね。

かなり羨ましいと思う。

お姉ちゃんはいつでも前向きで、すぐに行動する。

私には無い部分。

ふう……。

いいのよ。

私はこれで。

あまり物事に首を突っ込みたくない。

こうしてのんびり歩くのも悪くないし。

いつものように買い物に出かける。

今日は何を買おうかな。

うん。

私はこういづのが合ってるのよ。

「見つけた!!」

え……?

何……!?

辺りを見渡す。

今……変な声が聞こえたような気が……。

「頼む!!助けてくれ!!」

やはり……声が聞こえる。

男の人のような……。

しかも……助けを呼ぶ声が。

でも……何処から?

「お願いだ!!」

え・・・？

「きゃ！！！」

それはすぐ目の前にいた。

何・・・これ・・・！？

男の人が立っていたけど・・・。

微妙に違う部分がある・・・。

それは・・・。

黒くてコウモリのような翼がある事。

「お願いだ！あんたの力が必要なんだ！！！」

そう言ったけど・・・まだ状況が理解出来ない。

だって・・・信じられない存在が目の前にあるんだもの・・・。

なっ・・・何！？

「頼む！！！」

その男は私の腕をつかむと同時に、周りが光りに包まれた！

「な・・・何！？」

第1章 2話

ここは一体・・・？

辺りを見渡す。

まるで知らない所。

空は真つ暗で何処からか明かりが漏れているのか、一応何処になにがあるのかは分かる。

だから今私がいるのが平原だという事が分かる。

でも・・・今まで見たこと無い光景だわ。

これは夢・・・？

ほっぺをつねってみる。

痛い！

夢・・・じゃないみたい。

改めて周りをじっくり見渡す。

あれ・・・？

さっきは気づかなかったけど。

遠くにお城が見える。

日本にあるようなお城じゃなくて、西洋とかにあるようなお城。

なんだろう・・・？

とりあえず行ってみよう。

しばらく歩くとそこにたどり着く。

門が開いているって事は入ってもいいのかな？

「すいませーん！！」

一応声をかける。

だけど・・・物音一つしない。

人がいないのかしら・・・。

ちよつと不安になる。

恐る恐る中に入る。

お城の中・・・もちろん始めて入るけど・・・。

こういうものなのかしら。

誰もいないってのが不気味だけど。

さらに奥へと進む。

相変わらず誰もいない。

ここは無人的なかしら……。

二階へと続く階段が見える。

ふと。

そこに何か肖像絵があるのが見えた。

大きな絵。

そこには一人の女性が描かれている。

その女性は鎧に身を包み、剣を持っている。

なんだろう……？

とにかく……上ってみよう。

本当に誰もいないのかしら……。

あれ……？

たいまつに火がついている。

人がいるのかな……。

「すいませーん」

声をかけつつ、そこに入る。

その一番奥に大きな椅子があった。

そこに誰かいるみたい。

「あつ、すいません。勝手に上がり込んで……」

「構わない」

静かに答える。

「あ……。すいませんけど……ここ何処ですか？ちょっと迷

ってしまって」

「迷ったんじゃない。君は呼び出されたんだ」

え……？

「あつ！……あなたは！」

それは、さっき私の前に現れた男！

「何故？私を・・・？」

「君は選ばれたからだ」

え・・・？

選ばれた・・・！？

第1章 3話

「まずは何処から話そうか・・・」

「そうね・・・。まずはここは何処なの？」

率直な意見だった。

何せ見たことも無いような場所。

何処か分からないと話しても進まない。

「そうだな・・・。信じられない話しかもしれないが・・・ここは妖魔界だ」

「・・・へ？ようまかい??？」

何それ？

「この世界はいろんな世界がある。神々が住む世界の神界、死者達が訪れる冥界、そして君達が住む人間界と俺達が住む妖魔界だ」

何それ・・・？

「ふざけてんの？」

「君だつてもう分かつてるはずだ。ここが君達の住む世界とは違う事を」

・・・それは・・・何となくだけ分かっていた。

何せ太陽も月も無いのに周りが分かるような明るさがある事。

この事で何か妙な感じはあつたけど・・・。

それでも何やら信じられないような・・・。

「だいたい俺だつて人間じゃない」

そういうと立ち上がる。

「ふん！」

そう叫ぶと・・・。

背中から黒い翼が飛び出る。

「ええええええ！！」

そして・・・そのまま宙に浮く。

「どうだ？俺が人間に見えるか？」

確かに・・・翼以外は普通の男に見えるけど・・・。

これは確かに普通の人間とは言えない。

地面に着地して翼を収める。

「俺の名前はルドルフ。君にこの妖魔界を救ってもらいたいんだ」

「ちよつと待つて。あんたが人間じゃない事もここが私の住む世界となんとなく違つて事も、まあ認めるわ。だからってなんで私がそういう事を？」

突然そんな大事を言われたつて。

「確かに突然な事だ。だが・・・君にしか出来ない」

「だーかーらー！！何故私が！？」

「それを言われると弱いんだが・・・。ドルイドのオババがそう占つたからとしか・・・」

え・・・？

「ドルイドのオババ・・・？」

「ああ。これまでいろんな占いをしてきて、その的中率は完全。外した事が無いほどだ」

「つまり・・・その占い師が私が救ってくれるつて・・・だから呼んだと？」

「そういう事だ」

なんて事・・・。

「いくらなんでも、たかが占いで呼ばないでよ！！」

こつちの事も考えてよ。

「悪い・・・。この世界を救うまでは帰す訳にはいかない」

「それつて脅し？」

「この妖魔界を救う為だ。そう取ってもらつても仕方ない」
くっ・・・。

待つて。

「そのドルイドのオババつて何処にいるの？」

「この近くに住んでいるが・・・何故それを？」

「私も聞いてみるの。自分で確認しないと気が済まないし」

第1章 4話

私はルドルフにドルイドのオババの居場所を教えてもらった。ルドルフが付いて来るとか言い出したけど、断った。

何せ突然そんな事言われてもまだ信用する訳にはいかない。

それに一人で考えたい事もあるし……。

だってここが私達の住んでる世界とは違うとか言っても、まだ夢のような話しだし……。

確かに……確かにルドルフは人間では無かったわよ。

でも……。

ここが全く違う世界だなんて……まだ受け入れるには情報も少ない。

うかつに信じる訳にはいかない。

それには……話しに出ていたオババに会うのが一番でしょう。

その人が本当に占い師で、本当にその占いが当たるといふのなら……。

私自身でそれを確認するのが一番。

ふう……。

こうして見ると私もお姉ちゃんと同じ性格してるなあと思う。

なんでも自分の力で解決したくなるもん。

ガサガサ……。

何か……物音がする。

何……？

物音のした方を見る。

「きゃー！！！」

……！！

悲鳴！？

すると……小さな妖精みたいな子が物音がした方から飛び出てきた。

その妖精には体に糸みたいのが巻き付いて走っている。
そして……。

その後ろから化け物が追い掛けて来ている。

大きさは私の腰ぐらいの小ささ。

顔がとても醜く肌も薄黒い。

誰がどう見たって人間じゃないのは確か。

その化け物が鋭い爪を向きだしにして、妖精を追い掛けている。
助けなきゃ！

「待ちなさい！！」

第1章 5話

「待ちなさい！」

思わず叫んじやったけど……。

ハッキリ言って叫んでから後悔してしまった。

そりゃあ……確かに見過ごす事は出来ないけど。

相手は1匹とはいえ、鋭い爪を武器にしている。

それに対して私はどう？

まったくの素手で何の武器も持ってない。

そりゃあ……お姉ちゃんみたいに素手でも戦える人なら話は別で

しょうけど……。

私は何か武術を習ってる訳でも無い。

何にも無い状態で戦える訳では無い。

どうしよ……。

そうだ！

何か……武器になりそうな物……。

「ギヤー!!!」

どうやら私に獲物を変えたみたい……。

どうしよ……。

とりあえず……。

逃げるが勝ち!!!

逃げる……逃げる……逃げる!!!

後ろを見る……。

うっ……追い掛けてくる。

しかも……どんどんその距離が短くなって来ている。

あっちの方が足が速いんだわ。

このままじゃ追いつかれる！

どうしよ……どうしよ……。

あっ！

目の前に木が。

あれだわ!!

「えい!!」

ジャンプして木の枝に捕まる。

そのまま・・・木の上に登る。

ふう・・・。

下を見ると・・・恨めしそうな表情で化け物が見ている。

だけど登ってくる気配は無い。

どうやら木に登る事は出来ないみたいね。

それでも奴はずっと下にいる。

とりあえずの危機は去ったけど・・・。

あいつをどうにかしないと駄目ね。

でもどうしよう・・・。

むざむざ降りても、あの爪の餌食になるのは目に見えている。

何か策を考えないと・・・。

でもここは木の上だし、そんなたいした物は・・・。

ん？

木・・・？

そうだ!!

木の枝を折って・・・。

よし!これで尖った武器が手に入ったわ。

あとは・・・。

・・・残酷だけど・・・やるしか無い!

「たあ!!」

化け物の上に飛び降りる。

もちろん、さつき手に入れた木の枝のとがった方を下に向けて。

このまま・・・降りた時の衝撃で突き刺す!!

・・・瞬間、目を背ける。

だけど・・・化け物は倒れていた。

残酷かもしれないけれど。

「うしなまきゅ、私やあの子が殺されていた。」

第1章 6話

ふう……。

「あの……ありがとうございます」

妖精さんがお礼を言ってくる。

「ううん。いいのよ。何か気づいたら声出しちゃったようなもんだから」

嘘は言っていない。

何せ後悔しちゃったぐらいだし。

でも……それでも見捨てるぐらいなら勇気を振り絞った方がいい。

「あの……私、佐藤葉子って言うの。あなたは？」

「ヨコですか？えっと……私はフェアリーとしか」

フェアリーって……確か妖精って意味だったわよね。

どういう事なのかしら。

「あんまり……そういう風に名前を呼び合っているのが無いからへえ……」

個別の名前が無いのかしら。

それにしても……

この妖精を見ると、ここが私のいる世界とは違っていてハッキリ分かる。

あの化け物もそうだけど。

絶対あんなの見た事ない。

「あつ、そうだ！聞きたいんだけど、ドルイドのオババって何処にいるの？」

この子を助ける為に走り回ってしまって、現在位置が分からなくなってしまうって。

「え？あのオババに用ですか？」

「ええ。ちよつとね」

ある意味とても重要な事だし。

「それなら、私が案内します。助けて貰ったお礼に」

「いいの？ありがとう」

ふふ。

なんか妙な展開になって来ちゃったわね。

・・・あれ？

そういえば・・・。

今頃気になったけど。

何で私ここにいる人達の言葉が分かるのかしら？

あのルドルフって奴は完全に人間と同じ姿していたから気にならなかったけど。

彼女はどう見たって人間じゃない。

大きさなんか私の手のひらぐらいの大きさしか無い。

さらに羽で飛んでいる。

幼い頃に聞いたような妖精の姿そのもの。

「そういえば・・・なんであの化け物に追い掛けられていたの？」
ふと思った疑問を言った。

「だって・・・あれゴブリンだもの」

「・・・ゴブリン？」

何それ？

「え？知らないの？」

私は素直に頷く。

「あのね。なんか・・・ルドルフって奴の言葉だと、私は人間界から連れて来られたんだって」

「ええ！！それじゃあ・・・ルドルフ様のお客様だったんですか！！」

え？えええ？？？

「こ・・・これは・・・知らぬとはいえ、失礼の数々・・・」

「ちょ・・・ちょっと待ってよ。別にそんなんじゃないから」というよりも・・・。

あいつってそんなに偉い奴だったんだ・・・。

第1章 7話

フェアリーさんの案内で、ようやくドルイドのオババのいる所に来れた。

全く分からない所だから、一旦目印から外れるとどう戻っていいか分からないもんね。

そういう意味では彼女がいて良かったわ。

そこは洞窟のようになっていた。

「すいませーん」

私は声をかけつつ中に入る。

「待っておったぞ」

中から声が聞こえる。

まさにオババという名前の印象の通り。

年老いたような女性の声が聞こえた。

私は奥へと進む。

そこには・・・ローブを身にまとった老婆がいた。

顔はハッキリとは分からない。

もっともこの室内には明かりがほとんど無いから、見えただけかもしれないけど。

「ヨーコ、おぬしが来る事は分かっていた」

・・・!!

私の名前を知ってる!?

って・・・そう言えばルドルフに私を連れて来るように言ったのが、このオババだもんね。

それでも・・・名前を知ってるって事はこのオババの占いの的中率は絶対だと言っのが分かる。

「何故おぬしが呼ばれたのかを聞きたいのじゃな?」

「そうよ。この妖魔界を救って欲しいって・・・どういう事!?!?」

このオババがそんな事占わなければ良かったのに。

「すまんの。おぬしの・・・その能力がこの妖魔界には必要なのじや」

え・・・？

能力・・・!?

「何言ってるの？私にはそんなのは・・・」

「何を言っている・・・。おぬしがわしらと話せる事自体、おぬしの能力なのじゃぞ？」

「え・・・!？」

そう言えば・・・。

それは不思議に思っていたけど・・・。

「この妖魔界に来た事によって目覚めたのじやろ。おぬしはどんな生き物でも会話が出来る能力をな」

なるほど・・・。

もしそうならば納得出来る。

だいたいこの妖魔界の言語が私の世界と同じ言語なんて、そんな都合のいい事がある訳ないとは思っていた。

そして・・・妖精に会った事でここが私の世界では無い事も分かった。

だからこそ不思議に思っていたけど・・・。

私の能力だったんだ・・・。

「もう一つある。それがおぬしの最大の武器じゃ」

「最大の武器？」

「そうじゃ。剣を一本、出す事が出来るはずじゃ」

剣を・・・？

「それこそが妖魔キラー。わしら妖魔界に住む生き物にとって天敵とも言える武器なのじゃ」

「え・・・ええええええー!!!??？」

第1章 8話

「ま・・・まさか！オババ・・・彼女が・・・妖魔ハンター!?」

「そうじゃ」

フェアリーさんが言った妖魔ハンターって・・・何？

「あの・・・その妖魔ハンターって・・・?」

「その昔・・・もうだいぶ昔になるじやろう。この妖魔界に一人の人間が現れてな。そいつがたった一本の剣でこの妖魔界を壊滅的なまでに倒してしまったという伝説があるのじゃ」

え・・・。

「ちよつと待つてよ。もし・・・もしよ、私とその武器を持つてると仮説して、なんでその私がこの妖魔界を救うの？逆に滅ぼしちゃうんじやないの?」

「あのルドルフも最初はそう言っておったのう」

そりゃあ・・・普通はそう思うでしょうね・・・。

「じゃが・・・わしはおぬしのその性格に賭けてみる事にしたのじや」

「え・・・?私の性格?」

「そうじゃ。おぬしはその妖魔キラーを持つてるとしよう。この妖魔界の住人を全て滅ぼそうと考えるか?」

そ・・・それは・・・。

・・・確かに・・・そんな事をする理由が無い。

さつき見た化け物のように、やむを得ない場合は仕方無いとは思っけど。

好きこのんでそんな事はしたくない。

だいたい・・・全てって事はこのオババや・・・フェアリーさんも含むって事になる。

私は他の住人はともかく、このフェアリーさんは滅ぼすなんて出来ない。

「そこでじゃ……。そのおぬしの力を使って……。倒して欲しい奴がいるのじゃ」

「倒して欲しい奴？」

「そうじゃ……。そいつの名前はクロウ」

「クロウ……」

「そいつはこの妖魔界に理性を失わせる欲望の塊のようなやつなのじゃ」

「そんなのがいるなんて……」

「残念じゃが……。この妖魔界に奴に対抗出来る奴はおらん。あいつの力は妖魔界の住人の心を欲望に傾かせる力がある。このまま放置していたはこの妖魔界は奴の欲望に巻き込まれるじゃろう」

なるほど……」

「つまり……。そいつも妖魔界の住人である事は間違いないのね？」

「そういう事じゃ。それで……。おぬしの持つてる妖魔キラーならば、クロウをも倒す事が出来るじゃろうと……。そして……。おぬしは妖魔界の住人ではない」

そこで私が呼ばれたと……。なるほどね。

だいたいの話しは読めたわ。

それにしても……」

私がそんな凄い事をね……」

「身勝手な話しかもしれぬ。じゃが……。おぬしに助けてもらおう以外に手だてが無いのじゃ」

うっ……」

まいったなあ……」

私、こういうのに弱いよねえ……」

だからこそ、さつき咄嗟にフェアリーさんを助けちゃったりするんだし。

「分かったわ。私がそんな力を持ってて、それを必要とするなら……。やってみるわ」

「おお……。。ありがたい事ですじゃ……」

第1章 9話

「まずはクロウに向かう前に”巨人の目”に向かって見るのがいいじゃろう」

「え？何？その”巨人の目”って？」

「”巨人の目”って言うのはね」

オババの代わりにフェアリーさんが答える。

「この妖魔界の大地には巨人が眠っているという伝説があつて・・・その伝説の通り、この妖魔界には各地に巨人の形が残つてるの。その一つとされてるのが”巨人の目”そこへ行けばどんな真実も見えるって話しよ」
なるほど・・・。

「クロウはどこかに隠れておる。残念じゃがわしの力を持ってしても、奴の場所を調べる事は出来ぬ・・・」
へえー・・・。

クロウは妖魔界の住人では、倒す事が出来ないほどの力の持ち主だつて言つてたけど。

すでにオババの力を超えているのね。

「そこでじゃ。」巨人の目”の力を借りるしかないじゃろう。あの”巨人の目”ならばクロウの居場所も見つける事が出来るじゃろう。じゃが・・・そこまでの道のりは長く険しいぞ。クロウもそこに誰も踏み入れる事の無いように、奴の手下がいくつか待ちかまえてるしのう・・・」

それはそれは・・・。

そりゃあ・・・そいつの立場だったら、自分の場所を知らせる事になる存在に向かわせる訳にはいかないものね。

「って事は・・・。まずクロウって奴はその”巨人の目”を壊す事は出来ないって事ね。破壊するのが一番の妨害だもの」

「さすがに奴もそこまでは出来ぬだろう」

「そしてもう一つ。クロウもその力を認めてるって事ね」
「そうでなきゃ邪魔するなんて考えないもの。」

「そういう事じゃ
よーし……。」

「そういう事なら……。そこまで誰か案内してくれないかしら？
私はその場所を知らないし……。」

流石に一人で行けるほど、私はこの妖魔界の地形が分かる訳では無い。
い。

当然……。危険を承知で付いて来る人を見つけないと。

「それなら……。私が案内します！」

「フェアリーさん……。」

そんな……。

「分かっているの？かなり危険よ。さっきの化け物の比じゃないかもしれないのよ？」

腕に覚えがあるってなら話しは別かももしれないけど……。

「いいんです！私……。命を助けてもらったお礼をしたいんです！」

フェアリーさん……。

「私……。この妖魔界の生き物は全部知ってるんです。特徴や弱点も全て……。だから、力になれると思うんです」

「どうじゃ？ここまで言うのじゃから……。」

確かに……。

目を見ると決意が固まっているのが分かる。

ここまで来るとテコでも動かないってのは、お姉ちゃんできづく分かってる。
分かってる。

「分かったわ」

それに……。

特徴や弱点を知っていると云うのはかなりの強みだわ。

彼女には戦う力は無いから、代わりに私が戦えばいい事だし。

第1章 10話

「巨人の目”に行くまでに色々目印の目的地があるので、そこを經由して行けば行きやすいです。いきなり”巨人の目”に行こうとしても迷うだけです」

なるほどね。

確かに・・・私達の世界と違って目印になりそうなめぼしい物は何も無い。

建物はルドルフがいたお城を除いて全く見えないし、山だの川だのといった地形も見られない。

いえ、ただ一つ高い山がそびえ立っているけど。

あれ以外はまるで何も無いって感じ。

これじゃあ・・・確かに迷いそうだわ。

「あれは？」

私は唯一見えた高い山を指さす。

「あれが第一の目標でもある”巨人の足”です」

あれが足・・・。

「巨人の足”を越えると次は”巨人のへそ”というくぼみが見えますので、そこに向かいそこに到着すると次に見える広い高原が”

巨人のてのひら”そして湖である”巨人の口”へと行き小高い山である”巨人の鼻”へ、その側にある洞窟の奥に目的地である”巨人

の目”があると言われてます」

ふうん・・・。

確かに・・・長く険しそうな道のりね・・・。

だからと言って見捨てて帰るといふ選択肢は私の頭の中には無い。

私もお人好しだなあ・・・とは思っけど。

「そういえば・・・最初に追い掛けていた化け物って・・・あれ何なの？」

ふと思っただ疑問を聞く。

「あれがゴブリンです。あれもクロウの力で欲望にまみれていて、私食べられそうになりましたよ……」

それは……間一髪だったわね。

「それは災難だったわね。糸で絡まれて飛ぶ事も出来なかったし、そう……。」

今フェアリーさんは私の顔の位置まで高く飛んでいる。

この位置なら……あのゴブリンの手に届くとは思えない。

「はい……。本当にありがとうございます。」

本当に……良かったわ。

「この妖魔界って平和ですから、襲われるなんてまずないですしへえ……。」

「ルドルフ様のお力のおかげだったんですが……、最近クロウの力の方が膨大になってしまっ……。」

それで救世主が必要だったという訳ね。

よーし。

それじゃあ、とりあえずはあの足に向かって行けばいいのね。

第1章 11話

「それにしても・・・」

私はこの妖魔界に来ていろんな疑問があったけど・・・
どうしてもこれだけは聞きたかった。

「夜なのに星が一つも無いのね」

空を見ても真っ暗で何も無い。

それなのに辺りが分かるぐらいの明かりがある。

これだけはどうしても不思議で仕方無かった。

「え？ヨルって何ですか？それにホシって・・・？」

「ええ！？」

夜や星を知らない・・・！？

って事は・・・。

「もしかして・・・ずっとこのまま・・・？」

私は空を指さしてそう言う。

「ええ。そうですよ」

まるで当たり前のように言う。

はぁ・・・。

フェアリーさんの目は嘘を言ってるようには見えない。

つまり・・・。

これがここでの”当たり前”なのね。

「ちよつとね・・・。私の世界と違っつて事を改めて認識したわ」

そう・・・。

私達が当たり前だと思っていた事が、ここでは違うのだ。

「そういえば人間界から連れて来られたんですね。それだと色々
違っつでしょう」

「まあね・・・」

太陽も月も星も無いって事になる。

それなのに明かりがあるかのように周りが分かる。

どういう原理なのかまったく分からない。

でも・・・これがここでは当たり前なのね。

「そういえば・・・あなたの事・・・フェアリーさんって言った気がするけど・・・フェアリーさんじゃおかしいわね」

「え？そうですか？」

「そうよ。」

だって・・・それじゃあ犬を犬さんって言うてるようなもんじゃない。

なんか・・・名前をつけてあげたいな・・・。

うーん・・・。

「そうだね！」

「フェアリーなんだから・・・フェアさんってどうかしら？」

「フェア？」

「そう。それがあなたの名前。これからはそう呼ぶわね」

「はあ・・・」

「長い旅になるんだもの。仲良く行きましょう」

「それでは・・・あなたヨーコ様で」

「様付けねえ・・・」

「だって・・・ルドルフ様のお客様なんですよ。失礼の無いようにしないと」

「別に私は呼び捨てでもいいのに」

「そんな！～！とんでもない！」

「まったく・・・」

「そこまであのルドルフって奴は偉いのね。」

「もつとも・・・クロウが現れるまではこの妖魔界を平和に保つてきたんだから、敬うつてのはなんとなく分かるけど。」

「ま・・・自分で好きに呼んでと言った以上撤回は出来ないし・・・。彼女がそれでいいのならいいわ。」

第2章 足

私はまずは”巨人の足”と呼ばれる山へと向かっていた。

どうやらクロウのせいでこの巨人の名前が付いている地域は、欲望にまみれて妖魔界の住人を襲いかかっているみたい。

だから・・・すでにその危険地帯に足を踏み入れている事になる。そうだわ・・・。

これも聞いておかないといけない重要な事。

「ねえ、フェア。あのゴブリンってのはどれくらいの強さなの？」

「え？ゴブリンですか？あれはここに住んでる中でも弱い部類なんです」

あれで弱い・・・。

つまり・・・。

これからはもつと強い奴らが待つてるって事ね。

なんか・・・すでに先が不安だわ。

本当に私がそんな凄い武器を持つてるのかしら・・・。

まあオババがそう言うのなら、持つてるんでしょうね。

まだ私はそんな能力を發揮した事無いんだけど。

・・・？

何か・・・走ってる音が聞こえて来た。

その音はだんだん近づいて来る。

なに・・・？

あっ・・・！！

その姿が見えた！

それは・・・。

角が生えている馬だった。

どうも・・・何かに追い掛けられているみたい。

その馬の後ろを見ると・・・。

大きな鳥の姿が見えた。

どうやら・・・あれに追い掛けられてるみたいね。

どうしよう・・・。

「大変！ユニコーンがワイバーンに襲われてる！！！」
え・・・？

「ユニコーン・・・？」

「とにかく！助けなきゃ！！！」
フェアが叫んでいる。

そうね・・・。

どうすれば・・・。

「こっちよー！！」

私は叫ぶ。

その声が聞こえたのか、ユニコーンはこっちに向かって来る。
さあて・・・どうやってあの巨大な鳥と戦おうか・・・。

第2章 2話

「とにかくこっちへ!!」

私は木々が生えている所へと走る。

その木の下の所で止まる。

これなら上から襲われる事は無い。

つまり・・・下を飛ぶしか無い。

とにかく・・・飛んでる相手に上空を取られたまま戦うのは不利な事この上ない。

こうして・・・同じ土俵で戦えばまだこっちに勝ち目があるわ。

あとの問題は・・・私には武器が無い。

剣があるなんて言ってたけど・・・どうやって使うのかまだ分かってない。

それが最大の問題。

こうなったら、やぶれかぶれだわ。

ワイバーンが木の下のを飛んでこっちに向かってくる!

「ヨーコ様!!」

「離れてて!危険よ!」

私はフェアを離れさせる。

さすがに・・・今から試みる事はかなり危険。

彼女を巻き込む訳にはいかない。

タイミングが全て。

来る・・・!!

3・・・2・・・1・・・。

「はあ!」

飛びかかってくちばしに抱きつく形になる。

こうすれば・・・足にもくちばしにもやられる事は無い。

これで相手の攻撃を防ぐ!

けど・・・さすがに暴れる。

くっ……。

私は振り解かれなないように必死にしがみつく。
ちらりと下を見ると高く飛んでいた。

どうするつもり……？

すると……急降下を始めた。

このまま……落下の衝撃も加えるつもりね。

負けるもんか!!

上下左右あらゆる方向へとワイバーンは暴れている。

……待って。

ワイバーンは地面に向かって急降下してるのよね？

よーし……それを逆利用してやるわ!

私はそのまましがみつきながら作戦を実行しようとする。

おそらく……地面すれすれでまた高く飛ぶつもりなんだわ。

よーし……。

地面がだんだん近づいて来る!!

このまま……。

今だわ!

そのままワイバーンの鼻の穴も塞ぐ。

地面まで距離が縮んで来る!

まだワイバーンは暴れてるけど……こっちも必死なのよ!

やたらめったら暴れている。

くっ……。

地面に衝突する!!

私は思いっきりしがみつく!

「くっ……!!」

どうやら……そのまま地面にぶつかったみたい……。

「ヨーコ様!!大丈夫ですか?」

フェアがやって来る。

「ええ……なんとか……ね」

さすがに……衝撃で体のあちこちが痛い。

「すまない・・・俺を助ける為とはいえ」

ユニコーンが近づいてそう言う。

「いいのよ。無事でなにより」

ユニコーンはじっと私を見ている。

そして・・・。

角を私に触れさせる。

え・・・？

その次の瞬間だった。

痛みが・・・引いている。

「え・・・？なんととも・・・ない？」

「良かった」

どういう事・・・？

「ヨーコ様、ユニコーンの角には治癒能力があるんですよ」

「え？それじゃあ・・・あなたが？」

「助けてもらったんだ。これぐらいは当たり前だ」

第2章 3話

それにしても・・・まだ旅は始まったばかりなのに、いきなりとんでもない目に合ったわね・・・。

「すいません。ルドルフ様の言葉を、もったときちんと聞いていれば良かったんですが・・・」

「・・・?どういう事?」

「はい。ルドルフ様が・・・この辺りは危険だからお城へと逃げようにと」

「そうね・・・。」

この巨人の範囲は危険だって話しだものね。

「ですが・・・最初は無視していたんです。そんなはずは無いと・・・ですが、すぐにこの辺りは危険な場所と化してしまった・・・。

想像も出来ない事態が起きていたようであるほど・・・。

私の世界ではまだ魔物がいたり魔法の力があつたりと、平和にはほど遠いけど。

突然平和が壊されるなんて・・・想像も出来ない事だものね。

「だいたい・・・私だって突然妖魔界に呼ばれるなんて、想像も出来るはずもないもの。」

「そういう意味では私はユニコーンの言う話は分かる。」

「でもこれで危険だって分かったでしょ?早く城に行った方がいいわよ」

「え?あなた達はいったい何処へ?」

「私はこれから”巨人の目”へと行く所よ」

「それは危険です!」

「それを承知で行くって言うてるの」

「そう・・・行かなければならない。」

「ヨーコ様はオババの占いで、この妖魔界を救う存在なんです。で

すから・・・あそこへ行かなければならないのです」

「オババの・・・」

そういう事。

前途多難な感じだけど・・・。

進まなきゃいけないもの。

「そういう事なら・・・俺も付いて行つていいですか？」

「え？何言ってるの！？あなたさっき自分で危険だつて言ったばかりじゃない!？」

「それはそうですが・・・。あなたのような純粋な存在が危険な所に行くだなんて・・・。俺には耐えられない」

「ちょ・・・ちょっと・・・」

純粋・・・!？」

私が・・・？

あの親や姉の血を引いてる私が？

ちよつと純粋つて言葉からは遠い気がする。

「ヨーコ様、ユニコーンは純血な乙女を見たらその側を離れないつて聞きます。おそらくそのせいでしょう」

うくん・・・。

「つまり・・・ユニコーンの特性つてやつ?」

「そうですね」

なるほどね・・・。

「かなり危険よ?もしかしたら・・・途中で死んじゃうかもしれないのよ?」

「それでもあなたを守れるのなら・・・俺は本望だ」
ふう・・・。

「分かつたわ。そこまで言うのならもう止めないからね」

第2章 4話

まだ山にはつかない。

結構近くには来てはいるんだけど……。

「ヨーコ様、疲れましたか？」

ユニコが聞いて来る。

あつ、ユニコつてのはユニコーンに付けた名前なんだけどね。

「ちよつとね……。こんなに長距離歩くって事無いから」

普段、そんなに運動してる訳でもないし。

こんな事ならお姉ちゃんを見習って何か習っておけば良かったかな。もつともこんな目に合うなんて思いもなかったから、仕方ないんだけど。

私は自分の性格を分かっていたから、逆にあまり人と関わる事はしなかった。

絶対面倒事に巻き込まれるもの。

その心配通りだった。

今……。まさに面倒に巻き込まれている。

しかも途中で投げだそうとも思っていない所がやっかい。

これも性分ね……。

「疲れてるなら俺の背に乗ってくればいいのに」

「何言ってるのよ。そうしたらユニコが疲れちゃうじゃない」

いくら馬のようなユニコとはいえ、その背中に誰かを乗せるといふ事は無い。

それが急に乗せるとなると……。それなりに疲れるでしょうに。

「俺は構わない。ヨーコ様のためならば」

もう……。

そう言われると余計乗れないじゃない。

「ヨーコ様!!何か見えます!!」

フェアが後ろを見ながら叫んでいる。

その方向を見ると・・・何やら大群がこっちに向かって来ているよ
うな・・・。

「あれって・・・かなり危険じゃない？」

「・・・ヨーコ様の言う通りですね」

私達は安全そうな所へと走って逃げる。

「ヨーコ様！どうも・・・私達を狙ってるみたいですよ」
え・・・？

ふと後ろを振り返ると・・・。

確かに・・・大群がこっちに向かってる。

どういう事・・・？

「あっ・・・あれは・・・！！フンババです！」

「フンババ・・・？」

「はい。目は劣ってるんですが、嗅覚で獲物をかぎ分けるんです」
嗅覚・・・。

つまり・・・私達の匂いを追って来てるって訳ね。

見ると・・・確かに目で追ってる感じじゃない。

姿形は牛のようだけど・・・その角は鋭くがっている。

その目や角の雰囲気ですら牛では無いと分かる。

まずいわね・・・。

風が吹いてる訳でも無いので、風下に逃げるといった戦法も使えない。
どうすれば・・・。

第2章 5話

くっ……。

このままじゃ……追いつかれるのは時間の問題だわ。

1匹とかだつたらまだなんとか出来るかもしれないけど……。

あんなに大群……まず無理だわ。

何とか……逃げきれないと……。

「ヨーコ様！背中に乗って！！」

仕方無いわ……。

私はユニコの背中に乗る。

「そのまま……きちんと捕まって！！」

そう言つと、もの凄いスピードで駆け出す！

す……凄い。

どんどん距離が離れて行く……。

なるほど……ユニコは馬と似たような姿形だものね。

「でもどうします？このままでは山から遠ざかってしまいます」

あっ……。

それはまずいわ。

……となると……。

あの大群になんとかしないといけないって事ね。

何か無いのかしら……。

あれに対抗出来るような物が……。

とりあえず匂いをなんとかしないと……。

……！？

匂い……！！

「そうだわ！！」

私はポケットを探る。

あつた。

まさか……身だしなみの為に持っていたのが役に立つなんて思い

もしなかったわ。

「ユニコとフェアは遠くに逃げていて。これからあいつらの鼻を役立たずにさせるから」

「どうするんです？」

「思いつきり強力な匂いを出すのよ。だからあなた達は離れて欲しいの。味方にも被害が出たらまずいでしょ？」

私はそう言うと、それを握りしめユニコの背中から降りる。

「勝算はあるんですね？」

「間違いないわ」

だからこそ、ユニコとフェアには離れて欲しい。

それに・・・私はある程度傷を負っても後でユニコに治してもらえる。

だから・・・多少危険でもこれは私がやるしか無い。

フェアは・・・体が小さいし体力もそれなりしか無い。

万が一死んでしまったら嫌だし。

よし・・・。

私は気合いを入れる。

・・・来た！

フンババは私に向かってまっすぐ来る！

行くわよ・・・。

ある程度まで引き寄せて・・・。

私はそれを辺りにまき散らす！

そう・・・。

女の子だったら持つてるような物。

香水よ！

フンババは思い通り、香水の匂いにやられている。

私もこれは凄い少量でしか使った事ないけど・・・。

これほど大量に使ったのは始めてだわ。

でも私は鼻をつまめる。

だけどフンババは鼻をつまむ事も出来ない。

鼻を頼りにしてる奴らにとっては強力な武器だわ。

よし……。

この隙に私は大群の向こうへと駆け抜ける。

後ろを向くと……鼻が混乱したのか同士討ちを始めている。

「ふう……」

第2章 6話

ふう……。

ようやく山へとたどり着いた。

「えつと……。これを登るの？」

「ええ。登らないと次の目的地が見えませんか」

そんな事じゃないかと思っただけ……。

仕方ないわね……。

この山はまさしく足のごとく高くそびえ立っている。

しかもご丁寧に5つある。

一番山の横幅が広いのが親指ね。

そして一番小さいのが小指という具合ね。

まさに足のごとく。

足だと分かるのはそれほど高くないという所。

それにしても……。こうやってみると本当に足みたい。

本当にここに巨人が眠ってるみたいね。

さてと……。何事もなく登れるといいけど……。

しばらく登つてると……。どうやら安全に登るってのは諦めた方が

いいと思うような光景があった。

そこには……。2メートルぐらいの高さの人間型の生き物で足も手

もある。

人間と違うのは肌が緑色だという事と顔が明らかに人間の顔では無い。

なんというのか……。モアイ像っぽい感じ。

そいつがそびえ立っている。

待ちかまえている感じね。

「あれは……。トロールですね」

「トロール……？」

「ええ。見ての通り巨大な体で動きは鈍いんですけど、その怪力が

自慢なんです」

なるほど……。

見たままって事ね。

じっとこっちを見ている。

気づいてはいるけど……襲いかかつてはこないみたいね。

もっとも……すんなり通してくれるとは思えないけど……。

さあて……どうすればいいのかしら……。

第2章 7話

こうなったら戦法は一つしか無いわ。

動きが鈍い事を仕様して、素早さでかき回す！
そう思い私は駆け出す！

「あっ、ヨーコ様!!」

私はフェアやユニコを置いて一人で走る。
やはり・・・こういうのは私の役目だわ。

トルルに近づく！

「ぐあー!!」

手に持っている巨大な棍棒を振り上げる。

絶対にあれに当たっちゃ駄目だわ。

まず一撃でやられる。

だから・・・走って動き回らないと。

ドオン！

うわっ!!

すぐ側で棍棒が振り下ろされた。

やっぱり・・・凄い威力。

あれは・・・正直食らいたくないわ。

「ヨーコ様!!」

フェア達がやって来る。

来るまえになんとか片付けないと・・・。

戦うのは私一人だけでいい。

フェアやユニコに危ない目に合わせる訳にはいかない。

「ぐっ・・・」

トルルが私に目標を定めようとしている。

だけど・・・そんな動きじゃ私を捕らえる事は出来ないわよ。

「ぐぐぐ・・・」

トルルが私を睨み付ける。

・・・ん？

どうするつもり？

「ぐわっ！」

なっ！

突然棍棒を持って無い方の手で私を掴んだ。

まずい！！

意外と動きが速かった。

いえ。

武器の無い左手の方を使ってくるなんて、当たり前的事をすっかり忘れていたわ。

「くっ・・・離して！！！」

暴れるけど・・・さすがに力が自慢だけはある。

まったく動かない。

やばい・・・。

「ぐあっ！！！」

そのまま地面へと叩きつけられる！！

「きゃっ！！！」

くっ・・・まずい・・・。

棍棒が振り上げられる。

止めを刺すつもりね・・・。

第2章 8話

なんとか・・・。

私は力を振り絞って体を動かす。

ドスン！

凄まじい音がすぐ側で聞こえた。

なんとか・・・避けたけど次はもうこっちはいかない。
体が思うように動かない・・・。

「ヨーコ様！！」

フェアとユニコがもうすぐ側にまで来ている。

どうすれば・・・。

・・・！！

そうだ。

時間稼ぎかもしれないけど・・・。

私は地面にあつた砂を掴む。

「はっ！！」

目に向かってそれを投げる。

「ぐわっ！！」

やった！

目に入ったわ。

これで・・・。

「たあ！！」

足を蹴る！

急に目が見えなくなった所で、足が不安定になった所でトロールは倒れ込む。

今のうちに・・・。

「ヨーコ様！！」

すでに私の側には、フェアとユニコが来ていた。

「ありがたいわ。乗せて！」

私はユニコの背中に乗るとそのまま山の頂上の方へと登った。
ふと後ろを振り返る。

トロールが追い掛けて来ている。

しつこいわね……。ん？

あれは……。かなり大きな岩……。

そうだね。

「止まって！」

「どうするんです？ ヨー」様

「これを使うのよ」

そう言うと、大きな岩に手をかける。

くっ……。やっぱり動かない……。

「手伝います」

ユニコも押す。

すると……。岩がゆっくりと動いた。

そのまま……。下へと転がり落ちる。

当然、トロールの所へとまっすぐ向かっている。

そのまま……。岩の下敷きになってしまった。

「これでトロールの心配はしなくていいわね」

第2章 9話

なんとかか・・・頂上が見えて来た。

とりあえず・・・あそこに行けば次の目的地が分かる・・・。

・・・あれ？

誰かいるみたい。

誰だろう・・・？

そこには・・・人間そっくりの人がいた。

・・・人間そっくりの人つてのも変な言い方だけど。

でも、これまで出会った妖魔と違い、ルドルフみたいに人間の顔までも見える。

「あの・・・、すみません」

私は声をかける。

その人物はこつちに気がつく。

「なんだ？おまえは・・・？」

「私は葉子。ルドルフに呼ばれてこの妖魔界を救いに来たんだけど・・・」

「ほう・・・。おまえが？」

「ええ。あなたは？」

「俺か・・・？クロウ様に仕える四天王の一人、ラカスタだ」

クロウ・・・！！

私は一步下がる。

クロウに仕えてるって事は・・・私の敵って事になる。

「悪い事は言わない。ここで引き返せ。そうすれば少なくともお前は死ぬ事はない」

くっ・・・。

確かに・・・今まで出会った相手とは違い、かなりの知識もある。

まともにもやりあえば死ぬ可能性がかなり高い。

そのうえ・・・私はまだ武器を使う事が出来ない。

そのうえ・・・私はまだ武器を使う事が出来ない。

そのうえ・・・私はまだ武器を使う事が出来ない。

どうやったらその能力を使う事が出来るのか・・・今でも分からない。

こんな状態で・・・四天王といふかなりの実力者と戦うなんて無謀もいい所。

「どうするんです？ヨーコ様」

私としては引き返したい所だけど・・・。

でも・・・引き返してどうなるっていうの？

この妖魔界を見捨てる事なんて出来ない。

という事は・・・どのみちこのラカスタという奴も倒さないといけない事には変わらない。

どうする・・・？

・・・。

「分かったわ。引き返す」

私はそう言つと山を下る。

「いいんですか？ヨーコ様・・・」

「何も二度と来ないとは言つてないわ。今は一旦引き返す。あいつに勝てる手段が無い今、行つても無駄死によ」

そう・・・。

今は一旦下りるだけ。

また再び・・・何か対抗策を考えてからまた来るだけの事よ。

第2章 10話

「ラカスタか」

「はっ・・・クロウ様」

遠くからクロウ様の声が聞こえる。

滅多に連絡はして来ないのだが・・・。

『この妖魔界を救おうとか言ってる無粋者が表れた』

「はい・・・。先ほど私の所に来ました」

『何！？』

「ですが小娘です。はたしてあんな小娘がその無粋者かどうかは分かりませんが・・・」

『だが油断はするな。その娘が本当に救う存在ならば・・・あの武器を持つてるはずだ』

「妖魔キラーですか・・・？だがあの娘は素直に下山していきました。本当に持つてるなら戦おうとするはずですが？」

そう・・・。

あんな凄い武器を持つてるなら使うはずだ。

あれを使われては俺でも危ない。

伝説の武器。

妖魔キラー。

その昔、この妖魔界を滅ぼそうとした危険な武器。

その時は一人の英雄によつて守られたと聞くが。

『念には念を入れた方がいいな・・・』

「分かりました。奴らに始末させるようにします」

もし違うならそれでもいい。

万が一あの小娘が妖魔キラーを持つような事になるのなら・・・。

先に潰しておいた方がいいだろう。

俺はハタカーンの連中に連絡を取る。

その代表が俺の前に現れる。

「なんでしよう・・・?」

「この山を下山した小娘と妖精とユニコーンの連中がいる。そいつらを捕まえてお前らの好きにするがいい」

「・・・分かりました」

こいつらは俺の命令ならば何でも聞く。

そう・・・。

こいつらには人質がいるからな。

逆らえるはずもない。

これであの娘は終わりだ。

それにしても・・・。

この妖魔界を救おうなどと考えてるのがいるとはな・・・。

馬鹿な奴だ。

クロウ様を倒せる訳が無い。

なにせクロウ様は、邪魔な理性をというのを解放してくれる素晴らしいお方。

この世はそのうち混沌の世界と化す。

強い者が弱い者を支配する世界へと。

なんて素晴らしい事だろう。

それにはあの娘は邪魔だ。

第3章 剣

さあて……。

どうしよう……。

私の剣を使うのは当分考えない方がいいわ。

なにせ……どう使っていいのか分からないもの。

「どうするんです……？ヨコ様……」

「そうね……。一旦お城に戻った方がいいんじゃない？」

そう……。

このまま先には進めない。

一旦戻って……何か武器を手に入れないと。

最初は妖魔キラー無しでもなんとかなると楽観視してたけど。

四天王なんてのが出て来た今、そうも言ってられない。

今なら引き返すのも簡単だし。

「とにかく、武器を手に入れてからまた来ればいいわ。このままあ

いつと戦うってのはいくらなんでも無謀だし……」

「そうですね……。あの……剣は出せないんですね？」

「……ええ。何せ私は能力の使い方なんて知らないもの。こうし

てあなた達と話せるのもどうやってるのか分からないぐらいだし」

さて……どうしましょうか……。

「とにかく、一旦お城に帰りましょう」

私は山を降りる。

待ってなさい、すぐに戻って来るんだから。

ガサ……。

何やら物音が聞こえた。

何……？

ガサガサ……。

何かが近づいて来る……？

しかも……複数。

私は辺りを見渡す。

「ヨーク様!!」

「フェア! ユニコ! 気をつけて!!」

何・・・!!?

・・・!!

突然!!

上から網が降って来た!?

「しまった!!」

気づいた時には遅かった。

「くっ・・・」

捕らえられてしまった・・・。

第3章 2話

・・・あれ？

ふと気づいたら・・・私は檻の中に閉じこめられていた。どうも気を失っていたみたい。

ユニコとフェアは何処・・・？

辺りを見渡す。

ユニコはすぐに見つかった。

すぐ隣の別の檻の中に閉じこめられていた。

でも・・・フェアは？

「ユニコ！」

私は叫ぶ。

「・・・ヨーコ様」

「大丈夫？」

「はい。俺は大丈夫です。ヨーコ様は？」

「私も大丈夫だけど・・・フェアは？」

「さあ・・・。俺も見あたらなくて・・・」

やっぱり・・・。

フェアだけ姿が見えない。

一体何処へ行ったのかしら・・・。

無事だといいいんだけど・・・。

「こいつが例の少女か・・・」

！？

・・・何かがこっちに来る。

それは頭が犬のような頭で首から下は人間の姿をしていた。また・・・凄いのを見ちゃったわね。

その生き物が私の檻の前に来る。

「・・・私をどうするつもり？」

「悪いな・・・。処刑せざるを得ない」

・・・!!

「なんで!？」

「それは・・・おまえがクロウに逆らう存在だから・・・だ」
・・・?

何か違和感を感じた。

そう・・・。

この人達は望んでやってる訳じゃない。

無理矢理・・・この選択をせざるを得ない・・・そんな感じ。
どういう事？

だって・・・本当にクロウに従ってるならさっきの四天王のラカス
夕みたいに様付けするはず。

それに・・・表情が嫌々な感じがした。

たとえ人間の顔じゃなくても、それぐらいは分かる。

・・・何か理由があるわね。

やつの命令を聞かなければならない理由が。

その証拠に。

彼らは欲望にまみれて無い。

とても理性的だわ。

それを聞き出した方がいいかも。

第3章 3話

「分かった……。私が処刑されるとあなた達が助かるのね？」

私は再び言った。

こういう事は直球で言った方がいいと思うから。

予想通り。

彼らの表情が変わる。

「すまない……」

「別に責めてないわよ。それよりも……いったいどういう風になた達が助かるのか聞かせてくれない？ どうせ死んじゃうんだから、その理由ぐらい聞かせてよ」

「……君には関係無い」

「関係ない！？ どういう事よ！！ 私はその理由のせいで死んじゃうのよ！ どう関係無いって言うのよ！！」

私は思わず声を荒げた。

「ヨーコ様……」

ユニコも心配する。

「どうせ奴らに何か脅されてるんでしょ？ はたして約束を守ったからと言って、あっちが約束を守るかしら……」

みんなは押し黙る。

「いい？ クロウの欲望にやられたらそんな事言えなくなるのよ？ 自分の思いのままに……この平和な場所は無くなるのよ！？」

そう……。

見える範囲だけでもここが平和だというのが分かる。

こここの中央に巨大な炎が燃えさかり、その周囲に家らしき建物が見える。

そして……無防備に子供が遊んでいる。

ここが平和でなくてなんだと言うのよ。

「分かっているの？ 邪魔者がいなくなったら奴らがどんな事をするのか・

「……私はこれまで数体ぐらいしか妖魔界の住人に会ってないけど……、欲望にまみれたのがどんな状態なのか……それを体験してるわ」

「だが……それでもこうするしかないのだ……」

「だから……！なんで!？」

私はもう一度叫ぶ。

なんだか分からないけど……こういう理不尽は許せないわ。

「奴らに……村の若い連中をみんな人質にされてるからだ……。若い連中がいなくては村は存続出来ない」

……。

確かに……子供はいるけど……ちょうどいい年齢……つまり私と同じぐらいのは見えない。

そんな理由があるなんて……。

「それなら……その人質を取り返せば……」

「それは無理だ!!ラカスタの部下でもあるラカスタ・ソルジャーがある……。あいつには勝てない……」

「それでも……。この村の平和を取り戻すにはそれしかない。私をそこに連れて行ってくれない?」

「何!？」

そう……。

これしかない。

「私が人質を取り戻す!そうすれば私を処刑する必要ないでしょう?」

「……死ぬぞ?」

「何もしなくても処刑されるんでしょ?だったら……何かやってくれる方がマシだわ」

このまま檻の中で処刑を待つぐらいなら。

この村のために戦って死ぬ方がマシ。

「少女よ……。処刑する為のを逃れる為にか?」

「私の為じゃないわよ。この村のためよ!!!」

私は目をまっすぐに見据えて言う。
そう。

自分が処刑されるのが嫌だからという選択じゃない。
このまま黙ってもこの村はクロウの力で平和は乱れる。
それを見過ごす訳にはいかない。

第3章 4話

とりあえず私だけ檻から出された。

ユニコは万が一、私が逃げ出した時の人質という事だろう。

「その代わり……。もし私が死んだらユニコは解放してあげて。

ユニコは私が巻き込んだようなもんだし。第一クロウは私が邪魔なだけであってユニコが邪魔な訳じゃないわ」

そう。。。

もしここで私が倒れるような事があっても、ユニコを巻き添えにする訳にはいかない。

「分かった……。それは約束しよう」
よし。

私はその人質のいる所まで案内される。

「……。ここから先にいる」

細い洞窟の所まで案内される。

この奥にいるのね。

松明で奥の方まで見える。

今の所、誰もいないように見えるけど。。。。

途中までしか見えないからなんとも言えないわ。

「分かった。もし私がやられたら勝手にここに来たって事にしておいて。もし私が見つかったらそう言っし」

この人達に迷惑はかけられない。

何せ、私が勝手にやってる事だし。

頷いたのを見ると、私はそのまま洞窟の奥まで進む。

……。しばらく進む。

「ヨーコ様」

。。。。!?

小さいフェアの声が聞こえた。

「フェア?どこにいるの?」

「ヨーコ様の服のポケットです」

覗くと、確かにそこにいた。

「良かった……。フェアも無事だったのね」

「はい。それで……。一部始終を聞かせてもらいました」

それにしてもこんな所に隠れていたなんて。

「それにしても……。ラカスタ・ソルジャーと戦うなんて、かなり無謀な事を……」

「仕方ないじゃない。このままじゃあ、あの村は壊滅しちゃうのよ？それを黙ってる訳にはいかないもの」

「ヨーコ様……。自分を捕らえた連中の心配をするなんて……。まあ……。私もかなりのお人好しだと思ってるわよ。」

でもこれが私の性分だもの。

「ところで……。そのラカスタ・ソルジャーってどんなの？」

「はい……。ラカスタ・ソルジャーは普段は石像のような姿で動く事も無いのですが、一定の所まで近づくと動き出すんですなるほど……。」

「問題は……。生半可な武器では傷をつける事も出来ない事です。」

見た目は普通の石材のように見えるのですが、魔法で加工された物なんです」

「なんですって!?!」

それって……。

今まで私がやってたような方法じゃ無理って事じゃない？

「唯一の弱点は水をかける事です。水をかけるとその魔法の力が解けて粉になってしまうんです」

水ね……。

「って……。それじゃあ今から水を取りに行けば!」

「それは無理です。あそこに住むハタカーンの人達は水を使う事は無いんです。だから……。あの村を探っても水は出て来ないと思います」

そ……。そんな……。

水が無いなんて・・・。

「だからあそこにラカスタ・ソルジャーを置いているんです。その唯一の弱点が無いんですから」

・・・そういう事ね。

さて・・・一体どうすればいいのかしら・・・。

第3章 5話

一番奥に鉄格子が見える。

その中にはたくさんさんのハタカーンの若者が見える。

その鉄格子のすぐ側には2体の石像が見える。

あれがラカスタ・ソルジャーね。

さて……。

唯一の弱点である水が取れないと分かった今、どうやってあれと戦うべきか……。

何せ、あの位置だと鉄格子を外そうとすると自然と石像に近寄ってしまう。

つまり……どう頑張っても戦うしか選択肢が無い。

その辺の武器を使っても効かないし……。

でも……このまま諦める訳にもいかないし……。

待って……。

何も無駄に戦う必要無いんじゃない？

そうだわ！

「ねえ、フェア。提案があるんだけど」

「……はい？」

「あのラカスタ・ソルジャーは私が引き寄せるから。その間にフェアはあの扉を開けてくれない？」

「……！！それは危険です！！」

「危険は承知」

何せ倒せないなら、無理に倒す必要はない。

あの人質を解放すればいいだけの話。

これしか無い。

「お願い。フェアにしか出来ない事だから」

私はそう言つと石像に近づく。

すると……ゆっくりとだけ動き出した。

「さあ！来なさい！！」

目がこつちを見ている。

よーし……。

「こつちよ！」

少しづつ鉄格子から離れる。

こうしないとフェアヤ中に入っている人達にも反応してしまう。

それでは何の為に私が引き寄せているのか分からない。

2体とも引き寄せないと……。

ラカスタ・ソルジャーは腰に差してあつた剣を抜く。

冷や汗が出る。

何せこつちは何の武器も持っていない。

お姉ちゃんみたいに素手で戦える訳でも無い。

かなりの不利。

だけど……これしかない。

2体ともこつちに来た！

お願い……フェア。

後は任せたわよ！

第3章 6話

ガキイン！

ラカスタ・ソルジャーの剣が私のすぐ側をかすめる。

ハッキリ言つて命がけもいい所。

だけど、それは今に始まつた事じゃない。

だから・・・彼らを救う為にこういう事になつてもいいと思つてる。

これが1体だけならまだしも、2体ともというのだからかなり大変。ちらりと向こうを見る。

フェアがハタカーンの若者を逃がしている。

よしよし・・・。

このままいけば彼らを救う事も出来るわ。

「ヨーコ様！全員逃がしました！」

フェアの声が聞こえる。

よし！

これでなんとか助かつたわね。

これであとは・・・。

あっ・・・！！

しまった！

足を滑らせて転んでしまった。

まずい！！

「ヨーコ様！！」

フェアが来る。

「来ないで！！」

ここで私が死んでも・・・フェアだけは巻き添えにする訳にはいかない。

私はフェアを来ないように叫んだ。

いいのよ・・・これで・・・。

ユニコも助かるし・・・。

「危ない!!」

え・・・!?

誰かが助けてくれた。

私はその人物を見る。

それはハタカーンの若者の一人だった。

「何やってるの!? 助けてくれたのはお礼を言うけど・・・危険だから下がって!!」

そう・・・。

まさに今のは危機一髪だった。

いくらなんでも助けようとした人に助けられるなんて・・・。

「いいから聞いて。俺は病で・・・もう死ぬ運命なんだ・・・。だから・・・」

「病ですって? それなら私の仲間にユニコーンがいるから、彼の力を使えば」

私がそう言うと、彼は首を横に振る。

「ユニコーンは・・・純粋な少女にしかその力は使えないんだ・・・」

そんな・・・。

「だから・・・どうせ死ぬならあなたの為に死にたい」
そんな・・・。

なんとか出来ないの・・・。

「あなたは俺達を助ける為に命がけで救ってくれました。みんなを助けてくれたお礼です」

違う!

違う違う!!

「それでも!! 死ぬなんて!!」

ズウン!!

はっ・・・!!

ラカスタ・ソルジャーがこっちにやってくる。

口論してる場合じゃなかったわ。

でも・・・私はどうすれば・・・。

第3章 7話

来る・・・!!

「とにかく・・・下がって!!」

若者を抱えて飛び下がる。

なんとか・・・攻撃を避けたけど・・・。

「馬鹿な真似は止めて・・・。いくら病で死ぬ運命だとしても・・・最後まで家族の元で楽しく生きた方がいいわ」

そう・・・こんな所で死ぬなんて良くない。

「俺は決めたんです!あなたのような・・・俺と同じくらいの年齢の女性が命賭けてるのに・・・俺だって何かしたいんです!!」
私を振り解いた。

そして・・・ラカスタ・ソルジャーの方へ向かって行く。

「駄目ー!!」

・・・

それはまるでスローモーションのように見えた。

ラカスタ・ソルジャーの剣がハタカーンの若者の所に振り下ろされた・・・!!

だけど・・・若者はそれに怯える事なくそのまま突進していた。

そして・・・その体は真つ二つになっていた。

くっ・・・。

「ぐあああああ!!」

・・・!?

ラカスタ・ソルジャーの1体が苦しみながら崩れ落ちる。

これは・・・?

ハタカーンの若者の体から水が吹き出していた。

まさか・・・。

彼らの体に流れているのは・・・血じゃなくて水!?

・・・くっ!!

私は走る！！

そして・・・若者の体を受け止める。

その体からは水がどんどん流れている。

私はその水を手取る。

ごめんなさい・・・。

救ってあげれなくて・・・。

「はっ！！」

私はその水をもう1体のラカスタ・ソルジャーにぶちまける！！
すると・・・。

そのもう1体のラカスタ・ソルジャーも粉となって崩れ落ちた。
・・・。

「ごめんなさい・・・。ごめんなさい・・・。」

第3章 8話

「まさか・・・ハタカーンの体に水が流れていたなんて・・・」
フェアの声が聞こえる。

そう・・・。

その意外な真実のおかげで2体のラカスタ・ソルジャーは崩れる事になったけど・・・。

「ごめんなさい・・・」

私は・・・なんて無力なんだろう。

私が・・・妖魔キラーを使えるのなら！！

こんな悲惨な事にはならずに済んだのに・・・。
全て・・・私のせいだわ。

私が来たから・・・彼らは捕らわれる事になった。

そして・・・その見張りにラカスタ・ソルジャーを置く事になった。
私が出来なければ・・・少なくとも彼は家族の中で死ぬという充実した生き方が出来たはずだったのに・・・。

ハタカーンの人達が集まって来る。

「ごめんなさい・・・私のせいで・・・彼を死なしてしまった・・・」

「

「そう自分を責めないでください・・・。ヨーコ様」
ユニコが来る。

「でも・・・!!」

「そうだ。彼は病でもうすぐ死ぬ運命だった・・・。彼はみんなの為に・・・そしてあなたの為に死んだのだ。とても勇敢な事だ」

そうじゃない・・・。

そうじゃないの・・・。

「私が！私が・・・妖魔キラーを使えば・・・」

それなのに・・・。

まだ使う事が出来ない。

どうすればいいのか、まったく分からない。

そのせいで……。

「いいんです……。あなたのその涙で……。あなたの気持ちは十分分かります」

くっ……。

「それに……。一番の原因はクロウだ。あなたではない」

……。

「そうですね！ヨーコ様。ヨーコ様のせいではありません。元々クロウが妖魔界を混沌にさせようとしなければ、ヨーコ様が妖魔界に来る事も無かった。彼ももつと違う死に方もあった。悪いのはクロウです！！」

みんな……。

「……。それでも……。何か武器はあるわ……。このまま何もなのまま戦うには……。非力過ぎる」

「武器ですか……。何も無いんですが……。ここから山に向かう途中に小屋が見えますが、そこにある武器には絶対触らないでください」

「触らないで……。？」

「一体どういう事……。？」

「触ったら最後、骨になってしまふという、とんでもないのがあるのです」

それはそれは……。

「分かったわ。教えてくれてありがとう」

第3章 9話

「あれね」

ハタカーンから教えてもらった所に小屋があった。

あそこにある武器には触らないで・・・か。

なんでも触ると骨ってしまうと聞いたけど。

私はあえてその罠にかかりに来た。

そう。

逆にその武器を利用出来ないか考えていたけど・・・。

とりあえず・・・誰かいるのかしら？

「フェア、ユニコ、ここで待ってちょうだい」

万が一という事もある。

二人を置いて私は中に入る。

そこにはたくさんさんの武器が揃っている。

剣に槍に斧に・・・いくつもの種類の武器が所狭しと並んでいる。

凄い・・・。

「ふおっふおっふおっ・・・。ここへ何の用じゃ？」

あら。

誰かいたみたい。

そこにいたのは昔話に出てきそうな、魔女のような姿をしている老婆だった。

まるで人間みただけど・・・鼻が異様に高いし耳もとんがっている。

爪もかなり伸びているし・・・ちょっと同じ人間には見えない。

「いえ・・・。ここに武器があるって話を聞いてちょっと見に来たの」

うん、嘘は言っていないわ。

真実も言っていないけど。

「ふおっふおっ・・・。いろいろあるからゆっくり見るといい」

ふうん……。

罨にかかったと思ってるのかしら？
とりあえず……。

改めてじっくりと見る。

今の所普通の武器のように見える。

ハタカーンの忠告が無ければ無造作に触る所だわ。

「どうじゃ？手に取ってみては？」

上手い誘導ね。

「でも……私何も持ってないんです。だから本当に見に来ただけ
で……」

「そんなのはいいのじゃ。勝手に持っていくといい
触ると骨になるから持ち出せないから言える台詞ね。

「勝手に……？なんで……？」

私はゆさぶつてみる。

いくらなんでも勝手に持って行くなんて……ありえないし。

「なあに。こんなへんぴな所に来るのは珍しいからの。このまま埋
もれるぐらいなら、誰かに使って貰う方がいいじゃろう」

上手い言い訳ね……。

でも……これに触る訳にはいかない。

たぶん……この老婆は武器から吸い取ったエネルギーを糧に生き
てるんだわ。

第3章 10話

「さあさあ、遠慮せずに持ってみるといい」
魔女もなんとか触らせようとしている。

「ただど……私は逆になんとか魔女に触らせようと考えている。
そう……。」

この魔女が触ったらどうなるか……。
たぶん、この武器は無差別にエネルギーを吸い取ってしまうと思う。
だからこそ、さっきから魔女も触らないようにしている。

この武器を作り魔力を与えているんだと思う。
「うん……でも何がいいのか分からないし……」
わざと優柔不断のふりをする。

「何でもいいじゃろう。持ってみれば分かるかもしれない……」
「そう言うのなら、何かお勧めはあるんですか？」

魔女に振ってみる。

うん、不自然じゃないわ。

「お勧めか……、この剣なんかどうじゃ？」
指を指す。

あくまで触らないつもり。

「そうなんですか？それじゃあ取ってもらえませんか？」
私はあくまでも動かない。

「そう言わずに……！」
なっ……！！

魔女が私の手を取って、強引に武器に近づける。

くっ……いつまでも触ろうとしないから、強引な手に出たわね。
まずい……このまま触ったら……。
でも……魔女の力は意外と強い。
まるで振りほどけない。

「ちよ……ちよっと……！！」

「自分で持ってみるのが一番じゃ!!!」

この……!!

なんとか振りほどこうとするけど……。

まずい!!

「きゃ!!」

ついに……触ってしまった!!

「ふおっふおっふおっ!!」

魔女は勝ち誇る。

……?

「あれ?」

いつまでもたつても何とも無い。

魔女が勝ち誇ってる所から、どの武器に触ってもエネルギーを吸い取られるはずなんだけど……。

どういう事?

「なっ……馬鹿な!?!」

うろたえる。

今だわ!

「えい!!」

私は触ってしまった武器を手に取り、魔女に向かって投げる。

「ぎゃ……!!」

魔女が叫んだと思ったら……どんどん骨になっていく……。

これは一体……。

あっ!

もしかして……これ……。

妖魔界の住人にしか影響しないって事?

私は違う世界から来てるから、何ともないとか……。

とにかく……。

もう一度触ってみる。

うん、何ともない。

よーし。

私は剣を選んで腰に差す。

これは妖魔キラーとは違うと思うけど・・・。

これで強力な武器が手に入ったわ。

第4章 森

私はもう一度山へと戻って来た。

ラカスタを倒す為に。

始めて来た時は四天王という事で躊躇してたけど、今は強力な武器を持っている。

私は許さない……。

こいつが……ハタカーンの若者を人質に取らなければ……。

少なくとも……あの人は幸せに死ねたかもしれないのに。

私を助ける為に……何よりもみんなを救うために死んでいった……。

「何！？来たというのか！？あいつらめ……人質がどうなってもいいというのか!？」

「……残念だけどね。その人質は私が解放したわよ」

そのために……!!

「そのせいで……そのせいで!!死んだ若者がいるのよ!!」

「ふん。おまえを助けたんだ。どのみち全滅だ」

こいつ!!

こういう奴こそ……絶対に許してはいけない!!

ここに来てからいくつか戦いをしてきたけど……。

憎しみを抱いたまま戦うのは始めてだわ。

こいつは……私が倒す!!

「その前に……あなたが敗れるのよ!!」

私は剣を抜く。

「なっ……!!それは……!!」

「あんたも知ってるみたいね。何故か私には影響しないみたいだけどね」

剣を構える。

こいつは……絶対倒す!!

「はっ!!」

ラカスタは一瞬下がる。

そう。。。

触ったら最後という事はラカスタも分かってる。

立場は完全に逆転している。

もつとも・・・私は剣を使った事なんて無い。

剣に振り回されてる感じもする。

「ヨーコ様・・・」

「フェアは下がってて、触ったらあなたも骨になっちゃうんだから

!!」

そう。

この武器の唯一の弱点は味方であるフェアやユニコにも影響してしまふ事。

だから、二人には離れていて欲しい。

「・・・たあ!!」

一気に走る!!

「くっ・・・」

ラカスタはなんとか離れようとする。

だけど・・・!!

こいつは絶対倒す!!

「はああああ!!」

触れた!!

「ぐわああああ!!」

・・・ついに。

ついにラカスタを倒した。

「ふう・・・」

「ヨーコ様!! 剣が!!」

フェアが叫ぶ。

見ると・・・剣はボロボロになって崩れて行く。

「さすがに四天王のエネルギーには耐えきれなかったみたいね」

今回は使ってみたけど、正直こんな危険な武器はあまり持ちたくなかった。

だから・・・これで良かったのかも。

「ヨーコ様・・・。取りに戻った方がいいのでは？」

「いちいち戻ってる暇ないわよ。それよりも・・・次の目的地はあそこね。」

山の頂上から見たのは以前フェアが言っていたくぼみが見えた。

「行くわよ」

第4章 2話

山からくぼみに向かうまでに森を抜けなければならない。

私はその森へと足を踏み入れた。

これが・・・想像していたのとは違った様子を見せていた。獣道ぐらいはあるかなあ・・・とは思っていたけど。

まるで歩ける道が無い。

これは・・・。

私はまだしも、ユニコが大変そう・・・。

「大丈夫？ユニコ？」

「・・・なんとか歩いてみせますが」

それしか無い訳だけど・・・。

「それにしても・・・本当に良かったんですか？ヨーコ様
まだフェアはその事を言ってる。

「いいのよ。いちいち戻ってたらきりが無いじゃない」
そう。

例え今戻って武器を手に入れたとしても、長くても次の四天王まで
しかもたない。

その毎に戻っていたらクロウに対抗策を打たれてしまう。

それでは意味が無い。

それに・・・。

だいたい私には妖魔キラーという強力な武器が使えるはず。

その力を使えるようにした方がよほどいい。

だからあれには頼らない。

もうあの事は忘れて・・・。

さっさと森を抜けなきゃ。

それにしても・・・。

この森もとんでもないわね・・・。

あまり奥が見えない。

これまでように襲いかかっても、逃げるのも困難だわ。相手が見えないから側に来るまで分からないし……。

「ねえ、フェア。この森にはどんな人達がいるの？」

「そうですね……。でもここには生き物よりも植物を注意した方がいいですね」

「……植物？」

「どういう事？」

「はい。おそらくクロウによって欲望にやられていると思いますので……」

……？

「つまり……植物も襲ってくるわけ？」

「はい。この妖魔界では植物にも意志があるんです」

へえー……。

「って感心してる場合じゃなかった。」

つまり……。

この植物だらけの森では周囲が敵だらけという事になる。でも行かないといけないし……。

「分かった……覚悟して進みましょう」

第4章 3話

出来るだけ慎重に進む。

この中で一番危険なのは私じゃなくてユニコ。

そう・・・一番身動きが出来ないのがユニコだから。

私はいざとなれば木の上に登る事も出来るけど、ユニコはそうはいかない。

後ろには下がるけど、そんなにスピードを上げて下がる事も出来ない。

左右に避けようにも、この木々の数のせいでぶつかってしまう。

だから・・・ユニコを守るためにもなるべく慎重に進まないこと。

「ヨーコ様・・・そんなに慎重にならなくても・・・」

その当の本人であるユニコが言う。

「何言ってるのよ。ここではいつ襲われても文句言えないのよ?」

そう・・・。

私は別にいい。

だけど仲間であるフェアやユニコは何とか守らないと・・・。

ガサガサ・・・。

・・・!!

草が動く音が聞こえる。

「待つて!」

私は制止させる。

ガサガサ・・・。

物音はこっちに近づいて来てるみたい。

何か来るわね・・・。

一体何が・・・?

ガサガサ・・・。

来る・・・!!

「なっ!!」

私はその姿を見て驚いた。
そう。。。

この森の中ではあり得ない生き物を見たから。

それは・・・魚だった!!

私は即座に突進だけは避けた。

ほとんど本能だった。

あまりにも・・・場違いなものを見てしまったから。

「今は・・・一体・・・？」

私はフェアに聞く。

私の世界では絶対にありえない生き物を見てしまったから。

だって!!ここは森よ?

なんで魚がここに!?

「今のはフォレスト・フィッシングです。森に住む魚で今のように突進してその歯で獲物を食いちぎる生き物です」

・・・やっぱり森に住んでるんだ。

いったいどういう原理なのか気になるけど。。。

この妖魔界でいちいち悩んでも仕方ないかもしれないけど。。。
とにかく!!

ガサガサ。。。

また今のがやって来るみたい。

第4章 4話

ガサガサ……。

草をかき分ける音がどんどん近づいて来る！

「ユニコ！しゃがんでて！！」

また来た！！

ジャンプして……正確に私の所に来ている！

「はっ！！」

私はタイミング良く蹴りを放つ。

最初は驚いたけど……そういう生き物だと分かればそうは難しく
ない。

何せ相手は魚。

今までの相手と比べたら簡単だわ。

「ヨーコ様……大変です！！」

フェアが叫んでいる。

「何……？」

「フォレスト・フィッシングが……大量にこっちに来ます！！」
なっ……！！

大量に……？

「今のは単なる偵察だったみたいで……群れでこっちに来ます！
！」

まずい！

1体1体ぐらいならまだしも……。

群れで一斉にこられたら……まずい！！

どうしたらいい……？

こうなったら……。

私はユニコの背中に乗る。

「走って！！」

こうなったら……一カ所を強行突破しか無い！

「ユニコ・・・なるべく首は下げていて

「・・・？それでヨーク様は・・・？」

「耐える！」

それしか無い。

「ヨーク様！！耐えるって・・・！！」

上空でフェアが叫ぶ。

「私はいいのよ。最悪でもユニコに治す事は出来る。でも・・・ユニコ自身はそうはいかないでしょ？」

そう・・・。

ユニコの分も私がくらう覚悟。

「そんなの駄目です！！」

「言い合っている暇無いわ・・・。来るわよ！！」

そう・・・。

もうすぐ側にまで来ていた。

これを選択する以外に方法が無い。

ガサ！！

魚が一斉にジャンプして私に襲いかかる！！

私は歯を食いしばる。

「くう・・・！！」

想像以上に痛い！！

「この・・・離れなさい！！」

私は慌てて魚をはがす。

あちこちから血が出る。

さすがに・・・鋭い歯だわ。

第4章 5話

「どう・・・？まだ追い掛けて来てる？」

私は意識が飛びそうになるのをなんとか堪えながら言う。

さすがに・・・出血が酷い。

「駄目です！まだ大量に追い掛けて来てます」

フェアが後ろを振り向きながら言う。

とりあえず安全な所まで逃げないと・・・。

治す暇も無い。

今の所、ユニコにしがみついているのがやっと。

そのユニコの体も私の血で所々赤くなっている。

まずいわ・・・。

なんとかしないと・・・。

このままじゃ私だけじゃなく、ユニコもやられる。

それだけは駄目・・・。

フェアとユニコは助けなきゃ・・・。

一番簡単な方法は、私を置き去りにさせる事。

そうすれば私は死ぬけど、二人は助かる。

でも・・・絶対二人は取らない選択。

となると・・・別の方法を考えなきゃ・・・。

「ヨーコ様！！追いつかれます！！」

どうすれば・・・。

「かかれ！！」

何！？

突然・・・誰かの声が聞こえた。

その直後、森の茂みから沢山の狼が飛び出した！！

「なっ・・・」

その狼はフォレスト・フィッシングを捕まえると、そのまま食べてしまっている。

「これは・・・」

フェアがつぶやく・・・。

「何なの？」

「彼らは・・・ワー・ウルフです」

「ワー・ウルフ・・・？」

ウルフが狼つて所は私の世界と同じだけど・・・。

「彼らはその魔力でヒューマンと同じような姿になれるのです」

また聞き慣れない単語が出て来たわね・・・。

「あの・・・悪いけどヒューマンって・・・？」

「あつ、すみません。ヒューマンというのはルドルフ様やヨーコ様のように二本の足で立ち二本の腕で物を持つような体を持つてる生き物です」

ふうん・・・。

つまり・・・人間みたいな姿形をここではヒューマンって言ってるのね。

という事は・・・。

この狼は私のような人間のような姿になれるって事ね。

一匹の狼が私達の所へと来る。

「悪いな。エサを取らせてもらった」

「構わないわ。こっちは食われる所だったんだもの。助けられたわ・

・・・」

「・・・？凄いい怪我をしているじゃないか」

「あつ！そうだわ！」

フェアが叫ぶ。

「ユニコー！！」

「分かってる」

私を下ろして・・・角の力で怪我を治す。

・・・ふう。

かなり・・・やばかったわ・・・。

第4章 6話

「ところで……ここへは何しに？」

私達に近づいている一匹の狼がそう聞く。

どうも……この狼がこの群れのリーダーみたいね。

他の狼は少し離れた所で見守ってる感じ。

「巨人の目”に行く為の旅をしてるの”

”あそこへ……？また何故……”

「ルドルフとドルイドのオババに頼まれてね。クロウを倒す為にも

”巨人の目”に行く必要があるの”

「へえー……。あんたルドルフ様から頼まれるなんて……偉い

様？」

あれ？

このリーダー……。

なんか……女性っぽい感じがする。

狼の姿のままじゃどっちかよく分からないけど……。

「そう偉いって訳じゃないけど……何せ違う世界から呼ばれたし

「それじゃあ……あんたが噂の救世主って奴かい？」

「どついう噂かは知らないけど……一応救世しに来たわ」

そこは間違っではない。

まだ救つてもいないのに救世主つても変な話かもしれないけど。

「久しぶりのご馳走を狩りに来たら、知らずに救世主を救っていた

なんてね。こりゃあルドルフ様に誉められるかな」

やはり……。

この妖魔界をこれまで平和に保って来ただけあって、ルドルフはかなり憧れの存在みたいね。

あれ？

そういえば……。

「あなた達……クロウの欲望の魔力にやられてないのね」

ここはあの山よりもクロウに近い場所。

あの山の周辺でも欲望にやられてるのがいたのに。

彼らはこれだけ集団にいるにも関わらず、きちんと統率が取れてい
る。

「あつはつは。それはね。あたい達は始めから理性でなんて動いて
ないからさ」

・・・へ？

「あたい達は最初から本能で生きてるんだ。今更欲望なんか関係な
いのさ」

へえー・・・。

「それに・・・あなた山にいたラカスタを倒したんだろ？」

「え？なんでそれを・・・」

まだ倒してそんなに経ってないのに・・・。

「やっぱり。なんか変な魔力は感じていたんだ。ラカスタを倒した
おかげでこの辺りの魔力も薄れて来てるんだ」

へえー・・・そうなんだ。

「だから四天王を倒すだけでも、だいぶ違うんだ」

これはいい事を聞いたわ。

「そうだ！せっかくルドルフ様が呼んだ救世主に会ったんだ。宴で
も開こうー!!」

「・・・え？」

「いいだろ？豪勢にしようじゃないか」
でも・・・。

「まあ・・・せっかくの申し込みだし。ずっと戦いばかりだから休
息は必要ですよ」

うーん・・・。

まあ、フェアがそう言うなら・・・。

「分かったわ」

第4章 7話

その日の宴はまさに豪華なものだった。

救世主を祝うという事で、普段よりも凄いとかが言ってたけど。

ワー・ウルフ達はヒューマンの姿になって広場の中央で踊り、そこでは炎が燃えさかっていた。

どうもヒューマンの姿になると火が怖くなくなるらしい。

なんとも不思議な話だけど、ここでそんな事言ったらきりがないわ。

もう、そういうもんだと受け入れるしか無い。

そして・・・豪華な食べ物が用意された。

それらは私達の世界と変わらないような物。

ハッキリ言えば人間の食べ物と同じ。

お肉に野菜に果物に・・・。

一体どうやって採った物なのかしら・・・。

・・・。

あんまり考えない方がいいかもしれない。

何せここは私の世界とは違う。

つまり、私達の世界とは違う採り方をしてる可能性はある。

その現場は見ない方が身のためだわ。

「さあ！どんどん食べていいんだよ！！」

リーダーの彼女は豪快に食べながら言う。

ここではあまり上品に食べる必要も無いしね・・・。

何せそういう目で見える人は一人もいない。

彼女と同じようにお肉も丸かじりで食べる。

・・・うん！美味しい！！

豚肉と同じような味。

これは豚肉を焼いた物だと思っていればいいわね。

フェアもユニコもそれぞれ好物を食べてるみたい。

「あつはっは。救世主と一緒に食事出来るなんて、夢のようだね！」
ふふ。

彼女は豪快な感じをするけど、嫌な感じはまったくしない。
裏表が無くて、とてもいい人だね。

「さあ！これも飲んで！」

そう言っつて渡されたのは・・・お酒の匂いがする。

色は赤色でまるでワインみたいだけど・・・。

どうしよう・・・。

私・・・お酒なんて飲んだ事無いんだけど・・・。

「何してんだい！主役のあんたが飲まなくてどうするんだい！」

つまり・・・。

飲まなきゃいけないって事ね・・・。

まいったわね・・・。

仕方ないわね。

ここは一気に！！

「おお！いい飲みっぷりだね！！」

うにゃ・・・。

なんか・・・風景がゆがんで・・・

第4章 8話

・・・あれ？

頭が痛い・・・。

あっ・・・そうか。

あのお酒を飲んだから・・・。

ううう。

これがいわゆる二日酔いってやつなのね。

ううう、気持ち悪い・・・。

・・・あれ？

「え・・・!？」

私はそこでようやく気づいた。

そう・・・。

私とワー・ウルフのリーダーの彼女と二人そしてユニコと一緒に、鉄で出来ている牢屋の中に入っている事に。

「なっ・・・なんで!!！」

私は力いっぱい扉を叩く。

「何してんだよ・・・」

リーダーが起きる。

「・・・あっ!?!?なんだこれ!？」

そう・・・。

不思議に思った事がある。

私達を捕まえたのなら、なんで彼女も一緒なのか。

つまり・・・これはワー・ウルフ全体で考えた事では無い。

たぶん・・・一部の反乱のせいだろう。

その証拠に見える範囲で、他にも捕まってるワー・ウルフ達が見える。

牢屋の鉄格子から、私達を捕まえたと思う反乱側のワー・ウルフがやって来た。

「おい！これはどういう事だ！！」

「悪いとは思ったが・・・これからはクロウ様の時代なんだ」
くっ・・・。

「何言つてんだ！！これからだと・・・クロウの時代なんて来る訳ないだろ！！何せそのクロウを倒す為の救世主が現れたんだからな
！！」

「・・・無駄よ。彼らは・・・クロウの魔力にやられている」
そう・・・。

目の色が彼女と違う。

これこそが・・・クロウの魔力にやられた証。

今はまだ理性があるような感じだけど。

これがそのうち無くなる。

今までの経験でなんとか分かった話だけど・・・。

「そんな・・・」

リーダーの彼女はがつくりと肩を落とす。

そう・・・。

クロウの魔力が関係無いなんてとんでもない。

彼女達はその効果が無かっただけ。

その中にはやはり魔力に負けてしまった者もいる。

それが、今回のような事を起こしてしまった。

それにしても・・・。

私は再び牢屋の中に入るはめになるなんて。

でも・・・。

今回はハタカーンの人達のような手は使えない。

何せ彼らはクロウの魔力に負けて、自らやってるのであって脅迫されてる訳では無い。

どうすれば・・・。

第4章 9話

例によってフェアがいない。

こういう時、体の小さい彼女は有利かもしれない。おそらく隙を見てどこかへ隠れているのでしよう。

一体どこへ……？

ガサガサ……。

……！！

草をかき分ける音。

何か最近も聞いたような音。

そう……。

フォレスト・フィッシングが来る音。

その物音は大量にあちこちから聞こえて来る。

当然、私達を見張っているワー・ウルフ達もそれに戸惑う。

これは……。

その姿が見えた！！

間違い無い！

魚の姿。

フォレスト・フィッシングだわ。

その群れがここへとやって来た。

かなり混乱している。

「ヨーコ様！」

フェアがやって来た。

その手には鍵を持っている。

この混乱を利用してこっそり持ち出したんだわ。

「助かったわ。フェア」

フェアが牢屋の鍵を開ける。

「いいんです。私が下戸なのが助かりました」
なるほど。

フェアはお酒を飲まなかったから助かったのね。

そういえば・・・ユニコも飲んでいたわね。

お酒を飲むユニコーンって不思議な光景かもしれないけど。

とにかく・・・。

「脱出するわよ！」

私はワー・ウルフのリーダーの彼女を連れて、なんとか逃げ出す。

どうもフォレスト・フィッシングもワー・ウルフ達にしか標準を決めてないらしく、私達の所まで来ない。

私はさらに捕まえられていた他のワー・ウルフ達も助ける。

そして・・・。

全員で離れた所へと逃げ出した。

ふう・・・。

それにしても一時期は私を狙っていたフォレスト・フィッシングに、逆に助けられるなんて皮肉は話ね。

あいつらがやって来なければ・・・。

おそらく私は殺されていたかも。

「それにしても・・・クロウの魔力に負けるって・・・おっかないんだな」

「そうね・・・。あなた達はなまじ知恵があったからこういう事になっただけでしょうね」

そうでなければすでに同士討ちや統率の取れない勝手な行動とか行っていたでしょうね。

「ねえ。ルドルフ様のお城へ避難しては？」

フェアが言う。

「あそこへ行けば、クロウの魔力から守ってくれます」
なるほど。

それはいい案だわ。

「そうね。あなた達は今から行った方がいいわ。あまり長い間留まってる危険ない」

「・・・悪いな。本当は助けられたお礼でもしたいのに・・・」

「いいのよ。私を助けてくれたでしょ？そのお礼にあなた達を助けたと思ってくれればいいわ」

それに・・・。

なんか彼女の性格だと付いて来るとか言い出しかねない。

フェアやユニコだって十分巻き込んできると言うのに。

それに彼女は守るべく群れの人達がいる。

群れのリーダーとして群れを守る事を優先した方がいい。

「ここでお別れね。クロウを倒したら城に戻るから。その時には一緒に祝いしましょ」

「ああ・・・」

第4章 10話

そろそろ目標となるくぼみにも近い。

そのくぼみに行けば次の目標が見える。

そこへ行けば次の目的地である”巨人のてのひら”が見える。

だいぶ最終目的地に近づいて来てるわね。

「ヨーコ様。ふとした疑問なんです。何故そこまで私達を守ろうとするのですか？」

え？

「そんなの当たり前じゃない」

そう。

私の中では、別に特別な事では無い。

仲間を、そして友達を守る事は当たり前。

「だって、私がこうして無事に来れてるのはあなた達のおかげじゃない」

二人がいなければ、とっくの昔に死んでるでしょうね。

そういう意味では、私が二人を守るのは当たり前。

例え、この身を犠牲にしても。

「あっ」

ふと思いついた。

その原因が。

そう言えば、その昔あった出来事。

私がまだ幼かった頃。

たぶん、まだ幼稚園ぐらいの時。

とても仲の良かったグループがあった。

その時に、グループの一番年上のお姉さんがいた。

みんな当然慕っていた。

とても素晴らしい人だった。

そう。

だったのだ。

彼女はある事故に巻き込まれて死んでしまった。

それがとても悲しかった。

その時に、親しい人がいなくなるといふ事の意味を知った。友達や仲間がいなくなる。

それは子供心にも、非常に悲しい出来事だった。

「たぶん。その時に仲間の重要さを知ったんだと思う」
だからこそ、私は仲間を大切にしないといけない。
もうあんな悲しい出来事は嫌だから。

でも。

それがあまりにも強すぎて。

逆に友達を作るのが怖くなってしまった。

失う事の恐さ、悲しさをもう一度味わいたくないため。
だけど。

今回でまた仲間が出来た。

この妖魔界を救うために。

第5章 穴

“ここが”巨人のへそ”と呼ばれるくぼみ……。

あの山から見た時はその正体も分からなかったけど。

ここまで近くに来れば分かる。

もの凄く巨大な穴がそこにはあった。

下は見えないほど深い。

その穴の端には大きな螺旋階段が見える。

どうもこれで下へ下がれるみたい。

もっとも私は降りるつもりは無い。

次の目的地”巨人のてのひら”である高原が見える。

ちよつと高台になつてるのね。

「ヨーク様……」

怯えながらフェアが来る。

一体どうしたのかしら……？

フェアが指さしている。

そこには……人間のよう生き物がいた。

他のヒューマノイドかしら……？

いや……。

それはとても生き物とは言えなかった。

肉が崩れ落ちて目がある所には目が見えなかった。

なんというのか……。

私達の世界にもこういう化け物はいる。

ゾンビという生きる屍という存在。

それと似たような存在なんでしょうね……。

それがじりじりとこつちに近づいて来ている。

フェアは怖がって私にしがみついている。

こういう彼女を見るのは始めてだわ。

それにしても……。

出来る事なら触りたくない。

何か・・・武器になるような物は無いのかしら。
ふと・・・。

その生きる屍の口が開く。

「くあああああ!!」

なっ・・・!!

突然力が抜ける。

私は地面に倒れる。

フェアも地面に横たわってるのが見える。

何・・・?

意識はある。

別に痺れてる訳でも無い。

単に力が抜け落ちた・・・そんな感じ。

さっきの叫び声の力・・・?

たぶんそうだわ。

それぐらいしか原因が無い。

そんな力を持つてるなんて・・・。

じりじりと近づいて来ている。

くっ・・・どうすれば・・・!?

・・・?

突然。

そいつは私達から離れて行った。

どういう事・・・?

徐々に力が戻って来る。

あのまま何か攻撃してくると思ってたのに・・・。

「あれ?ユニコは?」

そう。

側にいたはずのユニコの姿が見えない。

「あっ!ヨーク様!!あそこに!!」

穴の方を指さす。

そこには・・・。

力が抜けてぐったりとしたユニコを運ぶ生きる屍達の姿が見える。
まずい！！

「追いかけなきゃ！！」

第5章 2話

私は螺旋階段の方へと走る。

「くっ……」

そこには数多くの生きる屍達が見える。

「あいつら……。そうだわ！あいつらはアガラットです！！」

「アガラット……？」

「はい。アンデットの一種で、あの叫び声を聞くとエネルギーを吸い取られるんです」

なるほど……。

だからさっき力が抜けたのね。

「すいません……。私……ああいうアンデットが苦手だったもので……」

気持ちは分かる。

私だって……出来るなら関わり合いになりたくない。でも……。

ユニコが連れて行かれてる今、なんとかしないと……。

一匹や二匹ぐらいなら、何か策も考えられるけど……。

今日の前にある数は軽く20匹を超える。

ハッキリ言って武器も無い私に、なんとか出来る数じゃない。

ユニコが穴の奥の方へと消えて行った。

そこで……ようやくアガラットの奴らも姿を消す。

「ヨーコ様……」

不安そうに見つめる。

そう……。

何も怖いのはフェアだけじゃない。

私だって怖い。

この奥にはああいう奴らが大量にいる事だってありうる。

それに対抗する力なんて無い。

でも……。

このままユニコを見殺しなんてしたくない！

「フェア……。降りて行くわよ」

私は決意を固めた。

ユニコを助ける為に。

「ヨーコ様……」

「嫌ならここで待っててもいいのよ。どうせ……。ユニコを助けたら戻って来るんだし」

「いいえ！！私はヨーコ様と共に！！」

体が震えている。

よほど怖いのは分かってる。

私だって出来る事なら行きたくない。

私だって女の子。

本能的にああいうのは受け付けない。

でも……。

ユニコを助けないと。

私はゆっくりと螺旋階段に足を乗せた。

待っててね……。ユニコ。

第5章 3話

ゆっくりと降りて行く。

やがて・・・一番下が見えた。

地面がある。

そこに・・・ぐったりと倒れたユニコの姿も見える。

問題は・・・。

その周りに沢山のゾンビだった。

さつき私を襲っていたアガラットとは違う。

何処へ消えたのかしら・・・。

どう考えても畏ね。

何せユニコには何もされてる様子が無い。

縄で縛ってないし、檻に入ってる訳でも無い。

ただ・・・横になって眠っている感じ。

でも問題は・・・この大群のゾンビ。

武器の無い私にとって、これをなんとかするのも難しい話。

ユニコは無事そうだけど・・・。

そうだわ！

「ねえ、フェア。ユニコが無事かどうか確かめてくれる？」

そう。

まずユニコがただ眠ってるかどうかを確かめないと。

「分かりました・・・」

フェアがゆっくりと降りて行く。

こういう時飛べるって便利ね。

ユニコの側に降りる。

まだゾンビ達は気づいていない。

もっとも・・・気づいたとしてもフェアは飛んで逃げればいいだけ

だけ。

やがてフェアが戻って来る。

「ヨーコ様、どうやら力が抜けているみたいですね。なるほど……。」

どうもアガラットの能力でやられてるみたい。

こうなるとやっかいだね。

しばらくはユニコは立ち上がる力も無いって事ね。

どうすれば……。」

……!?

誰か……ユニコの側にやって来る。

私は慌てて身を隠す。

ちらりと見たけど……黒い布みたいのを被っていて顔は見えなかった。

人間のように二本足で立ってる感じだったけど……。」

全身が布で覆われているので中身は分からない。

でもあいつもゾンビとかの仲間に違くないわ。

「おまえが仲間のユニコーンか……。どういう気分だ?」

……仲間!?

どういう事……。」

やはり……私を狙って?

「うるさい! 殺すならさっさと殺せ!!」

ユニコ……。」

「ヨーコ様を危険にさせるぐらいなら、死を選ぶ!!」

「そうはいくか。そいつは必ずやって来る。あいつはクロウ様にとつて邪魔者だからな」

くっ……。」

やはりユニコは私を釣るためのエサなんだわ。

そうなる……。」

「それにあいつはラカスタをも破ったからな。同じ四天王としてあいつは危険だ」

なっ……。」

あいつも四天王……。」

これは・・・。

下手に降りない方がいいわ。

第5章 4話

私は一旦穴の入り口である一番上まで戻っていた。

「どうしたんです？ ヨーコ様」

「決まってるでしょ。あいつとどう戦うかを考えないと・・・ユニコを助けるのは無理だわ」

そう・・・。

あいつがこのゾンビ達のボスなんでしょう。

それはあいつが表れた時になんとなく分かっていた。

あいつが出て来た時、周りにいたゾンビ達が道を開けていた。

だからこそ、あいつがゾンビやアガラットを操っているんだわ。

つまり・・・逆に言えばあいつを倒せばゾンビ達の力も消える。

そうすればユニコの力も元に戻る。

それでここから脱出！

と・・・ここで問題なのはあいつを倒す方法。

何せこっちは何の武器も無い。

しかも多勢に無勢。

不利な事このうえない。

どうすればいいのかしら・・・。

「大丈夫でしょうか・・・。ユニコは・・・」
「フェアが心配する。」

「ユニコは大丈夫よ。あの口ぶりからして、ユニコは私を釣る為のエサなんだもの。そのエサを無くすような事はあいつだってしたくないはずだわ」

そう・・・。

畏にかけるためのエサは元気な方がいいに決まっている。

だからユニコが危険になる事はまず無い。

だからこそ私はゆっくりと策を考える事も出来る。

「ねえ・・・。何か弱点は無いの？」

「ああいつアソデット系は聖なる物に弱いんですが……」
ふーん……。

でもここに聖なる物なんて無い。

聖なる物……。

……あれ？

「ねえ……。ユニコ自体が聖なる存在じゃない？」

確かユニコの角には傷や病を治す力があるはず。

「でも……あれは清らかなる少女にしか効果が無いんですが……」

「

待って……。

「ねえ。それを何とか利用出来ないかしら？」

そう。

それこそが今私達にある唯一の武器。

ユニコは私を釣るエサであると同時に、あいつらを倒せる弱点の武器でもある。

かなり危険だけど……。

第5章 5話

「……!! ヨーコ様……それは危険です!!」

「そんなのは百も承知よ」
そう。

危険なのは分かってる。

かなり危ない賭けである事は間違いない。
でも……。

他に方法が無い。

この私が出る事はいくつも無い。

その少ない出来る事の中で選んだ最善の方法。

それはフェアが心配するほどの危険な事。

これならユニコを助ける事も出来るし、あいつらを倒す事も出来る。
もつとも……。

私の考え通りになるという保証は何処にもない。

かなり推測が入ってるのは間違いない。

この考え自体が間違っていたその時は……。

まず間違いなく死んでしまう。

それでも構わない。

何せ……それしか方法が無いんだから。

私はゆっくりと螺旋階段を降りる。

失敗してたり間違っていた時の死は、すでに覚悟の上。

ユニコを助け、さらに四天王を倒すには綱渡りのような危険な方法
でも取るしかない。

しばらく降りると地面が見えて来た。

その中央にはユニコがぐったりと倒れている。

そして……。

その周りにゾンビ達が囲んでいる。

さっきと同じ光景ね。

ただ・・・四天王の姿は見えない。

何処へ行ったのかしら・・・？

でもいいわ。

いないなら、いないで都合がいい。

もう少し下へ降りる。

・・・ん？

例の黒い布を被った・・・四天王の一人がやって来た。

何か妙な感じね。

そう・・・。

なんでこの距離になると来るのかしら？

まるで・・・分かってるみたいに。

確かにユニコはエサで私を釣るための罠だというのは分かる。

でも・・・。

なんで計ったかのように、一定の距離まで降りるとユニコの所へと来るのかしら・・・？

第5章 6話

間違いない。

絶対・・・あいつは何かを使って私が来てる事が分かるんだわ。だからこそ、一定の距離になるとユニコの側に来る。

つまり・・・。

私が来てる事を察してるから。だけど・・・。

それなら何でこの螺旋階段を上がるって事をしないのかしら・・・？
確かにあそこにいれば確実に私を迎え撃つ事は出来るけど。

もしかしたら・・・。

それほど正確に場所が分かっている訳じゃないのかしら？

だいたいの距離しか分からないから上がって来ない。

あまり遠すぎると逃げられてしまう。

逆に近づき過ぎると思わぬ反撃を受ける事もある。

だから・・・あそこから離れないんじゃないかしら。

あいつにしてみれば、あそこにいれば必ず私が来るから・・・。
余裕で攻撃する事が出来る。

つまりはそういう事なんだわ。

それなら・・・。

私はある程度上に登る。

すると・・・。

奴はまた離れて行った。

この位置だと、もう私がいる事が分からないんだわ。

つまり・・・あいつはどこか遠くへまた離れて行った・・・。

そういう風に思ってるんだわ。

確かに・・・ちよつと高い距離。

でもここが気づかれないギリギリの距離。

よーし・・・。

私は覚悟を決めた。

行くわよ……!!

「はっ!!」

私は螺旋階段から飛び降りた!!

そう。

これが……私の考えた作戦。

素直に階段を使うと気づかれる恐れがあるけど。

これなら……一気にユニコの所へ近づける!!

地面が近づく……!!

「きゃっ!!」

思いっきり地面にぶつかった。

かなり……体が痛い……

「……ヨーコ様!!」

「良かった……ユニコ。まだ無事みたいね」

力は抜けているけど、表情は元気そうだね。

私はユニコの角に触る。

だんだん痛みが引いて行く……

「さあ……起きて」

私はユニコを抱える。

「でも……ヨーコ様……。周りが!!」

そう。

いい加減にゾンビ達も気づいている。

どんどん私に迫ってきている。

だけど……。

私はユニコから離れない。

「心配ない……。私の考えが正しければ……問題ない」

第5章 7話

ゾンビ達がゆっくりと近づいて来る。
だけど……。

私の考えに間違いが無ければ……。

このままユニコの角を持ったままで解決出来る。

「ヨーコ様……」

ユニコが心配している。

確かに賭けよ。

それは私も認めるわ。

でも……。

これ以外に有効な手なんて何もないんだから仕方ない。

ついにゾンビが私に触れる！

だけど！！

ゾンビの方が崩れて行った。

やった！！

読み通りだわ。

「ヨーコ様。これは一体……!?」

フェアも驚いている。

「簡単な話よ。こいつらは聖なる力に弱いんでしょ？そしてユニコの角の力は聖なる力、ただしその力は限定されてるけど……。私にはその力が効く。だからこそその角を触ったままの私には聖なる力が使える」

「……そうか！つまり……ヨーコ様が聖なる武器なのか!!」

ユニコの言う通り。

だから私に触ったゾンビは崩れて行った。

私の読みは当たったわ。

「貴様!! いつの間……!!」

どうやら、今頃四天王の一人が来たみたい。

「あつ！ヨーコ様・・・こいつは・・・リッチですよ！・・・アンデットの中でも最高クラスに強い存在です！！」

これがリッチ・・・。

確かに・・・かなり強い存在。

それが・・・今、目の前にいる。

私は緊張する。

だけど・・・こいつもアンデットに変わらない。

つまり・・・。

ユニコの力に弱いつて事。

もっともゾンビみたいに簡単に触ってくれるとは限らないけど。

「いつの間について・・・。そりゃあ階段使って無いもん。当たり前でしょ？」

そう。

私は途中から飛び降りている。

だから、一気にユニコの所に来ている。

意表をつくにはこれしか方法が無かったわ。

第5章 8話

「階段を使つてないだと・・・!!」

「そうよ。途中から飛び降りたんだもん。あんたに見つからないには最善の方法でしょ？」

奇襲をかけるには絶好の方法だったわ。

「無茶をする奴だな」

「でも・・・ユニコを助けるにはこれが一番だもの」

馬鹿正直に階段を降りてゾンビをかき分けて・・・なんて方法を使える訳が無い。

途中でやられるに決まってるわ。

「それにしても・・・上手く行ったからいいもの。もし失敗していれば・・・」

ユニコが心配する。

もちろん、そのリスクは分かっていた。

「信じていたわよ。ユニコの力を」

そう。

ユニコの癒しの力を信じていなければ出来ない行動。信じていたからこそ、危険な方法を取っただけの事。

「くっ・・・。お前がクロウ様を脅かす存在だと聞いてはいたが・・・。確かにやつかない相手だな」

さて・・・。

ここまでは私の考え通り。

最大の問題はこいつ・・・。

四天王の一人、リッチ。

こいつは一筋縄ではいかない。

こっちの武器は弱点でもある、ユニコの聖なる力のみ。

かと言ってこのままの状態でなんとか出来るとは思えない。

どうすれば・・・。

「やはり……。ここで死んでもらう!!」
どうする!?

リッチの手から冷たい冷気みたいのが出る。
うう。。。。

もしユニコの角に触っていなければ。。。。
どうなるか確かめたくないわね。

「くつくつく。そのままずっと待ってるだけでいいのか?」
。。。。?

どういう事?

ここに来て急に勝ち誇るなんて。。。。

「こいつを捕まえた!!」

あっ!!

リッチの手には。。。。

フェアがいた。。。。

「フェア!!」

私は思わず走る!

「勝った!!」

あっ。。。。!!

リッチはフェアを離し。。。。

その手が私を掴む。

しまった!!

第5章 9話

「ヨニコ様!!」

フェアの叫び声が聞こえる。

フェアにしてみれば、自分のせいでこうなってしまったのだから仕方ないかもしれないけど……。

私はフェアを助ける事しか頭に無かった。だから……。

リツチに捕まってようやくその事態に気づいたぐらい。

「ああああ……」

だんだん……力が抜ける……。

アガラットの時の比じゃない。

もつと根本的なもの……。

そう……。

まるで生きる気力そのものを吸い取ってるみたいに……。
まさか……。

ここで……私の旅が終わるなんて……。

「これでこの妖魔界は終わりだ!!我々が支配する!!」

悔しいけど……。

こいつの言う通り……。

私はここで……。

「ヨニコ様!!」

ユニコの声が聞こえる……。

唯一気になると言えば……。

フェアやユニコの事。

彼らはきちんと無事に帰れるのかしら……。

……ドス!!

……?

何か……音が聞こえた。

かろうじて残っている力でその方向を見ると……。
私の服を少し破って……そのままリッチを貫いている物が見える……。

やけに見慣れたような……。

これは……？

……!!

ユニコの角だわ!!

「なっ……!!」

リッチは目を見開いてユニコの角を見ている。

「ヨーコ様の生気を吸い取る事に力を使ってる今、俺の癒しの力を受けたらどうなる……？」

「し……しまった!!」

なっ……!!?

その次の瞬間。

リッチは……蒸発するように消えていった……。

「大丈夫ですか？ヨーコ様……」

フェアが来る。

ううう……。

まだ多少頭が痛い気もするけど……。

体に異常は無いみたい。

ユニコの角が当たってるので、癒しの力で治ってるというのもある。

「……どうも、ユニコに助けられたみたいね」

「いいえ。俺はヨーコ様に助けられたんです。それも命の危険を知りながら……。だからこそ俺も一か八かの賭けをさせてもらった」という事は……。

「まさか……。リッチを倒せると思って無かった……？」

そう言つと、ユニコは頷く。

まったく……。

「ヨーコ様を助けられる事は分かってましたが、まさか倒せるとは思っていなかった。それに……主に似て無謀なんですよ」

でもまあ・・・。

そのおかげで助かったんだし。

これで四天王の二人目も倒せたんだし。

とりあえず・・・。

上に登りましょう。

第5章 10話

リッチが倒れた事により、アンデット達の力は無くなっている。
あちこち死体が見えるけど、動く気配も無い。

これでいいのよね。

死んでも勝手に悪い事に使われていたんだから。

このまま・・・静かに眠るのが本来の姿。

本当はきちんと埋葬したいんだけど・・・。

あまりにも数が多すぎる。

それに・・・。

中には骸骨も見える。

それにバラバラに飛び散ってるのもある。

「ごめんなさい」

私は謝る事しか出来ない。

「ヨーコ様・・・」

私に出来る事は少ない・・・。

改めてそう思う。

どうして私なんだろう・・・。

お姉ちゃんだったら・・・。

そう思う時がある。

お姉ちゃんなら何の武器も無くても戦える。

何せ幼い頃から格闘を習っていた。

でも私は・・・。

何の戦う訓練もしてない。

巻き込まれる形で妖魔界に来てしまったけど・・・。

今はフェアとユニコの為にも、この妖魔界を救いたいと思う。

そして・・・。

欲望のために平和を乱すクロウを許す訳にはいかない。

「あっ、ヨーコ様。ようやく脱出出来ました」

本当にようやくね。

最初は通り過ぎようとしてたけど・・・。
リッチのせいで中に入るはめになったし。

さて・・・。

次の目的地があの高台ね。

「ヨーコ様。ここからあそこへ行くとなると、途中で”砂煙の街”
に着く事になるでしょう」

「”砂煙の街”・・・？」

というよりも街・・・!？」

「はい。妖魔界の中でも活気のある街なんです」

へえー・・・。

今までそういうの無かったけど・・・。

「あっ・・・でもそういう所ってお金って必要じゃないの？」

私はこの世界の貨幣なんて持ってないし。

今までの旅でもお金が出てきた事もないし。

「オカネって何です？別に何か特別な物なんていらんですけど」

へ・・・？

・・・そういう根本的な所から違っって事？

うーん・・・。

いらんないって言っんならいいんだけど。

第6章 街

そこはすぐに分かった。

とても大きな建物がいくつも見える。

砂煙の街って言ってたけど……。

今の所、砂煙がある気配は無い。

もしかして一定の時間が出るのかしら……？

私達は街へと入る。

そこには大勢の住人がいる。

いろんな……多彩な住人が。

この妖魔界にはこんなに沢山種族がいるのね。

あれ……？

ふと気づいた。

なんでここはこんなに平和なの？

ここはクロウの魔力が支配する地域。

欲望にやられた住人がいてもおかしくないのに……。

ここにはまるでその気配が無い。

おもいつきり平和な街そのもの。

これはどういう事……？

私はゆっくりと街の中心へと向かう。

本当に……いろんな姿の住人がいる事を除けば、私のいた街とそう変わらないぐらいの平和。

「あつ！ヨーコ様。見てください！！」

フェアが街の外側を指さす。

見ると……そこには砂煙が見える。

さつきは無かったのに……。

でもこれでまさしくここは”砂煙の街”になった訳ね。

やはり一定の時間でああなるのかしら……。

不思議な仕組みね。

とりあえず……。

「どこか泊まれる所ない……？いい加減疲れたわ」
思えば妖魔界に来てから、きちんと休んだ事って無いんじゃない？
そう考えると、かなり無茶な旅ね。

ユニコやフェアにもゆつくり休んでもらわないと。

「そうですね……。あそこがいいですよ」
フェアが案内する。

そこは小さな宿屋みたいな所。
結構造りは私達の世界と同じなのね。
扉を開ける。

「ごめんくださーい」

「あいよ！」

奥から出てきたのは、ヒューマノイドの姿をしているおばさんのような人だった。

人間と違うのは、結構背が低い事と……あと女性なのに髭が生えている事だった。

しかも……かなり立派な髭。

口の周りが髭だらけだもん。

それがまた似合ってるから不思議。

「あら。誰かと思ったらフェアリーじゃないかい。久しぶりだねえ」

「お久しぶり。泊まりたいんだけど部屋はありますか？」

「もちろん！いつでも歓迎だよ！」

第6章 2話

フェアが教えてくれた。

このおばさんはドワーフのジンと言う。

もちろんそうやって呼び合うのは、ごく限られた親しい間柄であって他の人達は単にドワーフのおばちゃんとか呼んでるみたい。

「聞いたよ。あんたがこの妖魔界を救いに来てんだって？」

「えっと……。何の因果かその為に呼ばれたみたい」

今までくじけたり弱音を言ったりもしたけど……。

それでも旅を止める所まではいつてない。

「あの子があんなに信頼してるのは珍しいよ。あんたは優しいんだね……」

「いえ……。だって、私のせいで巻き込まれたんだもの。みんなを大事に思うのは当たり前だわ」

そう……。

本当なら私一人で行くはずだったのに。

ゴブリンから助けたのがきっかけでここまで連れて来てしまった。

しかも……。私達に合わせて。

その気になれば飛んで逃げる事も出来る。

それをしなかったのは……。私達と旅をしたかったからかも。

「それにしたって命がけで守ったりはなかなか出来ないよ。誰だっ
て自分の命の方が大事なんだから」

「確かに……。そういうのは多いです。でも……。私のせいで危険な目に合ってるんだもの。例えば私が死ぬような事になっても……。二人を助きたいのは当然」

この気持ちは変わらない。

私一人だったら、絶対ここまで来れない。

フェアやユニコがいたからこそ……。私はここまで来れる事が出来た。

それは二人のおかげ……。
それでも！

本来は二人は危険な目に合う事なく、お城の中で安全に守られるはずだった。

それが私に関わったせいで……。

だからこそ、二人を命を賭けて守り抜かないと。

「なるほどね……。ルドルフ様が言うだけあるね。命がけで仲間を守るなんて、そんなに簡単に言える台詞じゃないんだよ」
それは……。

たぶん私の性分。

この私の性格は分かっていたからこそ、これまで冒険に出ようなんて思わなかった。

私のせいで巻き込まれたんだから、その私が責任を持つのは当然。
だからこそ、平和な私の街にいたのに。

今更愚言つても仕方ないけど。

「とにかく！今日はゆっくりと休んでおくれ！」
ふふっ。

それに異存は無いわ。

第6章 3話

次の日の朝。

これだけは聞いておきたかった事がある。

それは……。

「どうして……。ここは平和なの？」
そう。

クロウの力で混乱してもおかしくないのに……。

「ああ……。それはね。ここにはルドルフ様の右腕的存在のドラゴン様がいらっしやるからだよ」

……。え!?

ドラゴン!!

ジンの口から出たのは意外な名前だった。

その名前は私も知ってる。

巨大なトカゲのような姿をしているが、翼を持っている。

その圧倒的な力と、口から炎を吐いたりする能力のせいで魔物の中でもトップクラスの強さを誇る。

また空を飛べるので上空を取れるという強みもある。

そのせいか、ドラゴンを退治出来るほどの人はそうはいない。

良く物語なんかで、その名前は知ってたけど。

そのドラゴンがここにいる……。

しかも、ルドルフの右腕的存在って事は……。少なくとも味方って事ね。

「ねえ……。そのドラゴンって……。すぐに会えたりするの？」
ちよつと興味を覚えた。

一度は見てみたいじゃない?

「そうねえ……。あたし達はそんなに簡単に会える存在じゃないけど……。あなたなら大丈夫なんじゃない?」

「それは……。ルドルフのお客様だから……?」

「そうだよ！あのルドルフ様が呼んだお人だ」
「そうなのかなあ……。」

でも……駄目で元々。

行ってみようかな……？

「それじゃあ、その場所を教えてください！」

ドラゴンに会えるなんて、そう滅多にないし。

しかも攻撃される恐れはまず無い。

安全に会えるなんて、それこそ一生に一度あるか無いかよ。

私はフェアとユニコを起こしに行った。

第6章 4話

私とフェアとユニコはジンに教えて貰った巨大な建物へとたどり着いていた。

ここにドラゴンがいるらしい。

確かに・・・ドラゴンがいるには相応しいほどの巨大な建物。こんな大きな建物は始めて見るかもしれない。

ルドルフがいた城より大きいんじゃない？

私はその中へと入る。

今の所、誰かいるような気配は無い。

この街の人達は気軽に入ったりしないのかしら？

もっとも・・・。

私もこういう機会じゃなかったら入ろうとは思わないけど。

何せ相手はドラゴン。

緊張し過ぎてるわよ。

やがて大きな扉が見える。

その両脇には同じくらしいの巨大な石像が見える。

・・・ちよつとラカスタ・ソルジャーを思い出してしまった。

もちろんあれはラカスタの魔力が無いと動かないんだけど。

「誰だ？」

・・・！！

声が聞こえた。

ドラゴン・・・？

「すみません！私・・・ルドルフに呼ばれて妖魔界に来た葉子と言います！あの・・・一度お会いしたいと思ひまして」

私は素直に言う。

「そうか・・・。お前があのヨーコか・・・。いいだろう」

そう言う声が聞こえると、石像が動いた。

その石像が、扉を開ける。

これもドラゴンの魔力なのかしら・・・？

私達はゆっくりと中へと入る。

その中には・・・ドラゴンがいた。

始めて見るけど・・・。

凄い迫力・・・。

「よくここまでたどり着けたな。まずは誉めなくてはな」

「いえ・・・。ほとんど無我夢中で・・・運が良かったんです」

それはある。

いくつもの偶然が私をここまで連れて来たんだと。

一歩間違えてたら死んでもおかしくない。

「それにしても・・・この街はあなたの力で平和になってるんです

ね・・・」

「ルドルフ様の命令でな。城へとたどり着けない者達の為にな」

なるほど・・・。

確かにこの妖魔界は広い。

となると・・・。

「もしかして・・・こういう街がいくつかあるんですか？」

「そうだな。ここから”巨人の目”へと行く道には無いが、他にも

いくつもある」

なるほどね。

「特にここは重要だから。俺がここへと来ている」

重要・・・？

「あなたが来るからな・・・」

え・・・！？

「それじゃ・・・私のために？」

「そうだ。ルドルフ様が・・・あなたが来る為に休める所を作った

方がいいと思つてな」

へえ・・・。

気を使つてもらっちゃったわね。

第6章 5話

「そういえば……」

これも聞いておきたい事だった。

「妖魔キラーって……何なの？」

そう……。

未だに使う事に出来ない、私の武器。

その妖魔キラーが何なのか……。

それを知っておく必要はあるわ。

何せ……絶対に使う武器。

その予備知識はあった方がいいわ。

「そうか……。まだ使えないのか……」

ドラゴンは察してるみたい。

私は黙って頷く。

「この私も一度しか見た事無いが……、形は普通の剣にしか見えない。だが、それで切られると我ら妖魔界の住人は形も無く消え去ってしまうんだ」

それはまた……。

「……と、言う事は……当然あなたドラゴンやルドルフ、ましてや仲間であるフェアやユニコもそうなるって事……ね？」

「そういう事だ」

つまり……諸刃の剣って事ね。

それは……あんまり使いたくない武器ね。

「ふむ……。その表情を見ると、お前は確かに妖魔界を救う素質はあるようだな」

「……?どういう事？」

「知ってるだろう?以前妖魔キラーを持った人間が妖魔界を滅ぼそうとした事を」

そういえば……。

だからこそ、私がそんな武器を使えるなんて、未だに信じられない。妖魔界の住人を滅ぼしちゃうんだなんて……。

「だが……おまえはその武器を振り回すようでは無いな」

「当たり前じゃない。そんな危ない武器……。まず使いたくも無いわよ……。」

「でも、お前は使わざるを得ない。何故ならクロウを倒すには妖魔キラーしか無い」
うっ……。

それを言われると弱い。

クロウは倒しておきたい存在。

だけどそれには妖魔キラーしか無い。

ハッキリ言っただけ今までのような戦い方で勝てるとも思っていない。かなりの覚悟が必要ね……。

「この街の地下へ行ってみるといい」

「地下……?」

「どういう事……?」

「危険な所だが……お前には必要な場所だ」
必要な場所……?

「ドラゴン様もこう言ってる事ですし……行ってみては?」
フェアもこう言ってるし……。

必要な場所という言葉も引つかかる。

ドラゴンは今もう話す事も無いのか、目を閉じてしまった。
寝てるのかしら……?

仕方ないわね。

第6章 6話

私は地下へと降りて行った。

ここはまるで生活の気配が無い。

当然かもしれない。

ここは地上の街とは全然雰囲気が違う。

松明で一応明るさはあるけど。

なんといいのか……。

雰囲氣的に暗い感じ。

さて……。

注意しないといけないのが、ドラゴンの言っていた”危険な所”という意味。

何か敵が現れる……って事はまず無いと思いたいけど……。

他に危険の要素があるとしたなら。

それは罠。

こういうダンジョンには罠があってもおかしくない。

でも私は罠を解除出来る技術なんて無い。

つまり……。

危険な罠を承知で進むしか無い。

「いい？私が先に進むから……。ユニコは後から来て」

そう……。

必然的にこういう方法しか無い。

私が罠にかかっても、ユニコの癒しの力で治せる。

それに賭けるしか無い。

そうでなければ、このダンジョンの奥へだなんて行けるとは思っていない。

身を犠牲にしてもフェアとユニコは守る。

その基本的思想は変わってない。

だからこそ！！

私は先頭に立ち、恐れる事なく前へと進む。

はたして危険とは何があるのか……。

しばらく進むとその存在が分かった気がした。

細い通路に……いくつものロープが見える。

足下を邪魔するように張っており、その両端は左右の壁の向こう側へと消えている。

もちろん……これに触れたり切ったりしたなら、何か罠が作動する。

それぐらいは私でも分かる。

問題は……。

どんな罠があるか。

こればかりは引いてみるしかない……!!

私は前へと進む……。

「待つて！ヨーコ様！！」

フェアが叫ぶ。

「どうしたの……？」

「あそこに……レバーが見えます」

あつ……、本当。

通路の向こう側……ロープの罠の先に見える。

あれも罠なのかしら……。

「私……行つて来ます！」

「フェア！！」

止めるより先に行つてしまった。

「気をつけて！それも罠かもしれないわよ！！」

第6章 7話

フェアがゆっくりとレバーを下げる。

一体何が起こるのか……。

ゴゴゴゴ……。

何か音が聞こえる。

一体何……!?!?

周りを見渡す。

小さく揺れが起きている。

何か……。

何か近づいてるような……気が……。

それは突然見えた!!

水だわ!!

大量の水が……まるで津波のようにやって来た!!

それは私の背後から……。

つまり……ダンジョンの入り口の方から奥へ向かって。

「なっ!!」

何かする余裕も無かった。

気づいた時にはすでに水に飲まれていた。

「くっ……。フェア!! ユニコ!!」

私は二人を叫ぶ。

私はなんとかか……。浮かぶ事は出来るけど、残りの二人は……?

「私はここに!!」

フェアが飛んで来る。

良かったまずはフェアは無事ね。

流石にフェアは飛べるので、水に飲まれる事は無いみたいだけど……。

ユニコは……?

「ユニコ!!」

私は叫ぶ。

ユニコの姿が見えない。

一体何処に・・・！？

「ユニコーン！！」

水に流されながらも叫ぶ。

ユニコは泳げるのかしら・・・。

姿がまったく見えない。

もしかして・・・泳げないのかしら・・・。

なんとか探す。

だけど姿が見えない。

くっ。

流れが急過ぎて、身動きが出来ない。

なんとかユニコを探したいのに！

「ヨーコ様！！」

フェアの声が聞こえる。

突然。

空中に放り出された。

え・・・！？

水が突然切れてしまっている。

だけど水に流された勢いは止まらない。

どうなってるの！？

第6章 8話

かなりやばい!!

結構高い所まで浮き上がっていたみたい。

下がかなり遠い。

「ヨーコ様!!」

フェアが私を掴む。

だけど……。

フェアの力じゃあ私を浮かすなんて出来る訳が無い。

それどころか……下へ落下するスピードを緩める事すら出来ない。

くっ……!!

ぶつかる!!

私はなんとか背中から落ちるようにする。

「くあう!!」

うう……。

かなりの衝撃……。

血が流れる……。

「ヨーコ様……」

フェアがやって来る。

うう……。

ユニコは……?

ユニコの姿が見えない……。

治してもらわないと……これは結構危ない……。

骨も折れてるし……、体を動かす事すら出来ない。

「ヨーコ様……ヨーコ様!!」

フェアが体を揺らす。

「すいません!!私が……私のせいだ!!」

「いいのよ……。フェアがいなければ私はここまで来れなかったんだもの」

私はフェアを責める事はしなかった。
運が悪かったのよ。

そう。

それだけ。

だから別にフェアが悪い訳では無い。

ただ・・・唯一の心残りと言えば・・・。

ユニコ。

ユニコの姿が見えない。

まだあの水の中なんだろうか・・・。

フェアだけじゃなくて、ユニコも無事の姿を見たかった・・・。

ゆっくりと目が閉まる。

力が抜けていく・・・。

「ヨーコ様！！駄目！！目を閉じたら・・・！！！」

死ぬ時って・・・意外とこういう時なんだろう。

割とあっけなく。

大冒険の果てに・・・という訳では無く、あっさりと死んじゃうも

のなのね。

「ヨーコ様！！！」

第6章 9話

。。。

「……ま」

……？

「……様！」

あれ……？

なんか……声が聞こえる……。

とてもよく聞いている声。

天使や鬼の声なんかじゃない。

なんたる……。

「ヨーコ様！！」

はっ！！

その叫び声で起きあがる。

「良かった……。生きていましたあ……」

わんわん泣きながらフェアが抱きついて来る。

……あれ？

私のすぐ側にはユニコもいる。

ユニコがいる……。

「ユニコ！あなた……」

「大丈夫でしたか？遅くなつてすみません……」

「いいのよ……。ユニコが無事なら」

そう……。

私はつきり水に溺れてしまったと思っていたから。

どうやって助かったのか、そんな事はどうでもいい。

だって……。無事に生きているんですもの。

「それでも……。あと少しでも遅かったら……。ヨーコ様は……」

私は首を横に振る。

「私はいいの。例えば私が死ぬ事があつたとしても……。二人が無事

ならそれで」

私は生きているという実感よりも、ユニコが無事で良かったという
思いの方が上だった。

ゆっくりと立ち上がる。

あれ？

そこで始めて気づいた。

そこに宝箱が置いてある事に。

台座においてあり、何やら特別な雰囲気がある。

何だろ・・・あれ・・・。

私はそれにゆっくりと近づく。

二人は見守る。

宝箱を開ける。

そこには・・・。

小さな指輪があった。

まるで飾り気のない、ただの指輪。

指輪の大きさに合わせたような小さい宝石が一つのみ。

その宝石も・・・ダイヤモンドと比べるまでもなく、それほど綺麗

な輝きでは無い。

なんだろう・・・？

とりあえず・・・。

これを持って帰ろう。

第6章 10話

「それにしても・・・」

私はユニコに顔を向ける。

「よく無事だったわね」

そう。

全然姿が見えなかったもの。

てつきり溺れたのかと思ったわ。

「すみません。だいぶヨーコ様から後ろでしたが、きちんと泳いでいました」

見えない所まで離れてたのね。

でも・・・。

無事でなにより。

「あとは・・・。ヨーコ様の所に来るまでに、水の勢いが弱っていったので・・・。なんとか無事に着地出来ました」

私の時はもの凄い勢いだったのに・・・。

知らないうちに、とんでもない事が起きてたのね。

さてと・・・。

私はドラゴンの所へと戻って来た。

「おお。無事だったか？」

「一時期死にそうだったけどね」
本当。

ユニコの治療が遅かったら危なかったわ。

「それで・・・これ何なの？」

私はダンジョンで見つけた指輪を見せる。

このドラゴンが付けるには小さすぎるような気もするけど・・・。

「そうか・・・やはり触る事が出来るか・・・」

・・・？

触る事が出来る・・・？

「どういう意味・・・?」

「それはアーティファクトでな。限られた者でないと触る事も出来ないのだ」

え・・・!?

アーティファクト?

「そうだ、それはその昔・・・神が作った道具。もの凄い力が込められているが、道具に選ばれた者でないと逆に呪いがかかってしまう」

・・・なんか、とんでもない品物ね。

単なる安物の指輪にしか見えないけど・・・。

「はめてみなさい」

私は恐る恐る指にはめてみる。

・・・まるで私のために作られたかのように、ピッタリとはまった。確か指輪って・・・その人の指の太さに合わせて作らないといけな
いはず。

どういう事・・・?

それじゃ・・・本当にこれ・・・。

「それはきつと、これからの旅に役に立つだろう」

「ちよつと・・・待って!どうやって使うの?」

そう。

使い方なんてさっぱり分からない。

「残念ながら・・・俺にも分からない。何せそれは選ばれた者にしか使えない。俺がそれを使った所は見た事無いんで見当もつかない
そんな・・・。

「だが・・・お前なら必ずそれを使いこなせるはずだ。何せそれは
お前専用の道具なんだからな」
私専用の・・・。

第7章 掌

「ここが”巨人のてのひら”なのね。

緩やかな坂道を延々と登り、その高さは10メートル近くはあるだろうか。

結構高いわね。

さてと……。

さっさと次に行かないと、またとんでもない目に合いそう……。

この道のりの困難さを、今更思い知るはめになるなんて……。
でも今は”巨人のてのひら”。

ここまで来れば最終目的地も近い。

あとは”巨人の口”を見つけないと……。

「どこにあるの？」
そう。

何処にも次の目的地が見えない。

「ここからでは見えないんです。もっと先の方へと行かないと」

その先とは……。

かなり遠くに4つの谷がかるうじて見える。

……本当にてのひらの上に乗ってる見たい。

今の所、敵の姿は見えないわよね……。

なかなか油断の出来ない所だから。

私達はその先の方へと進む。

……よし。

今の所は順調。

このまま行けば今回は楽に行けそうね。

「ヨーコ様!!」

フェアが叫ぶ。

……今気づいた。

とんでもない連中に囲まれていた事を。

これは……。

「これはミミックです!!」

体は機械で出来ていて蜘蛛のように8本の脚がある。

色々大きさはまちまちだけど。

大きさは大きいのも1.5メートルぐらいにもいる。

しかも……。

1体2体なんて数えられる数じゃない。

無数にある。

「なぜ……ミミック達がここに……!? 彼らは宝箱に住んで
いるのに!!」

それは私が知りたいくらいよ。

しかも、こいつらは私達を狙ってるみたい。

第7章 2話

「・・・どうします？ヨーク様・・・」

いくらなんでも数が多すぎる。

「無理矢理突破するしか無いわ！」

いちいち相手する力も無いし。

ここは突破して逃げるに限るわ。

私はユニコの背に乗る。

「・・・！！あっ！！あれ！！」

フェアがこれから突破しようとした先を見て驚いた。

・・・私もそれを見て唾然となった。

なにせ・・・。

そこにはあまりにも巨大なミミックの姿があったからだ。

「これは・・・。ミミックは大きいので1・5メートルぐらいしかないはずです！！」

なのに・・・。

私の目の前にあるのは6〜7メートルはあろうかという巨体だった。しかも・・・。

その巨大なミミックのお腹から、またいくつものミミックが生まれ、てくるらしく、どんどん落ちて来る。

「なっ・・・。これは・・・。」

こんなのが目の前にいるなんて・・・。

「一旦・・・退却！！」

引き返すのが利口よ。

だけど！！

ミミック達は追い掛けて来る。

かなり速い！！

まずい！！

どうすればいいの・・・。

「ヨーコ様!!」

はっ!!!

それはかなり絶体絶命な状況だった。

ミミック達とは逆の方向にはこっちも機械の魔物。

四角い形の体に4つの車輪がついている。

その体にはとげやら刃物やら物騒な物がついている。

「これは・・・ジャキヤーンです!これもダンジョンの奥で出てくるようなものなの!!」

しかも・・・。

それが無数。

そう・・・こっちも無数に囲まれている。

前門のミミック後門のジャキヤーンとなってしまうた。

そして・・・。

そのジャキヤーンもこっちに向かって動き出した。

どうしよう・・・。

逃げ道がどこにも無い!!!

第7章 3話

どっちにもいけない。

前後左右敵だらけ。

突破出来るほどの隙間も無い。

びっしりと埋まっている。

「くっ……」

これまで何度なく決めた覚悟を私は感じた。

ミミックとジャキヤーンが迫って来る！！

「……？ヨーク様！」

フェアが叫ぶ。

これは……？

まるで私を無視するように、ミミック達とジャキヤーン達が戦い合う。

……どういう事？

呆然と見守る。

まるで私達なんていないかのように、争いが起きている。

私はぴくりと動く。

すると！

ミミックとジャキヤーンが私の方を向く。

え……？

まさか……。

そのまま止まる。

すると再びミミック達とジャキヤーン達が争う。

もしかして……。

こいつら……。

「ヨーク様……？」

フェアが心配してのぞき込む。

フェアは空を飛んでいるせいか、こいつらにも反応してないみたい。

つまり……。

こいつらは動く物に反応しているに過ぎないんだわ。しかも低い位置で動く物を。

さっきは私が動いていたから、それに反応して追いついてたんだわ。

だけど今は微動だにしていない。

このままずっと止まっていれば……。

「……！！ヨーコ様！！巨大なミミックが！！」
あっ……！！

そうだわ。

これがあつたんだわ。

どうしよう……。

どんだん迫ってくる。

当然……。

この巨大なミミックも動きに反応しているんだろう。だけど……。

このままジャキーン達に攻撃したとしても……。
巻き添えを食らう可能性が高い。

なにせ……。

まっすぐこっちに向かって来ている。

これはかなりまずい。

かと言って今動いてもやられるし……。

第7章 4話

来る……。

来る!!

どうしよう……。

とりあえず……ギリギリまでは待とう。

ユニコもじっと待っている。

どうやら私の考えてる事を察してるみたい。

ユニコなら私と一緒に死ぬぐらいの覚悟はしてるかもしれないけど……。

巨大なミミックの脚が振り上げられる。

来る……!!

「……!!」

目を閉じる!

おそらく……かなり近くなのは間違いない!!

何か……光った気がするけど……なんだろう。

……

……あれ?

目を開ける。

ミミック達とジャキヤーン達の動きが止まっている。

よく見ると……。

さび付いている。

……え?

どういう事?

まるで……数百年間も放置していたかのような感じ。

「ヨーコ様。これは一体……?」

私だって分からない。

さっきまで動き回っていたのに。

「……あっ!」

心当たりが一つだけあった。
そう。

あの街で見つけた指輪。
ドラゴンがアーティファクトだと言っていた、私専用の魔法の道具。
この効果だと考えれば……。
説明はつく。

アーティファクトの力はもの凄い能力があるってドラゴンも言っていたし。

何せ神様が作ったと言われるぐらいの物。

つまり……。

ミミック達とジャキヤーン達をいっきにさび付かせたのは、この指輪の力なんだわ。

「この指輪……凄い……」

「それじゃあ……、やはりそれはアーティファクト……」

そう考えるしかない。

だって……今までにだって何度も生命の危機はあったけど……。

こんな事一度たりとも無かった。

つまりフェアやユニコの力じゃない。

そうなる……。

この指輪の力を考えるのが当然。

なんにしても……。

「助かったわ……」

第7章 5話

さて……。

なんとか危機も乗り越えたし……。

先へと進みましょう。

「ぷはー！よう寝たわ」

え？

何？今の声……。

辺りを見渡す。

生き物の気配は無いみたいだけど……。

「なんや、騒がしかったが……」

え！？

鉄の固まりが動いてる！？

また新たな敵！？

「フェア！これは……？」

「私も知らないです……。初めて見ます」

なんですって？

「お？あんたらなんや。こんな所に……。この辺りはわいのような機械の生き物が住む地域やのに、珍しい事もあるもんやな」

……。

どうも……襲いかかる様子では無いみたい。

「えつと……。実は”巨人の目”に行く為にここを通ってるだけなんですけど……。」

「あそこへ……？」

「そうよ。だって……。この妖魔界を救いたいんだから」

それにしても……。

この人……。人って言うていいのか疑問だけど……。
いわゆる、ロボットのような形をしている。

つまり、人間の形。

ただ、大きさが異様に小さい。

私の腰ぐらいの大きさしか無い。

・・・あと、どうでもいいけど、なんで大阪弁なのかしら。

実は個人的に凄く気に入る。

「ほー。どうや？わいをボディーガードとして連れてくれへんか？」

「え！？正気？危険な旅だからそのまま寝ていた方がいいわよ」

一体何を言い出すの。

「正気や。わいはその昔、戦闘用として作られたんや。すっかり機能を停止していたんやけど、なんや久しぶりに機動したんで、戦いたいんや！！」

戦闘用ロボットねえ・・・

第7章 6話

また変わった仲間が増えたわね。

そうね……。

仲間になるといつのなら、やはり名前が必要ね。

聞いたらMGP-101721という型式ナンバーが出て来た。

いくらなんでも、毎回そんな長いのを言えない。

……と言うより、よく覚えたわね私……。

やっぱりここは……。

「名前は”ロボ”よね。定番だけど」

「ロボかい。まあ、わいはなんでもええんやけども」

うーん……。

いい名前だと思うんだけど。

「そういえば、昔はって言ってたけど……。もしかして……。昔いた妖魔キラーを持った人と戦った事あるの？」

昔の戦闘用と言う事はありえる話。

「そつやな……。あれは最悪やった。わいの得意の”核融合”が無ければ全滅してたかもしれへんわ」

え……。！？

「か……。核融合!？」

な……。なんで……。そんな私の世界の……。それも危険な物が!?

「ああ……。一応耐えられる構造やったから助かったんやけども・

……。おかげで妖魔界に大きな穴は開くし、わいも機能を停止してしまったんや」

穴って……。

アンデット達と戦った、あの大きな穴の事かしら。

あれは大きな穴だったし、不自然なほど深かったし。

「しかし……。ヨーコ様もその妖魔キラーを持つって知ったら……。どう思うでしょうか？」

フェアが小声で聞く。

確かに……。

その昔、妖魔界を救う為に妖魔キラーを持つ者と戦ったロボからすれば、私は天敵かもしれない。

……こうなると、私がまだ武器を使えない事が利点になるわね。

「……とにかく、私と一緒にその”核融合”とやらは危険だから止めてね」

はたして私の世界と同じ核かどうかは分からない。

何せ常識が通用しない世界。

ただ、あの大きな穴を作ったというのなら。

……とてもじゃないけど、見たくないわ。

「心配せんでも、わいは他にも武器は沢山持つてるし、二度と機能を停止したくないわい」

そう言うと、腕の部分から刃物が出て来る。

それはそれで危険だけど、助かるわ。

第7章 7話

私は新たな仲間、ロボと共に進む。
とりあえずは一定の距離は離れている。

前を歩いて敵がないか調べてるみたい。

確かにクロウの魔力によって理性を失ってるから、どこから敵が来るか分からないしね。

こうしてくれるとありがたいわ。

「あつ！ヨーコ様！！」

フェアが指さす。

どうやら・・・何か表れたみたいね。

またもや敵みたいね。

見えて来たのは・・・。

巨大なローラーの上に石造りの箱みたいのが乗っている。

それが自動的に動いている。

「あれは・・・ジャガーノートです！！敵に回すとかなりやっかいな相手なのに・・・」

またもや機械系のモンスターね。

え・・・！？

来る！！

もの凄いスピードで近づいて来る！！

「あれは魔法で動いているんです！！おそらく・・・クロウの魔力かと・・・」

クロウの魔力はそんな事まで出来るのね。

私はとりあえずユニコに飛び乗る。

あれは・・・私の動きじゃ避けきれないわ。

かなり速いスピードで迫ってくる。

「ロボ！！危ないわよ！！」
そう。

ロボはまるで動こうともしない。

彼がどんな実力なのか知らないけれど……。
いくらなんでもあれは速すぎるわ。

「心配あらへん」

え……？

自信満々に言っている。

一体……どういう事？

「はっ！！」

ロボは右手を剣に変形させる。

そして……そのまま振り払った。

そして……。

ジャガーノートは真つ二つになっていた。

一撃で……！？

私はユニコから降りる。

この人……強い！！

これが自信の証拠なのね。

第7章 8話

本当に戦闘用なのね。

動きが全然違う……。

「ふうー。やっぱり久しぶりに動くとかやうな」

その昔、妖魔キラーを持った人と戦ったほど……。

右腕が元に戻る。

「ん？」

その時、ロボが違和感を感じたみたい。

「どうしたの？」

「あかん！久しぶりやったから……。上手く戻らへん！」

あらら……。

確かに……。

何か……複雑にからみついている感じ。

機械系はサツパリだけ……。

「いや。これでは剣は使えへんわ」

「えつと……。それってどれくらい困る事なの？」

確かに、いきなり武器が使えないのは困るけど……。

彼は戦闘なんだから、他にも武器はありそう。

「何言うてんねん！これがわいの武器やないか。あとは”核融合”」

……

「だから！それは止めなさい！！」

まいったわね……。

「他にも装備は確かにあるけど……、そのほとんどが右腕に集約されてるんや。他の装備はたいした事あらへん……。これで戦闘力は大幅に減ってしまった……」

えつと……。

それってもしかして……。

これまで通り、苦労しながら戦わなくてはいけないって事……？

せつかく強い戦力が加わったと思ったのに……。

「はあ〜」

思いつきりため息が出る。

やはり、そうそう上手い話がある訳が無いって事ね。

「どうします？ ヨーコ様。彼はこれからの旅を続けるのは危険だと思いますが……」

確かにフェアの言う通り。

大幅な戦力減になってしまった今。

彼はこのまま旅を続けるのは、かなり無理かもしれない。

「ロボ……。これからどうするの？」

それでも、私は聞く。

だって……。

この中で一番力の無いのは私だから。

「こうなって申し訳あらへんけど……。でもわいは戦闘用や！ 戦いたいんや！」

なら……。断る理由は無いわね。

第7章 9話

ようやく巨人のてのひらの先端が見えてきた。
あそこへ行けば次の目的地が見える。

やっと・・・先が見えて来た。

それにしても・・・。

また大変な仲間が増えたわね。

その昔妖魔キラーを持った人と戦い、その決着を付けた戦闘用ロボ
ット。

しかし、今はその戦力は大幅に減っている。

それも仕方ないとも思っている。

何せ久しぶりに機動したんだもんね。

前に戦ったのはだいぶ昔。

今でも現役に動いている方が凄いくらい。

だから、戦力が落ちたからと言って見放す事はしない。

正直言うと、それでも私よりは強い。

だって・・・。

私はまだ武器を使えないでいる。

唯一の私の武器・・・。

それでも私は、それでいいとも思っている。

何せ・・・。

その唯一の武器はとても危険な武器でもある。

敵を倒すだけならまだしも・・・。

その効力は味方のフェアやユニコにも及ぶ。

それなら使えなくてもいいとも思っている。

私は私なりの方法で、ユニコやフェアを守ればいい。

これまでも色んな事があったけど・・・。

とりあえず、なんとかなってる。

それならば・・・。

これからもなんとかする方がいいわ。
でも……。

私はまだ真の意味での強い覚悟……強い意志は無いかもしれない。
妖魔界を救いたいという気持ちはあるけど……。

とにかくフエアとユニコを助けたいだけ。

後は……出会った人達のため。

まだまだ……強い意志という意味では無いかもしれない。

それで……。

本当に妖魔界を救えるのかな……

第7章 10話

やっと巨人のてのひらの先へとたどり着いた。
そこに立つと……。

湖が見える。

あれは……？

「ヨーコ様。あれが”巨人の口”です」

あれが……。

「……？何やって？」

ロボが聞いて来る。

「あれが次の目標の”巨人の口”なのよ」

「そういや……。わいがいた時とはだいぶ地形が変わってるんやな」

まあ……。だいぶ年数が過ぎてると思うしね。

「わいも”巨人の目”ぐらいは知ってはおるが……。正直、実際に”巨人の目”を見た事は無いんや」

え……？

「見た事が……無い？」

「ああ……。あれはアーティファクトと言われておって、凄い力ちゅーのは分かってるんやけど……。それが逆に怖いんや」

怖い……？

「ほら、わいは戦闘用ロボットやろ？魔法的な力とは相反するんやへえー……。」

この妖魔界はほとんどが魔法的な事の方が多いとは思っただけど……。

このロボの意識はちょっと違うのかしら。

だいたい……。

フェアの存在自体、魔法的だと思うんだけど。

うん……。

「それに・・・あれは真実を映しすぎるとも言われておる」
映しすぎる・・・？」

「どういう・・・事？」

「わいも聞いた話なんやけどな・・・。知りたい事以上に教えてくれる・・・って」

知りたい事以上に・・・。

「ヨーコ様・・・」

フェアが心配してくる。

何か・・・不安になってるみたいね。

「大丈夫よ。私はクロウの居場所を知る為にあそこに行くんだもの。それ以上って何があるのよ」

そう。

私の親が実は妖魔界出身とか・・・。

そんなとんでもない事実が出てくるとか・・・？
ありえないわ。

第8章 口

うわー……。

近くで見るとまた大きな湖ね。

向こう岸がまったく見えな。

「あの……。これ渡らないと……。駄目？」

私は念のために聞いて見る。

「渡らないと無理です。両端から歩いて行こうとしても、やがて急な崖があるので……。私やヨーコ様達はともかくユニコは無理です」

そうになると……。端を歩いて行くなって提案は無理ね。

「歩くのが無理なら……。泳ぐって行っても距離がありすぎるわね」
向こう岸が見えるならまだしも……。

水平線が見えるくらい遠くにあるってのは諦めた方が早い。

「泳ぐのも止めた方がいいです。この湖にも色々住んでると思いま
すから」

うっ……。

それは……。泳いでる間にやられる可能性大ね。

そうになると……。

「イカダを作るしか無いわね」

フェアやユニコが船を作れるとは思えないし……。

第一私達が全員乗れるほどとなると二人とも無理。

「ロボは船って作れる？」

「いや……。戦闘技術はたっぷりあるんやけど……。そういうのは無理やな」

船を作るってなると、それこそ大工ぐらい技術を学ばないと無理なものね。

そこまで期待はしてなかったけど。

「それじゃあ、丸太をいくつか持って来ないと」

そこではつと気づいた。

確かに・・・いくつか木々は立っているけど。

そう都合よく丸太って・・・あるのかしら・・・。

しかも、全員が乗れるような大きさなんて。

「そういう事なら任せんかい」

ロボがそう言う。

・・・？

どういう事かしら？

見てると大きな木に近づいて行く。

どうするつもり？

「いくで〜！」

なっ・・・！！

左腕から、ノコギリみたいのを出して来た。

あんなのまであるなんて・・・。

「これは戦闘に使うにはちょっと大変やけど・・・」

確かに・・・。

でも・・・。

彼がいてくれて助かったわ。

あとはツタを使って角材を縛って・・・。

これで完成！

第8章 2話

ロボも手伝ってくれたおかげで、イカダはあつと言つ間に出来上がった。

オールも作つたし・・・。

いよいよ湖を横断する時が来た。

イカダを湖に浮かべて・・・。

私達はそれに乗る。

さすがに・・・全員が乗つても余裕ね。

これもロボのおかげだわ。

いなかったらどうやって渡るか、かなり悩んでいた所よ。なにせ、目の前の池はかなり大きいし。

私とロボが共同でイカダを進める。

ユニコはイカダの中央で座っている。

ユニコをイカダを進めさせる事は出来ないし。

フェアは空中に浮いて辺りを見渡している。

もしこんな所を襲われたら・・・。

身動き出来る範囲は限られている。

しかも・・・。

このイカダそのものが壊されたら終わりだわ。かなり危険な事なのは分かっている。

でも・・・。

これ以外に方法が無い。

こればかりはロボでも、どうしようも無いしね。

私達はゆっくりと進む。

湖はかなり静かね。

順調に行くかしら・・・。

・・・ん？

何か・・・。

オールが引つかかっている感じのような……。

「きゃ!!!」

一気に引きずられた!!!

私はそのまま湖の中に引き込まれる。

慌ててオールを離す。

……なっ!!!

私は湖の中でその姿を見た。

巨大なタコの姿。

それが……目の前に……。

上がらなきゃ!!!

必死に泳ぐ。

……きゃ!!!

足が……取られた!!!

まずい……!!!

そのまま……タコに引きずられて行く。

まずい……まずいわよ!!!

第8章 3話

くっ……。

身動きが全く取れない。

そのまま……引きずられていく。

タコの口が開いている。

そのまま……食べようとしているみたい。

まずい……。

なんとかしないと。

しかし、足が絡まっていて脱出出来ない。

水の中だから、思うように動けないってのもあるけど。

バシユ！

……？

何か……音がした。

あれ？

そこには……ロボがいた！

例のノコギリで必死になって、タコの足を切っている。

そのまま見ていたいけど。

あいにくと、私の息も限界に近づいている。

ごめんなさい。

ロボを置いて、私は泳ぐ。

私はそのまま水上へと上がる。

「……ぶはっ！」

やっと息が出来た……。

しばらく待つ。

ロボは……？

あれ？

まさか……。

まだ攻撃してるの!？

「ヨーコ様！無事でしたか？」
フェアがやって来る。

「でもロボが！！」
そう。。。。

いくらなんでも水の中じゃ動きが取りづらい。

「もう一度潜って見る！」

私は息を大きく吸って、自ら潜る。

ロボがタコと戦ってる！！

いくつも足が襲いかかっている！！

だけど。。。。

それには動じず、一生懸命足にノコギリを入れている。

いくらなんでも無茶過ぎるわ。

私になんとかしてあげたいけど。

でも武器が無い。

しかも今回は水中。

今までのようにはいかない。

ついにタコの足がロボの体に巻き付く！！

危ない！！

助けたい！

だけど。。。。

「へへ。。。。ここが水の中ちゅーのがあなたの運のツキや」

そう言う。。。。

目から電撃が放たれた！！

ええ！？

あんなのまであるの！？

しかもその電撃は。

こっちに感電する事も無かった。

見た目は電撃っぽかったけど。

レーザーか何かなのかしら？

第8章 4話

私達はなんとかイカダに戻って来た。

ふう……。

ただ……。

ここで問題が発生。

オールが1本無くなっていったのだった。

たぶん……あの大ダコに壊されたんだと思う。

まだ湖の半分も過ぎてないっていうのに……。

前途多難ね……。

どうしよう。

あれ……？

ロボが上がって来ない……？

あっ！まさか……。

私はまた再び潜る！！

やっぱり。

ロボはさっきの位置からさらに下へと沈んでいる。

くっ……。

間に合わせてみせる！！

「！？何してんねん！わいは上がる事はできへん。さっさと先に進むんや。右腕の使えないわいなんで、無用の物なんやから！！」

そんな事無い！！

絶対……助けて見せる！！

さらに私は下へと泳ぐ

よし！

追いついた！！

だけど……。

ここから上がる方が困難かも……。
だけど！！

左腕でロボを抱えながら、必死に上がる!!
くっ……。

さすがに……浮力が無いときついわね……。
「もうええねん。そのうち呼吸が無くなるで!？」

嫌よ!

ここで見捨てるぐらいなら……。

私は……一緒に沈み道を選ぶ!!
だから。

私はロボを助ける。

仲間を見捨てるなんて事は絶対にしたくない!

さすがに……。

苦しくなって来た……。

でも……。

水面まであと少し!!

……。

「ぶはっ!!」

ふう……。

なんとか……助け出したわ……。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

間一髪って所かしら。

でも……。

助かって良かった。

第8章 5話

やっと湖の半分ぐらいまで進んだかな……。

向こう側がなんとか見える。

ロボがゆつくりとイカダを進める。

本当は思いつきり進めてもいいらしいけど……。

でも私とはかくフェアやユニコの事を考えると……。

あまり無茶は出来ない。

「なあ……。聞いてええか？」

ロボが口を開く。

「なあに？」

「さつき……。なんでわいを助けたんや？見捨てても仕方ない状況やったのに……。」

その答えなら、もう分かり切っている。

「仲間を見捨てるぐらいなら、死んだ方がマシだわ」

キツパリと言った。

「なんでや！？死んだらそれで終わりやで！！」

「ロボ……。ロボには分からないと思いますけど……。これがヨーコ様なんです。だから……。私たちも一緒に旅も出来るんです」

フェアが私の代わりに答える。

「確かに……。俺が敵の罠にかかった時も、命がけで助けてくれたし。だからこそ俺達もヨーコ様の力になりたい」

ユニコ……。

「ありがとう……。二人とも」

私は改めて感謝をした。

正直、この二人がいなかったら私はここまで来れなかったから。

こうしてみると……。

お姉ちゃんが旅行に行くって時に、一緒に行かなくて正解だったかも……。

本当は一緒に行くのが嫌だった。

それはこの性分のせい。

どうにも、子供の頃から困ってる人をほっとけない……。

そのせいで色々と困難な目に合ってるんだけど。

だから行きたく無かった。

もしお姉ちゃんと一緒に行けば、とんでもない事になると思っていたから。

この妖魔界に来てその事を十分思い知ってるけど……。

でも今は来た事を後悔はしてないわ。

フェアやユニコという大切な仲間にも会えたし。

そして、ロボという仲間にも会えた。

それが唯一の救いかもしれない。

第8章 6話

・・・こうして見てみると。

私も成長してるのかもしれない。

それは・・・今は冒険をしている事を後悔してない事。

以前の私だったら、冒険そのものが嫌だったのに。

今はフェアとユニコとロボの三人で、何処までも冒険したいと思っている。

この三人のために・・・。

「・・・！！ヨーコ様！！」

え・・・？

突然、フェアの叫び声で思考を中断させる。

水中から、何かが浮かび上がって来た！

「な・・・何！？」

水上に上がって来たのは・・・。

ドラゴンだった！！

そ・・・そんな・・・。

「シー・ドラゴン！！」

フェアが叫ぶ。

ドラゴンって・・・。

また強そう。

しかも・・・。

目つきからして、敵対的。

・・・はつきり言ってドラゴンなんて相手に出来るほどの強さじゃないのよ・・・こっちは。

まずい！！

逃げようにも、こっちはイカダに乗ってて逃げれないし・・・。
戦うにも分が悪すぎる・・・。

「どっしりよっ・・・！！？」

こんな所じゃ選択肢が無さ過ぎる……!!

「わいに任せてや」

え……?

ロボの目つきが……。

全然違う。

どういふ事……?

「わいは戦闘用や。ドラゴンなんて目やないで……!」

そいうと……。

右手が変形した。

そして剣の形になる。

「え……!?!」

確か……。

右手は使えないはずじゃ……?

「はあ……!」

ロボはドラゴンへと斬りかかる。

あっという間にドラゴンは倒れたけど……。

なんで……?

第8章 7話

ようやく向こう岸へとたどり着いた。

さすがにロボがいてくれたおかげで、かなり助かったわ。

そして……。

次の目標でもある”巨人の鼻”が見える。

高い山。

まるで鼻のように、一つぽっこりとある。

さて……。

行かなくちゃ。

「待て」

それを制したのはロボだった。

「……何？」

何かあったのかしら……。

「なんで……右腕が使える事に何も言わないんや……？」

確かに疑問には思うけど。

「別に。私たちは仲間でしょ？」

そう。

何か理由があつての事なんでしょう。

それを無理に聞く事はしない。

「待て。どうしても……これだけは言わんとあかんのや」

ロボ……。

「実は……。あんたが妖魔キラーの持ち主やって事は、最初に会った頃から知つとつた」

え！？

あの頃から……！！

なら……なんで……！？

「わいと戦った奴はな……。それはそれは極悪な奴で……。妖魔キラーで妖魔界の奴らを消すのを何とも思つて無い奴やった。わ

いは正確には妖魔界の住人やない。また違う異世界から呼ばれたんや。そいつと戦うために」

まさか……。

ロボも……異世界から来たなんて。

「せやから、わいには妖魔キラーは通じなかった。それでもそいつは十分強かった。だから”核融合”を使ってしまったんや。わいの……最後の奥の手を」

なるほど……。

「でも……次に出会った奴は……なんと側に妖魔界の住人がおった。しかも、信頼しきつて……。それどころかこの妖魔界を救うって言うてるやないか。でも、わいはすぐには信じる事が出来へんかった」

それは……そうかもしれない。

その……前の人の悪行が酷いのなら。

「せやから……わいはあんたを試したんや。あんたは何処まで真剣にこの世界を救おうとしてるのか。何処まで仲間の為に頑張るのか……。今から言うけど……”巨人の口”で落ちたのはわざとや。浮かぶ事も簡単に出来た」

ロボ……。

「でも……あんたは本気なんやな……。本気で仲間を救おうとした」

「当たり前じゃない。私は……みんながいなかったらここまで来れなかったもの」

「あんたなら……あんたなら、妖魔キラーを持ってもええと思う。妖魔キラーを持つ者を倒す宿命を持ったわいが言うのも変やけどな」
ううん……。

「全然変じゃないわよ、ロボ」

第8章 8話

・・・え？

何やら・・・湖の方から聞こえて来るような・・・。

「な・・・何!？」

湖の中から・・・。

ワニの頭をしたヒューマノイドが表れた。

・・・なっ・・・何なの!？」

「挟み撃ちにしようとしていたのにな・・・。ここで待っていたのはそっちの作戦か？」

え・・・？

どういう事・・・？

「なあに。さつき沈んだ時に何かが見えたんで、サーチしてたんや」

え・・・？え？え？え？???

「俺は四天王の一人、ワニゲーター。最後の四天王と二人で襲う予定だったのに・・・。あまりにも移動しないのでクロウ様から命令が下ってしまっただわ・・・。」

ちよつと待って・・・。

「それじゃあ・・・突然真実を言い出したのは・・・。」

「ああ・・・。あれは本気や。本当のわいの気持ち。言っておかないとこれから先、あんた達の仲間やなんて言えへんしな。しかし・・・痺れを切らしたのは、正直こっちの予想外やった。」

・・・なんて人・・・。

分かっていたなんて・・・。

でも・・・。

今の台詞通り、確かに予想外かも・・・。

「さあて！まずはヨークはんを騙した罪滅ぼしに、あんたを退治といきますか」

「ちょっと待って！いくらロボが戦闘用だからと言っても、四天王といきなり戦うなんて・・・」

「ここは私達と協力して・・・」

「ヨーコはん達はそこで見ておくんや。なあに、わいは間違っても負けるなんて事はあらへんで？」

「きさま・・・。たいした余裕だな」

うっ・・・。

確かに・・・。

もの凄い余裕・・・。

そりゃあ、ロボが強いのは認めるけど・・・。

四天王もかなり強い・・・。

これまでも、最初のラカスタは強力な剣のおかげ。

二人目のリッチも、弱点であるユニコの聖なる力のおかげだった。

つまり・・・。

弱点を付いてなんとか・・・。

それなのに・・・。

大丈夫なの？

第8章 9話

湖から出てきたワニゲーター。

ロボのおかげで挟み撃ちにならずに済んだけど……。

「この俺を引きずり出した事を後悔させてやる！」

くっ……。

一体何を……。

「くっえ!!！」

手を上げる。

え……？

何？

湖の水が……盛り上がってる!？

そして……。

まるでツタのように細く長い水がこっちに襲いかかって来る!!

そんな……。

「きゃ!!！」

なんとか……避けた。

けど……。

凄い威力……。

地面がえぐられている。

もし直撃を受けた事を考えると、ぞっとするぐらい。

なんとか避けれたけど。

それはロボのおかげ。

つまり、私を狙っていないから。

ロボに感謝をしなきゃ……。

はっ……!!

そのロボは!？

「え……？」

なんと。

いくつものえぐられた後があるけど、動いた形跡が見えない。

ワニゲーターが出てきた時から、ほとんど動いて無いんじゃない!?
それか、動いてはいるんだけど見えていないだけ!?

「責様……!!」

当然、ワニゲーターは口ボをにらんでいる。

「こんな程度かいな？」

「おのれ……!!」

すると……。

無数の水が襲いかかってくる!!

あれは……避けきれないわよ?

どうするの……?

「無駄や!!」

手から何か電気がほとばしる!!

「てえい!!」

そのまま地面にたたきつける!

すると!!

地面から土が吹き上がる!!

なっ……。

あんな方法で防御するなんて……。

正直、次元の違う戦いが行われている。

なるほど。

以前の妖魔キラーを持った人と戦った事があるというのも分かる。
これだけの力があつたなんて。

第8章 10話

四天王の一人と対峙しているロボ。

私もこれまで四天王の二人と戦ってるからその強さは分かっている。このワニゲーターもロボがいないと、どう戦っていいのか分かんないくらい……。

でも……。

ロボは極めて涼しい顔で立っている。

たぶん……実力で勝ってしまうと思う。

それくらい……ロボは強いと思う。

「こいつ……!!」

ワニゲーターがさらに力を込める。

すると……!!

湖の水が大きな津波となつて襲いかかつて来る!!

なっ……!!

これはいくらなんでも……。

「もういつちよいくで!!……『土の壁』!!」

え……!?

今度はさらに強い力でたたきつける!!

もの凄く高い壁が出来上がった!!!!

ぶつかり合う!!

「す……凄い!!」

なんか……レベルの違う戦いを見せられてる感じ。

思わず呆然とする。

それはフェアとユニコも同じで、啞然とした表情で見ている。ハッキリ言つて、私じゃあどうしようもないレベルだわ。

「こいつ!!」

ワニゲーターが三つ叉の槍を取り出す。

「はっ!!」

また凄いスピード!!
だけど!

ロボはほんの少し体を動かしただけでそれを避けた。
思わず目が点になる。

なんで・・・あのスピードをあんな動きで避けられるの？

「さて、そろそろ・・・」

攻撃する!!

・・・えっ!?

気がついた時には、すでに剣が抜かれていた。

出した瞬間が見えなかったわよ・・・。

「しまいや」

そうロボが言うと・・・。

ワニゲーターの体は真っ二つになっていた。

凄い・・・。

第9章 鼻

次の目標はここ、巨人の鼻。

まるで人の鼻のように高くそびえる山が一つ。

ここを登れば……。

いよいよ最終目的地である巨人の目が見える。

長く苦しい旅だったけど……。

ようやく最後が見えて来た。

だけど……。

ここに来てかなりの困難を目の当たりにしていた。

それは……。

この山は……。

雪山だつて事。

まだふもとはいいいけど……。

頂上辺りは思いっきり白い雪が見える。

この山はどうも人間界の影響があるらしく。

年中雪で覆われているという。

これまで極端に暑くなったり寒かったりという事は無かったから良

かったのに……。

この服装で雪山を登れっていうのもかなり無謀なんだけど……。

「ためらってるのか？」

口ボが聞く

「……そりゃあためらうわよ。頂上がいっきりに白いじゃない……

……かなり寒いのは確実よ」

喜々として登るっては無理だわ。

「かと言って、登らないという訳にもいかんやろ。ここに来て引き

返す訳にもいかへんし」

それは言われなくても分かってる。

この妖魔界を救う為にここまで困難な道を来たのだから。

・・・でも正直あれはためらうわよ・・・。
何せこっちは何の防寒着も無い。

強い敵が待ってるというなら、まだ覚悟は出来るんだけど。
暑さ寒さというのはね・・・。

しかもさっき湖の中に飛び込んで、それほど時間は経っていない。
つまり、服は濡れたまま。

このまま登れば、風邪を引くのは間違いなさそう。
仕方ない。

「行くわよ！さっさとこんな山越しましょう」
覚悟を決めるしか無いわ。

第9章 2話

私達はなんとか山を登る。

ハッキリ言えばかなり気が進まない。

何せなんの装備も無しに雪山に登れという方が無茶な話。

だけど……。

そんな事を言ったら、この妖魔界に来てから今まででもかなり無茶な事はしていたけど……。

はぁ……。

仕方ない……。

私はゆっくりと登る。

この山は結構傾斜が厳しいので、あまり早くは登れない。

しかもこつちにはユニコがいるので、一直線に登るといっのは無理。斜め上に登る感じで登るしか無い。

ここは……かなりきついわね……。

それに……。

だんだん寒くなって来たわ。

雪の降ってる範囲に近づいて来たのね。

……え？

突然突風が吹き荒れる！

「きゃー！！」

フェアが私の体にぶつかる。

慌てて手で受け止める。

何……？

辺りを見渡す。

「……なっ！！」

それは突然だった。

一気に辺りが雪で覆われる。

何……！！？

吹雪が吹き荒れる!!

「寒っ! ってか・・・何で急に?」
そう。

さっきまで全然その気配も無かったのに・・・。

「おそらく雪山地帯に入ったんですよ」

フェアがそういうけど・・・。

まさか・・・。

「これはまた・・・」

ロボも驚いている。

そりゃあそうよね。

ここでは私達の常識がまるで通用しない。

おそらく・・・。

これもここでは常識なんだわ。

まるで線を引いてるかのように、突然吹雪が吹き荒れる地帯になる。

さっきまで地面が見えていたのに、一歩入っただけで辺りが雪で覆われている。

これが妖魔界なのよね・・・。

第9章 3話

かなり寒い……。
そりゃあそつよね。

周りは雪に覆われて……、もの凄い吹雪が吹き荒れている。
そのうえこつちは普段着のまま。

寒くないって言うのは無理に決まってる感じ。
体が自然と震える。

凍え死にしそつなほど。

でも、こんな所で死ぬ訳にはいかない。
なんとか、頑張らなきゃ。

しかし、なかなか先に進めない。

うう……。

まずい……。

足が動かなくなつて来た……。

「大丈夫ですか？ヨーコ様……」

うう……。

大丈夫とは言えない。

いつもは言えるんだけど……。

さすがに……寒すぎる……。

私だって、我慢出来る事と出来ない事もあるのよ。

「ん？なんや？洞窟があるで？」

……え？

どうも口ボが見つけたみたい。

「とりあえず……入ってみましょう」

このまま外を歩くのは無理だわ……。

うん。

そうしよう。

なんとか洞窟の中に入る。

「ここは・・・」

かなり奥が深い。

先が見えない・・・。

このまま入っても大丈夫なのかしら・・・。

不安げに見守るのはフェアもユニコも同じ。

だけど・・・。

このまま外に戻るってのは無理だし・・・。

この中がどうなってるのか知らないけど、ここを進む方がマシかもしれない。

私は意を決して中を進む。

当然・・・中へ進めば進むほど暗くなってくる。

どうしよう・・・。

「わいに任せんかい」

えっ・・・？

ロボの目が光る！

・・・本当・・・便利だね。

これで先も見えるわ。

第9章 4話

奥へと進む。

そこには……。

また驚く光景があつた。

巨大な空洞が見え……。

そこは赤く光つてるような感じ。

その中に入って見るとその正体が分かつた。

マグマだ。

巨大な穴があり、その中にマグマが流れてるのが見える。

うわ……。

さっきまで凍えるほど寒かつたのに……。

ここは汗が止まらないほど暑い……。

そりゃあそうよね。

こんな身近にマグマがあるんだもの。

……気温差どれぐらいなのかしら……。

でも……。

寒いぐらいならまだここの方がマシだわ。

私達は穴を迂回してさらに先に進む。

「あれ……？」

私はさらに先にある物で驚いた。

そこには……。

いくつもの家や建物が見える。

ここに……誰か住んでいるの？

小さな街がそこにはある。

「こりゃ凄いな……。洞窟に街を作ってるなんて……。」

ロボも驚く。

そりゃあそうよね。

でもある意味安全かも……。

何せ外はあの吹雪。

進んでここに来るなんて、相当の覚悟が無いと無理なもの。

一体誰がここにいいのかしら……。

私はゆっくりと進む。

すると……。

そこに住んでる人達が私達に気づく。

こつちを見ている。

あれは……？

なんか……人間みたいだけど……。

あれもヒューマノイドの一種なのね。

「あれ……？あれって……エルフですよね？」

フェアが言う。

「エルフ……？」

「そうですよ。あれはエルフ。この妖魔界の中でも魔法の力が強い人達です」

へえー……。

第9章 5話

「ここは何処なの？」

私はその辺りにいるエルフに声をかける。

「ここはノースの街です」

・・・。

鼻は確かにNoseって言うけど・・・。
まさかね・・・。

どうやらここは昔からある街のようね。

歴史が感じられる雰囲気だわ。

「ところで・・・ここって泊まる所ってあるのかしら？」

「ええ。あそこの辺りはそうですが」

ここには他の旅人も来るのかしら。

泊まる所が密集してるなんて、ある意味便利だわ。

私はみんなの所へ一旦戻る。

「休める所が分かったから、そこへ行きましょう」

いい加減、この服も綺麗に洗濯したい所だし。

ここで休める所があるのは嬉しい事だわ。

私達は宿泊施設のある所へと入って行く。

そこの一室へ・・・。

「わぁ・・・。綺麗な部屋」

結構豪華な宿屋って感じね。

こういう時、お金がいらないって便利ね。

それにしても、どういう基準で泊める部屋を決めてるのかしら。

それとも、ここはみんなこんな感じ？

私達の世界でも、なかなかこれぐらいの所には泊まれないわよ。

「さて・・・わいはここでしばらく休ませてもらうんで
え？」

「ほら。ワニゲーターで久しぶりに力を使い切ったんや。いくら戦

闘用でも休憩は必要やで」

あっ……。

そういえばそうね。

まだ旅は続くんだし。

なにより……まだ四天王は一人残ってる。

クロウは私が戦う運命だから、そこはロボには遠慮してもらうにしても。

まだまだロボの力は必要になる。

それなら、ここで休ませても構わないわね。

この街は安全そうだし……。

「さて！それじゃ早速お風呂入って服を洗濯しなきゃ！」

「……その間、私は街を探索して来ますね」

あら……。

フェアが珍しいのね。

第9章 6話

さて……。

このノースの街を歩き回ろうかな……。

こうして一人でのんびり飛び回るのは久しぶり。

ヨーク様と冒険するようになってからは無かった事。

別に私はそれを後悔してるつもりは無い。

あの時……。

ゴブリンから私を助けてくれた時からずっと一緒に冒険して来た。

ハッキリ言って、私はこの妖魔界の人達の事を誰よりも知ってるっ

てだけしか取り柄が無い。

それなのに……。

ヨーク様はそれでも、快く思ってくれてる。

だからこそ……。

私でも何かお役に立てればと……色々お手伝いもしてきた。

そして……。

今はこの街の探索。

初めて見る街であり、エルフ達の生活も見て回りたいかった。

それはなんといいても……。

この街の不思議。

ここは何故平和なのかしら……？

ほら、クロウの魔力によつて廃墟となつてもおかしく無いのに……。

エルフの魔力はクロウの力をも退けるのかしら……。

ドラゴンみたいな、絶対的な魔力があるって感じには見えないけど。

見る限りここはかなり平和で呑気な所……。

和やかに暮らしている感じが見えるわ。

そういえば……。

私達もクロウの力に影響されてない。

これもヨーコ様の能力なのかしら？

あれ・・・？

何かが近づいて来ている。

なに・・・？

あれは・・・。

狼だわ！

それが1匹。

走って来ている。

その狼がこっちに気づく。

知ってる人なのか？

こっちに近づいて来る。

あれ・・・？

彼女は確か・・・。

第9章 7話

フェアが連れて来たのは、思わぬ友人だった。
それは……。

あのワー・ウルフのボスである彼女だった。

「久しぶり!!どうしたの?」

そう……。

彼女たちは残ったワー・ウルフ達と共にルドルフの城へと行ってたはずだけど……。

「へへっ……。ヨココが気になってね。抜け出して来たんだ」
あらら……。

私のために……こんな危険な所まで……。

「行く先は分かっていたからそれほど難しい事じゃなかったよ。」

巨人の口”までは匂いを嗅げたし」

そういえば……。

彼女は狼だものね。

嗅覚はかなり鋭い。

ボタン!!

突然扉が開かれる。

ユニコだわ。

どうしたのかしら……?

あんなに慌てて……。

「とりあえず扉に鍵を」

意味も分からず、とりあえず扉に鍵をかける。

「大変です!ヨココ様!!」

「え?どうしたの……?ユニコ」

「外を見てください……。エルフ達がここを取り囲んでいます!」

え……!?

私は窓からそつと外を見る。

これはどういう事・・・？

エルフ達が私達の泊まってる建物をびっしりと埋めている。
しかも・・・。

手にはなにやら物騒な物が見える。

剣だのハンマーだの斧だの・・・。

何で・・・???

「何やら分からないが・・・。逃げた方が良さそうだな」
確かに・・・。

あれはどう見ても私達を狙ってる。

表情を見ると・・・。

いつものあれだわ・・・。

クロウの魔力にやられている・・・。

理性を失った目・・・。

どういう事・・・？

突然・・・こうなるなんて・・・。

第9章 8話

ドンドンドン！

扉が勢いよく叩かれる。

まずい……。

エルフ達が扉の向こうまでやって来た……。

どうしよう……。

ウルちゃんが窓を開ける。

「屋根に行こう。そこしか逃げ道は無い」

「ちょ……ちょっと待ってよ！私やフェアはいいけど……、ユニコやウルちゃん、ロボはどうなるの？
そう。」

この三人は屋根に登るなんて出来ないわよ。

「私は大丈夫」

そう言うと、ウルちゃんは人間の姿に変わる。

そつえば……。

彼女はこういう能力もあつたんだわ。

だけど……。

ユニコはこうはいかない。

しかも……ロボはまだ目覚めない

かと言ってユニコとロボを置いて行く訳にもいかないし……。
どうすればいいのかしら……。

ガン！！

扉の向こうで何か凄い物音がした！

おそらく……。

斧か何かで破壊しようとしているんだわ。

魔力が得意なエルフが物理的行動をするなんて……。

かなり理性を失っている。

それほど、クロウの魔力は凄いのね。

このままじゃ……。
そう長くは持たない。

。なんとしても……ユニコとロボを登らせる方法を考えないと……。

「ヨーコ様……行ってください。俺は……ここで終わりです」

「何を言ってるのよ！置いて行けると思ってるのー！」
そう。

ユニコとロボを置いて行くぐらいなら……。

このまま一緒に殺される方がマシ。

私は何があっても仲間を見捨てるなんて出来ないー！

「ロボー！」

叫ぶけどロボは目覚めない……。

どうしたのかしら……。

「葉子ー！」

ウルちゃんが叫んでいる。

でも……。

これまで何回も助けてくれたユニコとロボを、どうして簡単に見捨てるなんて……出来ない。

……え？

私のはめている指輪が……光る！？

何……？

頭の中に……言葉が自然と浮かぶ……。

それはまるで……魔法の呪文。

もしかしたら……。

このアーティファクトがなんとかしてくれるかも……。

よーし……。

「『シール』ー！」

すると……。

指輪から光線が出る。

それが……ユニコとロボに当たる。

え・・・!!?

なんと!!!

ユニコとロボが光りに当たると・・・そのまま姿が消えてしまった・
・・・。

どういふ事・・・!!?

ユニコとロボは何処に・・・!!?

第9章 9話

私は辺りを見渡すけど、どこにもいない。
一体何処へ？

「ヨニコ！早く」

きゃっ！

ウルちゃんが私を屋上へと引っ張る。
ん？

なんだろう……。

また言葉が頭の中に響く。

よし……。

「『アーパ』！！」

すると……。

また指輪から光りが表れる。

そして……。

その先から……。

ユニコとロボが出てきた。

「！！ユニコ！！ロボ！」

私はユニコに抱きつく。

良かった……無事だった……。

「ねえ……。ユニコ……大丈夫だった？」

「あつ……はい。何か……急に眠ってしまったような感覚で……

……特に何にも感じて無かったんですが」

そうなんだ……。

でも……ユニコが無事で良かった。

しかし……ロボはまだ目覚めない……。

いったいどうしちゃったのかしら。

これほどの事がありながら起きないなんて。

それにしても……。

この指輪・・・凄い・・・。

これが無ければユニコ達と心中する所だったわよ。

「ヨーコ様！止まってる場合では無いですよ！！」
はっ！

そうだった。

下は今だにエルフ達に囲まれていたんだった。
しかも。

部屋の扉はすでに壊されていて、私の泊まっていた部屋にはすでに
エルフ達がいる。

ここに来るのも時間の問題。

仕方ないわ。

「ユニコ、ロボ。悪いけど、もう一度入れるわよ」
「構いませんよ」

よーし・・・。

「『シール』！！」
再びユニコとロボを指輪の力で入れる。

よーし・・・。

「逃げるわよ」

私は建物の屋根を飛び回る。

第9章 10話

はあ．．．はあ．．．はあ．．．

「大丈夫？ヨーク」

ウルちゃんが心配してくる。

さすがに．．．彼女は身軽だからこういうのは慣れてるかもしれないけど．．．

私はハツキリ言ってきたい．．．

息が切れて来る．．．

「大丈夫です？」

フェアも心配して来る。

「何の．．．修行もしてない普通の女の子だった私が．．．そうそう出来ると思わないですよ」

疲れて足が止まる。

ただ走るぐらいならいいんだけど．．．

建物の屋根から屋根へと飛ぶ行為がきつい．．．

何せ落ちたらかなりの大怪我をするのは間違いない高さだし．．．

「．．．まずい！奴らも屋根を伝って来た！」

ウルちゃんという言葉で後ろを振り向くと．．．

エルフ達も屋根を登って追い掛けて来ている。

でも．．．

足が動かない．．．

走るのは出来るけど．．．

屋根から屋根へと飛ぶのは．．．無理っばいかも。

かと言って下は高いし、降りられたとしてもエルフで埋め尽くさされている。

街中のエルフを敵に回してしまってるらしいわね。

まずいわ．．．

「仕方ない．．．」

ウルちゃんがそう言うと、狼の形態に変わる。

「あたいに乗りな！」

「え？大丈夫なの？」

「それぐらい平気さ！」

・・・よし！

ここはウルちゃんを信用しましょう。

私はウルちゃんの背中に乗る。

「しっかり捕まってるな！」

すると！！

もの凄い勢いで走り出す。

凄い・・・。

そのまま・・・華麗に飛ぶ。

流石に・・・彼女は身のこなしが軽いわ。

スピードはユニコの方が速いけど・・・。

こういう屋根から屋根へと飛び回るといふ事は彼女の方が得意なの
ね。

第9章 11話

なんか・・・。

街の端の方まで逃げれた。

これもウルちゃんのおかげだわ。

外へと続く洞窟が見える。

これはここへ来る時に通った所とは反対側にあるから・・・。

先へ進むための道だと思う。

後ろを振り向くと・・・。

エルフ達がこつちへと向かってるのが見える。

まずいわ・・・。

仕方ない・・・。

「『アーパ!』」

私はユニコとロボを外へと出す。

そのまま私はユニコへと乗る。

「ロボ!乗って」

これでよし!

やっぱり、指輪の中のままは確かに効率がいいけど・・・。

私としてはこうして一緒にいる方がいい。

これでさらに離さなきゃ!

「ユニコはん、そのままちゃんとしがみついてや」

「ロボ!」

起きてたのね!

「大丈夫?」

「わいの事はええ。とにかく前をちゃんと見て・・・」

・・・?

変なロボ。

今、後ろを振り返る余裕なんて無いのに・・・。

・・・?

なんか……。

急に後ろの気配が無くなった気が……。

「ロボ？」

後ろを振り返る。

え！？

ロボが……。

ユニコから降りている。

どうして!？

「ユニコ！待って!!ロボが途中で降りてる!!」

いくらロボが強いかと言っても、あれだけの数と戦うのは無謀よ。

「引き返して、ロボを助けなきゃ……」

「行くんや!!わいの事はええ!!」

「またそんな事を言うの!!」

今度は何を考えてるの？

「もうわいの役目は終わりや……。ええか？わいの本当の役目は妖魔キラーを持つ者を倒す事や。そういう意味ではわいの役目は終わってるんや……」

え……？

「そう……。ヨーコはん、あんたのその優しさで……。わいの機能は停止しようとしている。せやけど……。最後までヨーコはんの役に立ちたいんや」

ちよ……。ちよつと！

「ロボ！何を考えてるの!？」

「わいの旅はここで終わりや……」

な……。何を言って……。

「ホンマに最後まで冒険したかったんや。せやけど……。もう体が言うことを利かないんや……」

「ロボ!!」

「ヨーコはん……。この妖魔界を……。救ってや……」
そんな……。

「ユニコはん！急いで出るんや！最後に・・・最後にここを破壊する」

最後だなんて・・・そんな・・・。

「分かりました」

「ユニコ！！」

突然ユニコは走り出す！

「待ちなさい！！ロボを・・・ロボを助けなきゃ！！」

「こればかりはヨーコ様の命令でも聞けません」

そんな・・・。

「ロボーーーー！！」

「ありがとな・・・ユニコはん・・・。」核融合”！！」

第10章 目

ついにここまでやって来た。

この旅の目的地。

巨人の目。

ここで……。

クロウの居場所を知る事が出来る。

そうすれば……。

クロウを倒す事も出来る。

私の妖魔キラーで。

それが……すぐ側にある。

かなり長くて険しい道のりだったけど。

それも、もうすぐ終わりを向かえようとしている。

ここに来れたのは、みんなの協力があつてこそ。

フェア。

ユニコ。

ウルちゃん。

そしてロボ。

誰一人欠けていたって、ここに来る事は出来なかった。

感謝を言っても言い尽くせないほどだわ。

それにしても。

近くまで来ると……かなり大きな物なのね。

あと……もう少しで……。

ロボ……。

私は改めて覚悟を決める。

そう。

今までは仲間のために死ぬ覚悟はあつた。

でも！

今は……逆に死ねなくなってしまった。

ロボのために……。

何が何でもこの妖魔界を救わないと……。

そりゃあ、確かにこれまでも覚悟はあったけど。

初めての仲間の犠牲が私の中で何かが変わった。

妖魔キラーを倒す運命を持ったロボ……。

その宿命は終わった。

でも私の運命と宿命は終わってない。

だからこそ。

ロボが夢見た、妖魔界の平和を私が実現しなくてはいけない。

ロボに代わって。

絶対にやりとげないといけない。

「ヨーコ様!!」

フェアの声でふと思考を止める。

「どうしたの？フェア」

「何かが来ます！」

まったく……。

のんびりも出来ないわね。

第10章 2話

向こうからやってきた。

目のすぐ側にまで彼は来た。

ヒューマノイドの姿で・・・鎧に身を包んでいる。

全身鎧姿で・・・まるで騎士のようでもある。

「俺こそが四天王の最後の一人、ヘレクロウス様だ！」

・・・律儀な自己紹介ありがとうございます。

「おまえが妖魔キラーを持つ者だな？倒してくれるわー！」

剣を抜く。

来る・・・！

私はそれをなんとか避ける。

さて・・・。

どうしよう・・・。

こういう正当派ってのは初めて。

だからこそ、逆に戦い方が限定される。

鎧に身を固めているから、弱点らしき部分も分からないし・・・。

どう戦えばいいのか・・・。

ロボ・・・。

ううん！

もうロボはいない。

いつまでも仲間に頼っちゃ駄目。

私は妖魔キラーを使わなくちゃいけないんだから・・・。

「ヨーコ様！！」

「フェアやユニコは下がってて！！」

クロウと戦う前に、ここで私は死なない覚悟をしなくちゃいけない。

もしかしたら・・・。

私は今まで仲間に甘えていたのかもしれない。

すぐに頼っていたかもしれないし。

でも・・・もう甘えちゃいけない。

「どうした！妖魔キラーとやらは使わないのか？」
くっ・・・。

そう簡単に使えるようなら苦労はしないわよ。

「何だ？使えないのか？」

「そうよ！」

私はあっさり認める。

どうせ誤魔化したってどうしようもないし・・・。

「そうか・・・。それなら・・・楽勝だな」

うっ・・・やっぱり？

「悪いが・・・死ね！！」

第10章 3話

「どうした!どうした!」

有利だと知ったとたんに、調子に乗って剣を振り回すヘレクロウス。くっ……。

確かに……。

かなり不利。

まずこつちに武器が無いのはいつもの事なんだけど……。

相手が鎧に身を包んでるのは初めて。

しかも……。

かなり身軽に動いている。

普通、ああいう重たそうな鎧を付けてると動きが鈍るはずなんだけど……。

彼にはそれがない。

弱点らしき部分がまるつきり分らない……。

何か無いのかしら……。

いつも私の戦い方はまず弱点を攻める所から始まる。

なにせ……思いつきこつちが不利だから。

まともな戦い方してたんじゃ、こつちが死ぬだけなもの。

何か……何か弱点が……。

「ちよこまかと……、さっさとやられる!!」

衝撃が伝わるほどの勢いで剣を振り下ろす。

……かなり無茶を言ってるわね。

こつちはそう簡単にやられては困るってーのに。

「『粘着地面』!」

え……?

突然……私の立ってる地面の部分だけ柔らかくなる。

な……なんで……?

「魔法をかけてもらった。これで終わりだ」

そ．．．そんなー!!

このままじゃまずい!!

へレクロウスがゆっくりと近づいて来る．．．!

どうしよう．．．。

逃げようにも、体の動きが遅い．．．。

「これで．．．終わりだ」

まだ!!

終わりたくない!!

いやー!!

私はまだここで死ぬ訳にはいかないの!!

ガキーン!

．．．え?

何．．．?

この音．．．。

恐る恐る目を開けると．．．。

そこには剣があつた。

何．．．これ?

見たことの無い剣。

それが．．．私の手に．．．。

もしかして．．．。

これが．．．妖魔キラー!?

第10章 4話

いつの間にか魔法も解けている。
体が普段通りに動く。

それに剣も手の中にある。

これは……。

こっちの有利に変わったわね。

「くっ……」

へレクロウスが一旦下がる。

「卑怯だぞ！ 剣なんか出しやがって！！」

「……あのねえ……。散々卑怯な手段を取った人が言う台詞じゃないわよ……」

本当に……。

今更それを言う……？

「とにかく！ これです勝負は分からなくなって来たわよ！」

そう……。

こっちには最強の武器。

妖魔キラーがある。

いくら鎧で身を包んでいるとはいえ。

皮膚に当たっただけでこっちの勝ちになる。

こっちなると攻撃する所は限定されるけど。

避けるしか無かった状態に比べれば、だいぶ有利になって来たわ。

「それが妖魔キラーか……」

「そうよ。妖魔界の住人にとって天敵とも言える武器よ」

あまりに強すぎるために仲間がいる所じゃ使いづらいけど……。

今みたいに仲間がいない所だと、逆に使いやすい。

私は剣を両手で握る。

さて……。

どこを攻撃すればいいのかしら……。

油断なくヘレクロウスを見る。

こいつの性格からして、まともに戦うつてのは考えない方がいい。また・・・何かを企んでいるかもしれない。

だから・・・。

早めに決着を付けた方がいい。

そうしないと・・・また不利になりかねない。

よし・・・。

狙うは・・・顔の部分！

あそこが一番隙間が広い。

当然よね。

目で見ないといけない部分もあるし、息をするための穴も無いといけない。

それだけ隙間がどうしても出来てしまう。

だから・・・。

あそこが一番狙いやすい！

第10章 5話

私は剣を顔の位置まで上げる。

そのまま・・・水平に横に構える。

これで力を込めたまま突きを行う！

「くつくつく。残念ながらやられる訳にはいかない！！」

え・・・？

何をするつもり・・・？

「『防御付与』！『攻撃付与』『俊敏付与』！」

え・・・？え・・・？え？え？え？

攻撃が避けられた！

な・・・何！？

「守備魔法をかけさせてもらった。これで俺の有利だ」

「なっ・・・。そんなの卑怯じゃない！！」

そんな・・・。

「さあ・・・。来るがいい！」

そんな事言っても・・・。

思いつきり有利なのよね・・・。

こういう時、ああいう風に自由自在に魔法が使えるって羨ましい・・・。

どうしよう・・・。

「死ね！！」

一気にヘレクロウスが接近する！！

駄目！！

反応出来ない！！

その時・・・。

私の妖魔キラーが勝手に動いた。

ガキーン！

妖魔キラーが、相手の攻撃を防いだ。

「おのれ・・・」

ヘレクロウスが震えている。

どういう事？

もしかして・・・。

この妖魔キラーの能力？

さらに・・・。

妖魔キラーが光り輝く！！

次は何！？

・・・あつと言う間に光りは収まった。

何が起こったの？

こっちはなんとも無いけど。

「なっ・・・！？魔法が消えてる？せつかく有利になったのに！！」

これもまた妖魔キラーの力なのかしら・・・。

良く分からないけど・・・でも流れはこっちに来ている。

よーし！

「もう終わりよ！ヘレクロウス！」

私は叫ぶと・・・。

剣を構えて走り出した！！

第10章 6話

「はあああああ!」
ついに!!

剣がヘレクロウスの鎧の隙間を突いた!

「ぐっ……!!」

決まった!!

「やるなあ……。これならクロウも倒せそうだな……」

え……?

なんで……?

ヘレクロウスがクロウを呼び捨てに?

四天王じゃないの?

クロウの部下なら……。

様付けしてるはずなのに……。

「あー、まいった。我が身を犠牲にして確かめて正解って所だがなへ……?」

どういう事?

「実はな……。俺はあんまり奴の事を好きじゃなかったんだ」

ええ!?

「だがな……。俺も奴の魔力に縛られてしまった。この妖魔界が好きだったんだがなあ……」

この人……。

これまでの敵とは違う……。

「だから、この妖魔界を救う奴と戦って……。それで消えるなら本望よ」

ヘレクロウス……。

「だから……。少々姑息な手を使わせてもらった。けどな……。奴はもつと卑怯だぜ?気をつけな……」

まさか……。

クロウの魔力にやられながらも、ここまで自我を持つてるとは……。
ううん。

たぶん、最初は本当にやられていたんだと思う。

だけど……この妖魔界を思う心が正気に戻したんだと思う。

そしてその罪滅ぼしに……私と戦う事を決めた。

あえて卑怯な手段を使いながらも。

「頑張れよ」

そう言い残すと……。

へレクロウスは消えてしまった。

「……何だつたんですか？あれは……？」

呆然と見守っているフェア。

「あいつ……。私に許してもらいたかったのね……。この妖魔界を混乱させた事を」

あっさり引いた所を見ると……。

クロウの完全な手下つて訳でも無かった。

ここにもまた、悲劇に巻き込まれた人がいた。

と……とにかく。

これで……いよいよ巨人の目に行ける訳ね。

第10章 7話

ロボ・・・ついにここまでやって来たわよ。
巨人の目。

まさに目のように丸く・・・かなり巨大。
ここに来ればクロウの居場所が分かる。

思えば・・・。

私はここに来る為に長く苦しい旅をしていたのね。
だけど・・・。

それも終わりを迎える。

ちよつと寂しい気もするけど・・・。
だけど！

この妖魔界を救う為。

私はやり遂げなくてはならない。

このまま・・・クロウを放置する訳にはいかないから。
私は・・・そつと目に手を触れる。

ちよつと冷たい・・・。

こうしてみると・・・。

巨大なガラス玉って感じ。

それほど綺麗でも無いけど・・・。
何か不思議な感じはする。

たぶん・・・魔法の力があるのかもしれない。
それとも・・・これもアーティファクト？

何でもいいわ・・・。

クロウの居場所を・・・教えて・・・。
自然と目を閉じる。

何か・・・聞こえるような・・・。

この目からなのかな・・・。
なんだろう・・・。

「葉子？」

え！？

目を開ける。

え・・・？

え？

ええー！ー！！？？

ここは・・・！？

何で・・・？

どうして？？？

「どうしたの？葉子。ぼんやりしちゃって」

「お・・・お姉ちゃん・・・」

そう・・・。

ここは・・・。

私の生まれ育った家。

どういう事？

さっきまで・・・妖魔界にいたのに。

「大変！戻らなきゃ！！」

「戻る？何処に？」

「決まってるじゃない！！妖魔界によ！！」

何で戻って来たのか分からないけど・・・。

私は妖魔界に戻らなきゃ。

フェアを・・・ユニコを・・・ウルちゃんを・・・そしてみんなを

助けなきゃ！！

「妖魔界？何言ってるの？」

あれ？

そういえば・・・。

「お姉ちゃん・・・。そういえば旅行に行ってたんじゃない？」

そう・・・。

家にいるって・・・おかしくない？

それとも、もう帰って来たのかしら

「ああ……。あれね……。うん。実は行くのを止めたの
え？
どういふ事……。？」

第10章 8話

違和感を感じたのは、お姉ちゃん言葉がきつかけだった。
行くのを止めてた・・・？

この好奇心の塊のような人が・・・？。

お姉ちゃんではあり得ない。

いくら止めても聞かずに、最後までやりきっちゃうような人のよ
！？

それが・・・。

「さあ。久しぶりに一緒に外食でもしない？」

私の手を取るお姉ちゃん。

だけど・・・。

私はその手を振り払う。

「葉子・・・？」

「あなた・・・。お姉ちゃんじゃないわね！！」

違う！

ここは・・・私の世界じゃない！！

やはり・・・妖魔界のままなんだわ。

そうじゃなきゃ・・・。

まだ妖魔界を救ってもいないのに戻るなんて・・・ありえない！

「な・・・何言ってるのよ・・・。私は・・・」

「違う！一旦やると言った事を途中で投げ出すなんて・・・お姉ち
ゃんじゃない！！」

そう・・・。

例えこの家にいるとしても。

旅行には行ってるはず。

「何を言ってる・・・」

「そうよ！だいたいお隣の健一さんはどうなったの？なんで一緒に
やないの？」

「別にあいつなんていなくても・・・」

これでハッキリと分かった！

この人はお姉ちゃんじゃない！！

生まれた頃からずっと一緒に、まるで姉弟か・・・友達には恋人や夫婦とまで言われるぐらい仲が良いのに。

それを・・・。

”いなくても”なんて言葉は絶対に出ない！

「あなたはお姉ちゃんじゃない！！」
ハッキリと言う。

「そう・・・」

お姉ちゃんはがっくりと肩を落とす。

うん・・・。

これはお姉ちゃんじゃない。

これは・・・お姉ちゃんの姿を借りた違う人！！

「私は・・・クロウを倒し妖魔界を救うまでは戻れない！！」

「さすがね・・・、そこまで美喜子って人を信じてるだなんて」

え・・・？

それじゃあ・・・やっぱり・・・。

「それに・・・危険を分かっておきながら戻りたいだなんて・・・
そこまでハッキリ言われたら仕方ないわ」

すると・・・！！

家の風景が一気に暗くなる。

そして・・・。

お姉ちゃんの姿も消える・・・。

「ごめんなさい。この力を使ったための試練だったの」
そうなんだ・・・。

第10章 9話

その声の正体は……。

一人の女性だった。

見た事ないけど……何かどこかで会ったような感じもする。
変な感じ……。

翼の形のアクセサリーを兜に付け、胸鎧だけを付けている。

剣は持っていないみたいだけど……。

左手に宝石みたいなのが見える。

何か神話で見たような感じもするけど。

それじゃあ……まさか！

「私はワルキュリア。この世界の神様です」

この人が……この世界の神様……!?

「ごめんなさいね。あなたを異世界に呼ぶような事をして……」

「え？……それじゃあ……ワルキュリア様が……!？」

それは……初めて知ったわ。

「はい……。私は私である混乱を収める為に手がいっぱい……

。仕方なく妖魔キラーの能力を持つあなたを呼ぶ事にしてしまい……

」

「別に……最初の頃はともかく、今は恨んでないわよ。今は自分の意志で妖魔界を救いたって思ってるんだから」

「はい……。それを確認するために今の幻覚を起こさせてもらいました」

ふーん……。

あれ？

「ちよつと待つてよ。私を呼んで起きながら試したって」

「それも仕方ないのです。このアーティファクトを作動させる為の必要な事なのですから」

なるほど……。

「それに私が直接呼んだ訳ではありません。もっとも私の作ったアイテムの効果で呼ばれたのだから、同じ事だと思いますが」
そっか。

やはり、アーティファクトの効果で呼ばれたのね。

「とにかく・・・クロウの居場所は教えて貰えるんでしょう？」
そう・・・。

私はその為にここまで来たんだから。

そういうまどろっこしい事はどうでもいい。

「はい・・・。もちろんです。あなたの覚悟が知りたかっただけですから」

ワルキュリア様も人が悪いわ・・・。

「それでは・・・クロウの居場所を教えます！」
いよいよね・・・。

私は緊張する・・・。

「その場所は・・・」
これで・・・ようやく・・・。

この旅も終わるのね。

クロウを倒す時がやって来た・・・。
ちよつと寂しいけど・・・。

やらなきゃいけない事。
そして・・・。

ゆっくりとワルキュリア様は私の前に映像を見せる。。
そこは・・・。

私にとつても意外な場所だった・・・。

第10章 10話

「ヨーコ様・・・？」

はっ！

フェアの言葉で気がついた。

どうやら元の巨人の目の前へと戻っているみたい。

今までの事がまるで夢のような感じ・・・。

でも・・・。

私はハッキリと覚えている。

クロウの居場所を。

「大丈夫ですか・・・？」

「ええ。大丈夫よ、フェア」

どうやら・・・。

他のみんなは何が起こったのか分かってないみたいね。

「クロウの居場所を教えてもらったの。ちゃんと・・・」

「そう・・・。それで・・・何処なんです？」

私は辺りを見渡す。

みんなは不思議に思ってるけど・・・。

あつた！

私は無言で進む。

「ちょ・・・ちよっと！ヨーコ様・・・何処へ？」

「決まってるでしょう？クロウの所よ」

そう・・・。

それはあまりにも意外だったけど・・・。

ワルキュリア様の言葉だもの。

間違ってるはずがない。

私は意を決して進む。

「分かるんですか？誰の案内も無しに？」

「ええ」

私はキツパリと言う。

そこは……。

巨人の目を越えてさらに奥へと行く。

そこには腰ほどの高さもある雑草が生えていた。

普通、こんな所を進んでも、その内方向が分からなくなる。

でも……。

そこには、一人が通れるだけの道があった。

良く見ないと絶対見落とすような所だけ。

そこを私は進む。

そして……。

進んだ先にあつたのは……。

私の求めた場所。

「えっ……!!」

フェアが驚いている。

いえ、驚いてるのはフェアだけじゃない。

ユニコモウルちゃんも驚いている。

そう……。

そこは私も良く知ってる場所だった。

そう……。

そこには……。

見慣れた……。

ルドルフのお城が見えていたのだった。

第11章 敵

「な・・・なんで!?!」

フェアはしきりに驚いている。

それはそうだろう。

ここにきて、私達の常識である”世界は丸い”というのが出てくる
とは思わなかったし。

「だいたい”巨人”っていうのに引っかかるでしょうね。」

この大地に巨人が眠っているがごとく、真っ平らな所だと思っっちゃ
うだろうし。

「まさか!!! ルドルフ様がクロウ・・・!?!」

フェアの言葉に・・・しかし私は首を横に振る。

違う。

ルドルフがクロウじゃない。

クロウは・・・違う人物。

私にはその心当たりがある。

私はそのまま・・・。

ある一点へと向かう。

そこは・・・私も来た事のある場所。

思えば・・・。

私はそこから旅が始まったと言っても過言じゃない。

全ての始まり・・・。

その場所へ・・・。

私は・・・そこへと入る。

「おや・・・。また久しぶりな顔じゃの」

そう・・・。

そこは・・・。

「ドルイドのオババ・・・」

ユニコがつぶやく。

「まさかとは思ったけどね。でもよくよく考えてみれば当然の話よね」

「なんじゃ……。いきなり……」

そう……。

私には確信があった。

「どういう事ですか……。？ヨーコ様……」
フェアが聞いて来る。

「つまり……。ドルイドのオババがクロウだって事よ」
そう……。

それしか考えられない。

みんなは驚いているけど……。

確かに……。

ありえないと思うかもしれない。

けど……。

ドルイドのオババこそがクロウ。

そう考えれば……。

意図が分かる。

第11章 2話

「まさか・・・巨人の目が・・・そう言っただんですか？ドルイドのオババがクロウだって！」
フェアが叫ぶ。

「うん・・・。ルドルフの城の映像だけだったわ。」
そう・・・。

それしか見え無かった。
けど・・・。

私はその映像だけで十分分かった。
まずルドルフがクロウでは無い。

これでも人を見る目は確かだもの。
あいつがクロウって事はありえない。

それなら・・・このドルイドのオババの方がありえる。
そして、私は今回の真実にたどり着いた。

何故・・・こんな事になったのか。
何故・・・私を呼んだのか。

そして・・・。
クロウの正体を・・・。

「だいたい・・・。不思議じゃない？なんで”巨人の目”からさらに奥へ進んだら、ここへたどり着いたか」

これはみんなにとっても意外な事でしょう。

今まで巨人の目に行くには、それぞれ目標となる地形を辿らないと行けない、遠い所だと思っていた。

それはルドルフやフェアもそうだった。
なのに・・・。

何のことはない。

ちょっと反対側に行くだけで、そこにたどり着けるなんて・・・誰が思うだろうか。

つまり……。

ここに来て、私達の世界の常識が妖魔界にも当てはまるという事。そう……この妖魔界も丸いという事。

つまり、私達は必死になってぐるっと回ったという事。

ただ……目標もなく巨人の目に行くのは難しい。

だから今まで他の人が巨人の目に行った事が無かったんだわ。

だけど……。

このドルイドのオババは違った。

つまり……。

巨人の目へ行く近道を知っていた。

だからこそ……。

今まで占いが当たっていたんだわ。

あの巨人の目の力を使えば知りたい事が分かるものね。

だけど……。

今回だけは違った。

そう……。

今回……私を呼んだ理由それは……。

「今回……私を呼んだのは……、わざと遠回りの道のりを行かせる事によって……、その道中や四天王によって確実に私を殺す事だったのね」

第11章 3話

そう……。

クロウは妖魔界の住人。

当然……私の妖魔キラーが弱点。

そんな存在を放っておける訳も無かった。

そこで……今回の作戦を考えた。

それは……。

今まで隠していた巨人の目への行き方を利用した方法。

この困難な道のりを、あえて行かせる事で私を殺す事。

確かに……。

一歩間違えれば私は死んでいた。

そうなればクロウの思う通りだった。

だけど……。

私は巨人の目までたどり着いてしまった……。

そして……。

そこでクロウの居場所を知る事により……。

この計画を見破る所までたどり着いた。

「もう誤魔化しても無駄よ。あんたがクロウで……今までの占い

は”巨人の目”の力のおかげだって事はバレてるんだから」

そう……。

ここにたどり着いた時点で……。

クロウの計画は崩れている。

「あなたの唯一の失敗はね……。あの”巨人の目”には続きがあるって事を知らなかった事よ。あなたには私が死んだ映像が見えていたかもしれないけれど、私はこうしてここにたどり着いている！」
ハッキリ言って、何回死ぬような目に合ったか分からないけれど……。

そのどれかを見て安心して私を呼んだに違いない。

でも、続きがあるという事を知らないために私は死ぬ事は無かった。

「そうかい……。全てバシてるのか……。ワルキュリアめ……。俺が散々利用してやった仕返してやつか」

突然……。声が変わる。

おばあちゃんの声でなく……。若い男の声。

これこそが……。クロウの声なのね。

「はっ!!」

突然!!

手から魔法が放たれる!!

私達は飛び下がる。

攻撃魔法!?

「みんな!逃げて!」

私達は慌てて洞窟を出る。

振り返るとクロウのいた洞窟は崩れ落ちている。

だけど……。

その奥からクロウが表れた。

やはり……。

読み通りだったわ。

そして……。

ついに……。

ここまで来たのね。

クロウとの対決。

第11章 4話

「よくドルイドのオババを疑えましたね」
フェアが感心する。

「まあね。私は部外者だし。だいたい変だとは思ったのよ。だって安全なルドルフの城が近くにあるのに、なんでそこへ逃げないんだらう？って」

一歩外へ出たら危険だって事は私ですら分かってる。
それなのに避難しないって事は・・・逃げる必要が無いのか逃げれないのかのどつちか。

そこでワルキュリア様がこの城への道のりを見せた事で分かった。
この城の周りで怪しい人物はドルイドのオババだけだと。

「みんなは下がってて。こいつだけは・・・私一人の力で倒したいの」

私はそう言った。

そう・・・。

こいつだけは許せない・・・。

このクロウだけは・・・！！

私一人の力で・・・倒す！！

「出来るのか？」

クロウが凄むけど、私は受け流す。

「出来るわよ！！この・・・妖魔キラーで！！」

私は剣を出す！

あの洞窟に行った時点で・・・。

戦う事はすでに決意していた。

当然・・・剣を出す準備も万全だった。

私は剣を構える。

みんなは後ろで見守っている。

手出ししてもらいたくないから・・・。

ありがとうわ。

「くっ……。だが……。それは当たらなければいい！」
また！

手から攻撃魔法が！！

私は避ける。

あれは……。

かなりやっかいね。

こっちは剣だから、接近しないといけないのに……。

まずはあれをなんとかしないといけないわね。

次々と攻撃魔法を打つクロウ。

近づく手段が無い……！

でも……。

一人の力で倒したいと言ったからにはなんとかしたい。

……。そうだわ。

この指輪。

この指輪はアーティファクト。

まだまだ魔法の力が込められているはずだわ。

これを使えば……。なんとかなるかも。

まだ詳しい使い方は分からないけど……。

剣と同じ要領でやってみる！

避けながらも……。

精神を集中する！！

第11章 5話

クロウの攻撃魔法が来る！

だけど……。

指輪の力が発動する！！

なんと！

風の楯が表れた！！

バシユイ！！

これで魔法も防げる。

「なっ……。」

クロウも驚いている。

だけど……！！

この機会に……！

一気に近づく！！

これで一気に片を付ける！！

「くっ……。」

クロウも慌てる。

だけど……。

こいつだけは……。

絶対に許さない！！

「はああああ！！」

だけど……。

クロウが攻撃魔法を地面にぶつける！

くっ……。

一旦下がる。

「俺はここで死ぬ訳にはいかないんだ！」

「何言ってるのよ。自分の事しか考えてない奴が……周りの人を巻き込んで！！」

別に自己中心的なだけなら相手にされないで済む。

だけど……。

こいつは周りの人達も巻き込んで……悲しい思いをさせている。

「あんだだけは……絶対に許さない!!」

「何言ってるんだ。自らの欲望を満たすのは誰にでもある事だろ？」

「そうだとしても……そうだとしても！そのせいでどれだけ周りを悲しませてるの!!そんなのは間違ってる……。目標に到達するってのはそういう事じゃないの!!」

「何言ってる。おまえだって……」巨人の目”にたどり着くまでに……どれだけ周りに迷惑をかけてる？その……おまえの仲間とやらに」

違う……!!

確かに……。

フェアやユニコには迷惑をかけたかもしれない。
ウルちゃんにも知らない所で苦勞をさせて来た。

そして口ポ……
でも……。

私の仲間は自分の意志でやってくれた……。

大事な仲間……。

だから……。

「違う!!」

第11章 5話（後書き）

次回更新は10月26日（月）予定です。

第11章 6話

私は気持ちを落ち着かせる。

「くっ……。愚かな事を……」

クロウがあせっている。

あまり感情的になりすぎると、その隙を突かれる。

冷静に……。精神を集中して……。

こっちのペースにしないと……。

そうよ。

こういう奴だつて分かっていた事じゃない。

落ち着かなくちゃ。

私は剣を構える。

行くわよ……。

妖魔キラ！。

「はあああああ!!！」

クロウに向かって突進する!!

「くっ……。!!！」

クロウはまたもや魔法攻撃を放つ。

だけど……。

私は怯まずにそのまま突き進む!!

痛みを感じるけど。

今はそれを気にしている場合じゃない。

例え傷があつたとしても。

後でユニコに治してもらおう。

だから今は。

痛いなんて言つてられない!

「はあああああ!!！」

クロウも下がるが……。

だけど……。

私は構わず……。

そのまま……。

行く！

下がってなんていられない！

そして斬りつける！！

バシユ！

やった！

クロウの体に完全に……当たった！！

うん、間違いなく。

当たった。

すると。

そのまま……。

クロウの体が消えていく……。

やっと……。

決着が付いた……。

私は……。

クロウを倒すためにここまで来た。

それが……。

ようやく実った……。

ふう……。

「ヨーコ様……」

私は剣を引っ込める。

ユニコやフェア、ウルちゃんと抱き合っ。

やった……。

私は……。

達成したんだわ……。

第11章 7話

「危ない!!」

・・・え？

それは突然だった。

ウルちゃんが・・・。

私をかばっていた。

鋭い針のような武器が・・・。

ウルちゃんの体を貫いていた。

そのおかげで・・・。

私には到達していない。

ウルちゃんの体がゆっくりと倒れる。

まるで・・・。

スローモーションのように・・・。

「ウルちゃん!!」

どういう事!?

もう・・・クロウは倒したというのに・・・。

なんで・・・?

この武器は・・・何!?

「ちっ・・・。仕留めれなかったか」

え・・・!?

そこには・・・。

クロウが立っていた。

そんな・・・!!

私の妖魔キラーで切ったのに!!

そして・・・。

消えていく姿も見ているのに!!

なんで・・・。

「なんで生きてるのよー!!」

信じられない光景を見ていた。

「くっ……ユニコ！」

私はユニコを呼ぶ。

ユニコが治癒の力を使ってウルちゃんを治している。

「これは……かなりやばいですよ。急所を貫いたらしく……ど
んどん体力が弱まっている！」

そんな!!

ユニコが焦ってるなんて……。

でも……どんだん傷が治っていく……

「くっ……。つくづく邪魔な奴らよ。お前らさえいなければ、そ
の娘は死んでいるものを……」

こいつ……。

こいつのせいで……。

ウルちゃんが……。

こんな目に合ってしまった。

「喋るんじゃないわよ……。私は……ここまで怒りを覚えた事
は無い……！」

妖魔キラーで切ったはずなのに……!!

なんか……。

怒りがこみ上げるわ!!

第11章 8話

絶対……。

こいつだけは許す訳にはいかない!!

今までにないぐらいに……。

神経をクロウに集中する!

こいつだけは……。

何が何でも……倒す!!

おそらく……。

何か……能力を使ったに違いない。

私はこれまでいろんな常識外れの体験をしているから分かる。

そう考えると……。

手応えが無かった感じもした。

くっ……。

そう思うと……。

私の油断もあったんだわ……。

ごめんなさい、ウルちゃん。

だからこそ!

今度こそ……。

今度こそ……仕留める!!

必ず!

ピカーン!!

えっ……!!?

指輪が光る!?

何っ……!!?

その光が……。

私を包む……。

その光が消えると……。

私の体に鎧みたいのが包まれていた。

だけど・・・まるでつけてないぐらいの軽さ。

これは一体・・・!?!?

「なっ・・・!?!?」

クロウも驚いているけど・・・。

これもアーティファクトの効果なんだわ。

ありがとう。

あなたも私を助けてくれるのね。

「はっ!」

一気に飛びかかる!

速い!!

スピードも増している!!

「この!!!」

クロウは魔法攻撃をしかける!

だけど・・・。

私の前に楯が表れる!

それを左手に付け・・・。

それで防ぐ。

「な・・・。そんな・・・馬鹿な・・・」

「何言ってるのよ。あんたが生きてる事自体がありえないのに」

そう・・・。

こいつは・・・。

みんなの為に・・・仲間の為に・・・。

倒すべき存在!!

第11章 9話

私は剣を構える。

今度こそ……。

妖魔キラーで……倒す!!

「はっ!!」

一気に斬りつける!!

また……姿が消えたけど……。

やはり……手応えはあったみたいけど。

ううん。

これも奴の手口なんだわ。

これをなんとかしないと……。

クロウを完全に倒す事は出来ない。

どうすれば……。

『目に頼るんやない!!』

え!?

今……ロボの声が聞こえた気がしたけど……。

まさか……でも……

例え幻聴だとしても私は嬉しかった。

今の状態でのロボの声は百人力だわ。

うん、そういう事ね。

ドルイドのオババの姿をしていたから、あれが仮の姿かと思ったけど……。

こいつはおそらく……。

いくつかの姿に変身出来るのかもしれない。

そうなる……。

真の姿はまるで違う形なんだわ。

それをロボは言いたいんだと思う。

私は目を閉じる。

そして……。

気配を探る……。

……ん？

指輪から何やら力を感じる。

どうやら……。

手助けしてくれるみたいね。

ありがとう……。

あなたも……いてくれたこそ私はここにいる。

色々助けてくれたわね。

あなたも大事な……私の仲間よ。

……？

……何か……。

ぼんやりとだけど……。

邪悪な意志を感じる。

とても……。

憎たらしい気持ちを感じる。

これが……。

クロウの……真の姿。

これね……。

これに向かつて……。

「はっ!!」

一気に……斬りつけた!!

第11章 10話

「ぎいやああああ!!」

凄まじい悲鳴が響いた。

つまり……。

真のクロウを……斬った証拠。

妖魔キラーの力で……クロウが消えて行く……。

「そ……そんな……」

どんだん……。

姿が崩れて行く……。

やっど。

邪悪なる者が消えていく。

「悪い奴の末路は……決まってるのよ」

こいつのせいだ……。

妖魔界を混乱にさせてしまった。

そして……。

みんなを傷つけてしまった。

みんなを悲しませてしまった。

みんなを苦しませてしまった。

だけだ。

もうこれで終わり。

二度と、こいつに苦しめられる事も無い。

そうだ……!

「ウルちゃん!!」

大丈夫かしら……。

「大丈夫です。今は気絶してるだけですから」

そうなんだ……。

良かった……。

「今度こそ……。終わっただけですね」

「そうね・・・」
そう。

今度こそ・・・。
きちんと倒した。

クロウの形をしていたのは・・・。
今や完全に無くなっている。

邪悪な気配も消えている。

そう・・・。

今度こそ・・・。

終わったんだわ・・・。

みんなありがとう。

そして・・・。

ロボ・・・。

私・・・ついに倒したわよ。

最後の最後で・・・私に力を貸してくれてありがとう。
やっぱりあなたは最高の仲間だわ。

例え遠くに離れていようと。

例え今すぐに会えなくても。

私達の絆はずっと繋がったまま。

うん。

私は一人で倒したんじゃない。

フェア。

ユニコ。

ロボ。

ウルちゃん。

みんなの力で倒せた。

みんな・・・ありがとう。

第12章 城

私は……。

再びこのお城に戻って来た。

やっと帰って来た……。

まさにそんな感じね。

中に入り、ふと……。

私は肖像絵に目が止まる。

そう……。

初めてこの城に来た時にも、確かこの絵を見たんだわね。

「……あっ!!」

私は気づいた。

フェアも……ユニコもウルちゃんも驚く。

そう……。

その絵の……鎧。

それは……。

指輪の力で、私が身に付けた鎧とまったく同じ。

そして……。

持っている剣も妖魔キラーそのもの。

まさか……。

「どうした?」

ふと……。

ルドルフが姿を現す。

「ルドルフ……。この絵は……」

「ああ……。これか……。俺の祖先が描いたと言われる『伝説の少女』という題名だ」

伝説の少女……。

「もし……この妖魔界が混乱する時が来たら、この少女が現れて……妖魔界を救うと言っていた」

これは・・・まさに・・・。

「私・・・、クロウと戦ってる時に・・・この鎧を身につけてたわ・・・。そして・・・この剣は妖魔キラー・・・。私がその『伝説の少女』かどうかは知らないけど・・・、私の格好はまさにこの絵のそのままだわ」

まさか・・・。

この城に来た時に見ていたのは・・・。

将来の自分の姿になっていようとは・・・。

「そうか・・・。でもクロウを倒し、この妖魔界を救ったんだろ？

それなら・・・まさに君は『伝説の少女』だ」

まさか・・・。

「でも！私一人の力で救った訳じゃない！フェアが・・・ユニコが・・・ウルちゃんがいってくれたからこそ！」

そして・・・。

今はもう眠っているロボがいってくれたから。

みんながいってくれたからこそ。

私はこの妖魔界を救う事が出来た。

「謙遜するな。君のその人柄もある。その人柄だからこそ・・・みんなは力を貸した訳だろ？」

ルドルフの言葉に・・・みんなは頷く。

「さあ！とにかく今は祝おうじゃないか！！！」

第12章 城（後書き）

残り少々となりました。

あと少しだけお付き合い下さい。

第12章 2話

そこには……。

かなりの大広間だった。

そこに数え切れないほどの、妖魔界の住人がいる。

いろんな姿の……いろんな種類がいる。

みんな……ここへ避難して来たのね。

「みんな！聞いてくれ！！」

一気に周りが静かになる。

じつと……ルドルフを見ている。

「紹介しよう。この妖魔界を救ってくれた……救世主達だ！！」
私達が出る。

実は私は純白のドレスに着替えさせてもらった。

えへへ。

こういう時じゃないと、こういう服は着れないと思うから。
すると……。

割れんばかりの凄い拍手の音が聞こえる。

「そこで……救世主を祝う宴を開こうじゃないか！！」

そうルドルフが言くと……。

うおー！！という歓声が聞こえた。

凄い……。

みんな喜んでいる。

良かった……。

これで……安心出来る妖魔界になる……。

「おう。俺もその宴に参加してもいいかな？」

そう言っつて窓の外に表れたのは……。

ドラゴンだった！

あの……途中で立ち寄った街のドラゴンだわ！！

そして……。

もちろんその街の人達も城へと入って来る。

無事に平和になったからこそ来れたのね。

「よし！今日はたっぷり食べて、飲め！！」

ふふっ……。

どんどんと食事が運ばれて来る。

「……準備がいいわね」

思わず本音を言う。

「なに。邪悪な気配が消えた時から慌てて準備しただけなんだがなへえー……。

ルドルフも分かったのね。

「そうだ！クロウの正体なんだけど……あのドルイドのオババだったわ」

「なに！？」

これは……。

さすがにルドルフでも驚いたみたいね。

「今回の事は……自分を殺すかもしれない妖魔キラーを持った私を殺すために……わざと遠回りの旅をさせる計画だったみたいね」
妖魔界の住人なら、妖魔キラーの存在を無視する訳にはいかないものね。

放っておいても来るというのなら、あえて呼んで危険な旅をさせる。そうすれば……。

その旅の途中で死ぬ事もありうる。

当然……。

私も仲間がいなければ、クロウの思うとおりだったかもしれない。だけど……。

私は無事にたどり着いてしまった。

これはクロウも計算違いだったみたいね。

「わざと？」

「そうよ。」巨人の目”がここから割と近くにあったから……それで占ってたのよ。そりゃあ……あの力を使えば百発百中よね」

「まさか!！」

「嘘だと思っなら、”巨人の足”を目標に、反対側へまっすぐ行ってみなさい。よく探せば一人分の道もあるわよ。でも私だって”巨人の目”から真実を教えてもらうまで分からなかったけど・・・」

まさかこの妖魔界も丸いという常識が通用するとは思って無かったけど・・・。

「そうか・・・。俺もクロウに騙されていた・・・という訳か」

「仕方ないわ。それこそ”巨人の目”に聞かないと分からないもの。正体を明かさない限り・・・。

信用しても仕方無いわ。

あいつはずっと・・・ドルイドのオババを隠れ蓑にしていたんだから。

そして・・・”巨人の目”を悪用していた。

ただ唯一の誤算は、自分の待つ運命を知っていなかった事。

”巨人の目”の唯一の欠点をあいつは知らなかったんだわ。

自分を利用していた物に裏切られるなんて、皮肉なものね。

第12章 3話

一昼夜に続く宴も終わりを迎えようとしていた。さすがに・・・あちこち食い潰れていたり飲み潰れているのが見えるしね。

「どうしても帰るのか？」

ルドルフが訪ねる。

「ええ。妖魔界は救ったし・・・私には元の生活もあるから
そう・・・。」

今はお姉ちゃんは旅行に行ってるけど、帰って来た時にいなかったら心配されると思うし。

「そうか・・・。残念だな・・・。君にはこの妖魔界の女王になってもらおうと思っていたのに・・・。」

・・・はい？

「じよ・・・女王・・・？」

「そうだ。俺が今の王だからな。君が女王」

え・・・と・・・。

「それって・・・どういう・・・意味？」

「だから。俺と君が結婚してだな・・・。」

・・・はい？

えつと・・・。

え！？

「えええええー！！！」

け・・・結婚！？

「何でそんなに驚く？」

「だって・・・。なんで結婚しなきゃいけないの??？」

そうよ。

そりゃあ・・・。

確かにルドルフは格好いいわよ。

でも……。

それとこれとは違う。

だいたい……私はルドルフがどういう人なのか、ちゃんと分かってもない。

好きだとか嫌いだとか……。

そういう感情すらまだない状態なのに……。

「だって……。俺はこの妖魔界を平和に保つ存在で……君はこの妖魔界を平和にした存在だろ？」

「あのねえ……。結婚って……。そんな単純なもんじゃないのよ……。」

頭痛い……。

それは……。さすがにその妖魔界の常識に合わせたく無いわ……。

「そうかな……。俺は君の事が好きだが？」

「はい？」

目が点になる。

「初めて見た時からかな……。今の君も十分魅力的だが……。」

「だからって！！私の意志はどうなるのよ！！！」

勝手に決めないでよ！

「えー？いいじゃないですか、ヨーコ様」

「フェア！！……とにかく……。私は元の世界に帰る！！」
もう……。

これ以上ここにいたら、うやむやのうちに結婚させられそうだわ。

「大丈夫だ。これからゆつくりと……。俺の良さを教えてやる」

「いやー！！！！帰して！！！」

第12章 4話

冗談じゃない！

いくらなんでも結婚だなんてありえない！！

「何をそんなに嫌がっているんですか？」

「あのねえ・・・フェア・・・」

どうもこの辺りの感覚はみんなとは違ってるらしい。

すでにこの妖魔界では、祝福ムードで漂っている。

あの発言の日からすでに3日。

これ以上いたら、本当に結婚させられそうだわ。

「ルドルフ！！」

私は王の間に入る。

その大きな椅子に悠然と座っている。

そりゃあ・・・確かに美形であるのは認めるけど・・・。

そういう問題じゃないわよ。

「どうした？」

「前にも言ったと思うけど。私、帰りたいんだけど
そう。」

このまま妖魔界に留まりたく無い理由はもう一つある。

「私は突然ここに来てしまった。家ではお母さんやお姉ちゃんが心配していると思うの。クロウを倒すまでは帰る事は考えて無かったけど・・・こうして平和になったんだから、まずは帰して」

これが本当に私が帰りたい理由。

結婚とかは別に拒否し続けていればいいだけの話だけど。

お母さんやお姉ちゃんに心配をし続けてまで、ここに留まる事は出来ない。

「例え心配していなくても、理由を話して・・・また戻ってくれば
いいだけの話でしょ？」

正直、私はここを気に入っている。

命がけで冒険をして救った場所というのもあるし。

ここにはフェアやユニコ、ウルちゃんもいる。

そして……。

またあそこにも行きたい。

たぶん、あのままにしておいた方がいいと思うけど。

もう安全になったから、何度でも行きたい。

「それがな……。そうは簡単にはいかない」

え？

「どういう事？」

「今回おまえを呼んだのは、このアーティファクトを使ってなんだが」

そう言つて、小さなベルを取り出す。

「これはこの妖魔界と異世界とを繋ぐアイテムなんだが……。残念ながら3回しか使えない」

3回……？

「だったらいいじゃない。もう一度戻してまた私を呼べば……」

「忘れたのか？これはすでに2度使つてる」

2度……？

私の他に誰が……。

あつ！

「ロボ!!」

「そうだ。あいつを呼ぶのに、すでに一度使っている」と……いう事は……。

私が戻つたが最後……。もう妖魔界には来れない事になる……。それは……。困る。

「なんだ。そういう事なら仕方ない。帰るのは諦めるわ」

「やけにあつさりしてるな」

「当たり前じゃない。私だつてこの妖魔界が好きなんだもの。妖魔界に戻れないなら帰るのを諦めるわ」

「ヨーコ様!!」

フェアが抱きついて来る。

「そりゃあ、確かにお母さんやお姉ちゃんの事を考えると・・・困る話だけど、大丈夫。分かってくれるわよ」

私はみんなと・・・そしてこの妖魔界を離れたく無いし。

「すまない・・・」

「いいのよ。私はここに来れて良かったと心の底から思ってるんだから」

お母さん・・・お姉ちゃん。

私はもう帰れないけれど。

この妖魔界で元気に楽しく過ごそうと思います。

それは、この妖魔界が好きだから。

そして・・・。

ここに住むみんなが好きだから。

「それなら、すぐにでも結婚の準備を・・・」

「それは嫌ーーーーー!!」

第12章 4話（後書き）

今回をもちまして「妖魔界」は最終回となりました。
読んでくださった全ての読者の方々に、感謝をいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736f/>

妖魔界

2010年10月28日06時47分発行